

消閑雜抄

八

大正十五年十一月廿九日

特別
14
1919
386





東方院野大 圖の基圖

清濁雜抄

大正十五年十一月九日起筆

176654
 の坊間：北條重高亭の霞草書海峯一冊を得、此
 書漢文の地巻、稀勅の由也や、古昔浮屠氏
 の精力の名大を説く、釋良祐安元と号し又色
 定といふ、北條建仁寺果西禪師の弟也、此人入宋
 十歳を往て一巻を請記して個へりといふ、此人本
 一切經を千ありす凡を任傳論其部六千
 る三十八其巻二千七百四十五其帙二百五十八
 といふ、安元の多羅羅景倫の傳本を云霞草に出づ
 曰余少年時於鐘鼓邂逅日本國一僧、名安元

自言疏其因已十年、欲盡記一部花經乃歸、念
誦甚苦、不舍晝夜、每有遺忘、則叩頭佛前、祈
佛陰相、是時已記花經一半矣、云、

異稱日本傳云、覺常入宋、歸朝之後、止田嶋
香正寺、漢彥之高根神、為觀音、手寫
一切經、承元元年十二月終其業、業盡楷
正、今猶存、宗像記云、覺以博多聖福寺所花
宋西福師自宋回、齋未本寫之、經三十餘年
而終、切東屋書、禪云、漢、閱、得一文、字
記、免、事、甚、詳、云、筑前宗像、祠、產、主、有、色、定
房者、手寫大花經、文、況、元、年、乙、巳、二、月、十、九
日、起、筆、至、承、元、二、年、己、巳、二、月、十、六、日、完、業、

時年五十一、三月十六日、供養、以葉上佛、正、宋、西
為道寸師、云、

蕉中禱、西、色、定、法師、書、經、文、後、曰、昔、石、龜、定
法師、手、寫、大、花、經、都、六、年、始、告、成、在、右、未、曾
有事也、于今、納在、花、前、宗、像、神、祠、云、替、代
院、久、闕、換、過、半、間、又、教、送、長、樂、建、禪、院、後
解、即、經、八、十、五、行、於、翠、咬、蟬、食、之、餘、尊、重
珍、敬、如、荷、摩、尼、案、文、況、三、年、丁、未、法、師、年、三、十
九、首、業、華、莊、經、至、安、貞、二、年、戊、子、大、花、經
既、已、成、矣、中、間、四、十、年、凡、滋、歷、所、至、莫、不
操、毫、毫、或、塵、下、或、船、底、皆、有、出、乘、之、而、每
卷、記、其、地、勢、曰、一、切、經、一、筆、行、人、良、祐

此僧の伝元喜親者に及し其の何れか
他に一僧手記の精力傳ふべきものあり、無量壽寺
真栄阿闍梨といふ、此人喜保七年九月十八日
月を遷化し其の遺言を北條重高の族戚といふ
やと云ふ所著書に西村維禎撰する所の此僧の
傳あり、其中云く

真栄初從菊潭歎征阿闍梨、受齋教
於舊瑞室、夫齋教者淺梗所不契、世亦
無刊本、不以大痴如支那失其傳久矣、吾本邦
秘藏義軒山本獨存花本山而兵燹之餘、簡編
逸存、栄公深愷斯教之或泯、乃撰此自奮
年自奮百流儀軌、凡一千九百九十一、以花瑞

重一以花無量壽唯呼功亦傳矣、力亦勤
矣、

○此書通云楊守敬晚年邦人久會元喜の爲
り著す所、近年日本に刊す、余守敬稿
也、稿と云々也、史の上野の斯人、文海あり、め
ん、此人の著を讀む、此通言を讀み、其多のの眞
實と云々、本書一冊者法法惟の品、騰を収め
一冊自家の年譜を収め、守敬の日本の書を
評すること左の如し

日本書家、自以宝海為第一、殊有吾人爪が
道凡次之、行成卿、益善、又次之、皆唐時人

東京日日新聞

外號

大正十五年十一月九日

(火曜日)

編輯 增井照義 東京市麹町區有樂町一丁目(舊番地) 東京日日新聞發行所
發行印刷人 株式會社大阪毎日新聞社東京支店

箕浦氏 偽證罪で

若槻首相を告訴す

八日午後大阪地方裁判所

検事局へ提出

【大阪發】松島事件に連座した憲政會の長老箕浦勝人氏は八日午後二時突如柚木辯護士を代理人として總理大臣若槻禮次郎氏に對し偽證の告訴を大阪地方裁判所検事局に提起した箕浦勝人氏は起訴收容中息子多一氏に政界隱遁を告げた頃は身の不徳をなす一切の責任を負ふ覺悟であるが豫審調べが済み保釋歸京後いろく熟慮した結果政府筋の證言を各被告の陳述とに大きな開きが生じるので、秘してゐた若槻首相の官邸を訪れて松島遊廓移轉問題につき會談した内容などの上申書を出したので角南豫審判事は司法省に通告も與へずに豫審判事の獨立性を發揮しひそかに上京若槻首相の訊問をなしたかやはり若槻首相はさきに議會に聲明した關係もあつて尙ほ政府では絶對に移轉の計畫のなかつたことを云つてをるらしいのでこれ以上はむしろ偽證の告訴をなして司法權の發動を求めねば駄目だところ、に前代未聞の若槻首相の偽證罪告訴の舉に出たものだ云はれてゐる箕浦氏は東京で上申書を書いた時より死を以て冤罪を雪ぐの大決心をなした松島事件に連座する各被告も今は全く利害相反せぬ立場にあり箕浦氏がはじめ事件の真相を書いた上申書に各被告の證言が益々合致し政府筋の證言が著しく相違をしてをるだけにこの成行は非常なる興味を以て見られてゐる

角田眞平作

飛び散る弾丸は雨わられ
 きらめく剣はいなづまよ
 かばねは積みて山を爲し
 血しほり杯を浮かべたる
 其のありさまの未ついに
 民の権利を得し國は
 海山隔つ外國ぞ
 こり夫れらどり事うらり
 武千ど五百四十九の
 年を重ねて天地と
 逢ふ民草の色まとして
 かはる事おき君う代に
 そよども風のうでかさず
 萬の法の源の
 憲法のこゝに浦安く
 名に負ふ御國の礎と
 確定うしこそめてたけれ

角田眞平作

右の直村紙の南田井冷の憲法及び布を欲するもの
 故紙や一より得てこゝま存す。
 ○近刊本道楽の四左の記すありし中北法を論
 ぶ所の所ある所のよや

未刊「日本民権次良長

談話」に就て(二)

井 棲 閑

萩原乙彦は亡びゆく江戸時代の戯作者であつた。今
 その略歴すら得ないが、乙彦は萩原秋巖の養子であつ
 た。秋巖は書を好くし「安鶴在世記」に「隨處樂」を
 題賛されたその人である。さらば乙彦の静岡に於ける

この戯作も因縁淺からぬ關係をば持つてゐることにな
 らう。

私は乙彦の静岡新聞記者(社長)時代に著作された未
 刊行「日本民権次良長談話」の挿畫木版十四枚とその
 草稿一冊を偶然にも借用し得たことを喜ぶ。それは
 静岡初期に於ける書籍刊行界の一端を窺知することの
 出来得るがためにある。この計劃は明治十四五年頃の
 事であつたであらうか。

明治十三年といへばその頃駿河國有渡郡静岡吳服町

●版畫は未刊行「日本民権次良長談話」の挿畫なり守川周重の筆になる（井棲閑）



五丁目金蘭閣故吉見義次さんが書肆を営むで居られその金蘭閣は呉服町六丁目の晩翠閣と合梓で「挿畫逸式註違條件」を編輯された年であつて、その外に金蘭閣の發行した面白誌を始め種々冊子雜誌等出版物があつた東京の感化を受けた試練時であつたからであらう。

明治十三年二月二十五日静岡新聞は二度發刊同様に休刊をして三度目に再興の旗をばあげた。

静岡新聞社は今の江川町安倍銀行支店の左隣地にあつたかに覺えてゐる。この三度目の静岡新聞は六百六十五號を發行して日刊新聞となつたのである。

静岡新聞の大發展―當時の―が、東京から梅屋更萩原乙彦を社長に招聘したのである。静岡新聞には故山梨易司といふ、山梨稻川の縁家が經營者として苦勞されてゐた。山梨は後に大務新聞から民友新聞の基礎を作られた人で静岡に於ける新聞界にあつては忘れてならぬ人である。

乙彦は江戸の人で梅真里谷峨さいひ、釋迦實錄、智計雜談、連理梅、色鏡べ、水滸傳（七十回本）等の著作、があり、維新の際書肆の囑托で東京繁昌誌（繪入）軍語類編、修身學、漢語二重字引、新聞字引等を著作し明治十二年の春には新門辰五郎遊俠物語を書き洋本風の民権百家傳、治化論第三編、山陽學實帖、譯文稗史、三大家文集などを著作された。餘談ではあるがこの新門辰五郎は慶喜公に従ひ静岡に來て今の劇場若竹座の前身小川座を建設した人であつて、感應寺で四斗樽に二朱金を盛り幾つかならべ立て、兩換して豪勢振りを示し、あれはチャラ金だと噂された俠客であつた。大久保侯（小田原）の御用ものゝ指物をしてゐたが徳川龜之助が静岡に一時落ちついた時、小田原をこけて静岡兩替町に草鞋をぬいだ故中村三次郎は新門は淺草のどぶさらひであつたが随分立身して男をみがいたものだとその當時を追憶して私に話されたことがあ

○本道樂

つた。三次郎は體に大きな疵跡があり左腕かに僅に文身してゐた。

如上の如く乙彦はその當時名の賣れた先生であつたので静岡新聞は再興と共に招聘して社長になほしたのである。それほどに當時は有名な人であつたのだ。乙彦は假名垣魯文と交りを親しうしてゐた。静岡新聞に掲載された魯文の手簡によつてよく知られる。

北堂御歸宿に付一翰御托し申上候御存じの如く迂生が寓居は新宮町劇場河岸軒場に四方を眺むるに西南芙蓉の半體を現し築地海邊に近く松原はなしと雖も彼の太田道灌よくよんだ我庵はの歌の体にも似て風景あり此富士を朝暮に眺め老兄と一別以來疎遠隔絶なるも合璧の意を生じ太田君父子の事も思ひ出られ候殊に郵送の昔社新聞に依つて老兄が病痾の全快も覺へ大慶く且老兄入社以來社運隆盛日一日に到るを賀す猶御社員協力を仰ぐ耳老兄時ありて歸京の際

六

一日印刷の貴社新紙を以て御近傍の富士山を貼拔静岡土産に御持上り然可候今朝も西南に對して「富士見るや君と我との夏隣」又「浦山し富士を机の筆かけや硯の海にうつす君かも」富士おろし二挺さみせんの評判記大極上上吉以下は次號の便りの風穴かしこ

魯文拜

萩に置く露にて思ひ出候萩江露八兄は相變ず全盛に候よし夫婦中は定めてよからんか。五月二日

乙彦先生足下

乙彦は滿一年勤務の約束で東京に老母を養つて静岡に赴任したそれが任期を三年に延したので老母を迎えることになつたのだ。乙彦を知つてゐる人はあたまのツル／＼した、きれいなおぢいさんであつたといふてゐる。静岡へ來た時には既に相當な年であつた老母はいふは養母か。養父秋嚴は既に故人となつてゐたのであらう。老母は魯文方に假寓してゐた。（一五、一〇、八）



新潟女の一考察

會員 市嶋 春城

編輯者曰。春城市島謙吉氏が、早稲田大学の創設に參與し、曾て學園の理事者として、中央教育界に聲名を馳せられたるは、改めて云ふまでもなし。今、牛込東五軒町に棲遲して、悠々筆研に親しみ、最近「隨筆、賴山陽」の著あり。次に掲ぐる一文は、特に編者の提出せる「新潟女の一考察」に對して、感想を寄せられたるもの、例に依りて、才筆縱橫、一面、趣味家としての春城詞長が、郷土愛の發露を見るべし。

一兩度御手教の處、御返事遷引、心外に存候。實は、此の度のみ御返事に窮し候。近く御發行の貴誌に、新潟の妓評をと、徴せられ候ところ、斯かる御請求は、チト、筋違すぢまちにあるまじき歟。老生、今は、早や、夢にのみ、花柳の巷に往來する耳。品紅騰綠など思ひも寄らざる事に候。柳里恭に倣うて、僅かばかりの學問を、妓の湯具に取換へばやと、思ひしことは、既に四十年前の昔に屬し、今は情熱全く死灰に歸し、自から憐れむの外無之候。去りながら、人の性、國自慢は已み難く、老來益々その募り候もをかしな事に候。舟江の妓も、國自慢の一に數ふべしとすれば、一言これに

觸るゝも、敢へて、差支あるまじき歟。誰やら、支那人の詩に、「越人長家山水國」とあり。又、「越女一笑三年留」ともあり。これは、宛あたがら、吾が郷國の爲に發したる詩の如き思おも有之候。山水の秀靈は、美人の生産に關係あるか。西京は、御案内の如く、古來、山水美と、女性美とを併せ稱する所に候。吾が越後の、美人國と稱せらるゝも、やはり、名山水に淵源ある歟。

扱あつか而、佛氏は、三十二相を説き、西洋人は二十七相を主張致し候。舟江の妓が、此等の相にどれほど及第候哉、それを詳かに究むるも興ある事には候へども、今はそんな暇もこれなく候。西洋の二十七相と申すは、三相を九ツ數へ候ものにて、ザツト、舟江の妓は、三白の、皮膚と、齒と、眼の白に及第し。三黒の、眸子、睫毛、髮の黒に及第し、三紅の、唇と、頬と、爪の紅きに及第し。三小の、口と、鼻と、頸の小なるに及第し。三細の、指、唇、頭髮の細きに及第し。三狭の、腰、脚、目の狭きに及第して居るやに存ぜられ候。二十七相の内、十八相に合格すれば、先々美人と申す方に可有之歟。體格の長大は、西洋美人の相として、最も重んずる所に候へども、それは、到底、日本女性の及び難き所に候。舟江の妓も、さまざま、缺點有之候へども、その最も長ずる所は、其の容色よりも、妓たる本分を盡す點に有之と存じ候。其の客に對する、親疎しんその隔へなく、郷貫の異なるがために、其の取扱を異にせず。客の長座に慣れて、夜の更くるを意とせず。割合に従順忠實にて、客の

意に忤はず。自我を張ること薄く、才色を衒ふこと少なく、悪客なりとも、一概に排斥せず。客の階級により、待遇を軽重せず。藝は無くとも、人をチャームする所あり。客をして、春風の裡に坐するの思あらしめ、何となくユツタリした気分漲り、客をして、流連・歸るを忘れしむる所に、舟江の花柳が持囃され居り候。是れ周囲の田舎気分にも因る事には候へども、妓の取持に依ることは、否み難く候。

老生の狭き経験に依るに、新潟の妓に近きもの、ひとり、長崎ある耳。長崎に比すれば、舟江は、いさゝか譲る處あるやに存候。開港の場所柄、おのづから、妓情を同ふするも偶然にあらざるか。妓は、妓の本分を守つてこそ、妓の資格も有之儀にて、舟江の妓は、容色は無くとも、客を喜ばしむる能は有之と存候。舟江の亡びんとして亡びず、東西の客を引いて、相當の繁昌を維持する所には、政治家や、實業家の力でなく、全く妓の力によると存候。老生、既に、妓を品騰するの資格無之候へども、皓鬢、情海の外に立つものにあらざれば、言、公平を得ずと存候。愚言も一概に唾棄すべからざる歟。併し、以上は専ら外面に就いて申候儀にて、其の闇黒面に至りては、老生の知る所に無之候。右、御諒承被下度候。不乙。

九月十三日
總 輪 老 臺

小 精 道 人

左に女のつゝ村山葛葉の個人に海銀鈴と載せし余が説又也

○隨筆文その選集今朝の新雪紙に房々生と掲出す、形あるもの余の監輯の名を出す人、余が如くこそう、余ハ世間も隨筆家として見ん、此身余の隨筆も徹するまゝ一二として是れ、此版元の余の名を載するも六世うゝ雷田の也、又辛の選擇も満ちるもの多し、且つ他人の選りし余が如くものも混しあり、別産毎巻毎のち指を奪うていんハ是の勢を得るこゝし

十月十日記

監 輯 市島謙吉
 文部大臣 鹿島道一
 編輯 植松安彦
 編輯 楠潮日彦
 編輯 安田朝彦

隨筆文學

滋味なき生活はあまりに荒涼だ。生活の潤ひは餘韻豊かな隨筆文學に於て惠まれる。そこに筆者の人間性といろく々な時代相とが面白く綾なして表現せられ、先人の歩み來たつた人生の行路が切實に味はる。此等隨筆中最も傑出し價値ある文獻一百餘を選び、高雅なる装幀となし提供する事は弊社の誇である。

隨筆文學選集の内容目次

△本選集は時を徳川期にとり、初期を那波活所、雨森芳洲などの作物より始め、末期のものとしては栗本鋤雲の五月雨草紙を限りとした。△内容の境域は出來得る限り諸事百般に亘つて、未刊に屬する貴重稀觀のものなど、隨筆として受ける氣分を中心として廣く収録した。△内容の正確を期する爲め、内閣文庫、宮内省圖書寮、南藝文庫、早大圖書館、小精廬藏書、雙柿舎藏書など諸家秘藏の自筆本など参照した。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|-------------------------|-----|---|-----|--|-----|---|-----|---|-----|--|-----|--|
| 第一卷 | 東の花勝見 永下堂波靜 さや草紙 西村花明 花街漫録 石川武四郎 婆心録 松川雅 目ざましくさ 山田清 あがたの三月よつき 皇朝山 天保佳話 皇朝山 無名翁隨筆 皇朝山 | 第二卷 | 鳴呼日 橋田錦 つれづれの錦草記 橋田錦 錦陽漫筆 橋田錦 尾陽漫筆 橋田錦 文書誘紀 橋田錦 | 第三卷 | 蘭葩摘芳 大槻不盤 浪華書志 大槻不盤 改過筆談 大槻不盤 雅遊漫筆 大槻不盤 二見乃字録 大槻不盤 わがころの記 大槻不盤 半笠考 大槻不盤 | 第四卷 | 五月雨草紙 栗本鋤雲 ひとりと 栗本鋤雲 | 第五卷 | 屋加筆 伊大梅 代藤者勢枝 伊大梅 弘彦不貞流 伊大梅 賢龜詳丈芳舍 伊大梅 | 第六卷 | 紅毛雜話 森島中良 異國來往記 森島中良 作者の足跡 森島中良 波樓筆 森島中良 春波樓筆 森島中良 波樓筆 森島中良 助結記 森島中良 | 第七卷 | 夜航餘話 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 釣客傳 津東柳陽 | 第八卷 | 伊藤野矢 伊藤野矢 石川口 石川口 川口長 川口長 石川口 石川口 石川口 石川口 石川口 石川口 石川口 石川口 | 第九卷 | 三野原 伊藤野矢 吉野原 伊藤野矢 秋野原 伊藤野矢 秋野原 伊藤野矢 秋野原 伊藤野矢 秋野原 伊藤野矢 秋野原 伊藤野矢 | 第十卷 | 野々舎 栗本鋤雲 松屋東 栗本鋤雲 松屋東 栗本鋤雲 松屋東 栗本鋤雲 松屋東 栗本鋤雲 松屋東 栗本鋤雲 松屋東 栗本鋤雲 |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|-------------------------|-----|---|-----|--|-----|---|-----|---|-----|--|-----|--|



政局漫語 若槻君は 經世家ではない

病氣以來新聞もろくく読みません、今では政治より小説の方が余興味があります、一かこの小説通になりました。

◇所で私が伊東伯の擁立運動をやつて居るこが傳へて居るさうですが、全く笑はせませぬ、あのこ

政局漫語 [15]

若槻君は 經世家ではない

動が起きその時政府に反對黨は白刃相殺しツバセリを演じたのでした、議會は停會に次ぐに停會をもつてしました、遂に桂公も解散の決心をなさざるを得なくなりま

◇その時大岡育造君(衆議院議長)が桂公の所に乗り込んで、解散はあ勝手であるが内亂の責任は負ふのであるか、と淡々述べたのです、それがため三度議會は停會になりました、その後へ山本權兵衛伯が乗りだし遂に桂内閣は總辭職になりました。

きものが出来ないものにも限りませぬ、桂公なら出來た決心も若槻君では出來ませぬ、若槻君は細かい智恵者です、上手に渡る人です、經世家ではありません、一省の大

◇床次君は昔は私のひい、き後者でした、床次君が官僚から入黨した當時はかなり舊黨員から反對がありました、私が私はいつも擁護派として同君を大成せしめた、と思つて居りました、床次君も今では如何に見ても窮地に落ちて居ます、決心する時が遅れました、今だに迷つて居るよう

豫約
募集

隨筆文藝選集

監 輯
春 城 市 島 謙
文 士 內 田 貢
學 士 宮 地 直
帝 大 司 植 松 安
大 司 官 潮 日 彦

滋味なき生活はあまりに荒涼だ。生活の潤ひは餘韻豊かな隨筆文學に於て惠まれる。そこに筆者の人間性といろく々な時代相とが面白く綾なして表現せられ、先人の歩み來つた人生の行路が切實に味はる。此等隨筆中最も傑出し價値ある文献一百餘を選び、高雅なる装幀となし提供する事は弊社の誇である。

隨筆文學選集の内容目次

| | | |
|--|---|--|
| <p>△本選集は時を徳川期にとり、初期を那波活所、雨森芳洲などの作物より始め、末期のものとしては栗本鋤雲の五月雨草紙を限りとした。</p> <p>△内容の境域は出來得る限り諸事百般に亘つて、未刊に屬する貴重稀觀のものなど、隨筆として受ける氣分を中心として廣く収録した。</p> <p>△内容の正確を期する爲め、内閣文庫、宮内省圖書寮、南葵文庫、早大圖書館、小精庵藏書、雙柿舎藏書など諸家秘藏の自筆本など参照した。</p> | <p>第一卷 東の花勝見 花街漫草紙 目ざましぐさ （附）煙草百首 あがたの三月よつき 天保住話 無名翁隨筆</p> <p>第二卷 鳴呼日 錦の錦草記 錦の錦草記 錦の錦草記 錦の錦草記</p> <p>第三卷 浪華樓志 改過筆談 雅遊筆記 二雅遊筆記 雅遊筆記</p> <p>第四卷 五月雨草紙 古と新 皮精癡 錦者論 錦者論</p> <p>第五卷 洞房語 五房語 音曲新話 音曲新話 音曲新話</p> <p>第六卷 形影夜話 形影夜話 形影夜話 形影夜話 形影夜話</p> | <p>第七卷 夜航餘話 美客傳 釣の美客傳 釣の美客傳 釣の美客傳</p> <p>第八卷 紅毛雜話 異國來往記 異國來往記 異國來往記 異國來往記</p> <p>第九卷 三軒小話 吉原十種 秋野隨筆 秋野隨筆 秋野隨筆</p> <p>第十卷 野々舎隨筆 松屋東隨筆 深川隨筆 深川隨筆 深川隨筆</p> <p>第十一卷 秋筆隨筆 乃隨筆 乃隨筆 乃隨筆 乃隨筆</p> <p>第十二卷 奈良みやげ 能面日記 能面日記 能面日記 能面日記</p> |
|--|---|--|

全二十卷
完了

規 定
△大正十六年一月より毎月一卷
△宛行し同年十二月完了。
△四版、毎卷四百五十頁以上。
△豐富、每卷金四圓八十錢也。
△會費一ヶ月金二圓也。
△一時拂金三十圓也。

十二月廿日締切

東京麻布筭町一六
書齋社
振替東京七四三三五
電話青山五〇三

の横瀬琢之といふ人あり、此人の先人の姓反
の編者、近世名家、文集、経年、任、信、能、海
社、刊、し、る、津、帖、を、合、世、に、流、布、す、琢、之、其、の
續、集、編、を、持、ち、来、り、出、版、の、方、法、を、き、や、と、評、ふ
又、い、は、百、枚、の、り、を、と、い、ふ、一、冊、あ、り、の、り、も、世、を、節
採、集、し、る、も、の、り、を、埋、没、し、て、消、し、つ、ま、り、惜、し、む、也、
と、い、ふ、人、も、全、部、漢、文、を、い、は、出、版、に、困、難、を、感、
を、い、ふ、琢、之、先、人、の、遺、愛、を、さ、う、と、も、四、能、村、井、田、の
山、の、横、瀬、を、持、ち、来、り、示、す、も、所、へ、て、又、い、は、世、を、
海、屋、の、山、駈、海、走、の、題、字、を、い、は、井、田、の、い、の、敷、人
と、い、ふ、も、の、り、を、遺、る、也、昔、尾、に、一、冊、を、送、し、信、法
齋、と、識、す、井、田、の、云、わ、井、田、の、書、者、に、信、法、齋、と、識、す、

國、と、い、は、一、運、裏、に、三、行、の、法、行、あ、り、偶、と、持、ち、来、る、を
ま、り、持、ち、出、し、示、す、も、七、紙、貴、持、ち、来、る、余、氏
何、の、價、あ、り、や、と、問、ふ、五、千、圓、を、下、と、い、ふ、と、い、ふ、
あ、合、借、金、を、け、て、来、上、り、買、う、と、い、ふ、十一月、十日、記
琢、之、一、卷、の、紙、名、帖、を、持、ち、来、り、示、す、信、法
の、古、今、集、能、部、三、一、尺、許、の、と、い、ふ、も、所謂
こ、の、助、切、り、如、斯、尺、の、長、き、な、紙、を、し、紙、七、也、
と、い、ふ、も、く、り、如、味、有、り、如、此、と、い、ふ、今、三、萬、圓
の、價、あ、り、と、い、ふ、
の、書、の、代、し、と、需、ま、る、者、物、官、を、い、ふ、も、を、刊、本、を、し、
十二、冊、本、著、者、の、名、を、謝、り、し、も、長、谷、川、子、厚、の、
著、る、事、と、い、ふ、と、卷、末、の、改、て、未、六、月、著、者、を、知、る、

徳山居士竹 則の自著 漢語をいふに
爲中井山後好のつとふ、天文地紀歴
大判るに海家教等土行に別ち邦語をかき
る隨筆一冊か、或る跋見をえり、新山陽の
之に據りて或新果を著し、之と傳くらむ、
精漢して更々記するをあるし、(上月十日記)
○坊間を過り一二の色を得てゆく、洋装本沙洲良
寛和記集、大宮香久の編纂あるを、此四十一
年一級を確此の出版に傍る漢字を也、余も寛
の集を大括覧目し、おも此者を見る、如き也
未比著者、此の為人を詳めざる、と云ふも京
都の住する人々、且つら寛山家編者と云

く巻首に揚げたる四五の巻、其の傍著者の宛
するものと、和歌の傍る後名の傍る漢字
を添く、ら寛山家編者の一説に、之を久り、
亦全巻の用漢の之説一冊を施して後、此の流
二年大改、於て全巻向を記し、其時化を漢語
を設け、教頭和某、人ク、ラード、ウオルトン、ハ
ラマ、の講義を著せしめたることあり、此者其の
才一遺を出版し、たることあり、助教三崎の喃輔の
譯に傍る、巻首に全巻向の圖あり、其の流、
所一般理を、文的圖中、大関係あることを論
す、即ち化をの傍論する、此の才一論、人府西四、
少、持、其他の大臣、七席と、臨、を、と、あり、日、を、

花ける形初の現科海義録と見ることを得る
多し得易くして書とさす多し 十月十二日
○昨日大隈侯遺品箱の陳列を如く今傍大隈侯
館にて終日指揮す 列名今布大隈左の如し
一 入口寄付遺品箱

宮内省 青條 南極探險紀念物
田舎家模型 愛宕 全四柱
宗室名録 桑儀の印の大名刺面
等

二 婦人及婦人

御宸前の類 御物品 御服
夫人遺品及品等 曼多羅

三 書物

家記 原稿 侯の著書 備忘
用紙等 参考書 侯と関係あるもの
ある図書 今回出来の八十五年史と
アムハム 侯の眼年表 大書三貼

四 大書院

辞令類 書問類 紀念書書
外回勳章 遺品 青條

五 夫侯居家

衣類 未帯及胸礼皮 婦人洋服
侯の大礼服 がウシ 直衣 直垂
萬難の時 佩刀 義足 杖等

大隈侯八十五年史 資料並ニ遺品展覽會出陳目錄

御下賜品

- 今上陛下宸筆 二 内正其心外修其行 菅原道真諱梅花圖
- 今上陛下御製詠老翁歌
- 皇后陛下御歌 色紙
- 今上陛下 御沙汰書
- 攝政宮殿下御沙汰書
- 先帝陛下宸翰 木月公拜寫
- 先帝陛下御料 フロックコート
- 今上陛下御料御紋附羽織
- 先帝陛下御下賜箱根細木工製酒盃 岩倉公書簡 女房消息二添
- 照憲皇太后陛下御短冊
- 先帝御手製柑皮煙草入
- 今上陛下御賜鳩杖
- 御紋章附白茶錦卓子掛 遭難後全快 参内拜領
- 侯爵病中拜領御紋章入牛乳硝子瓶
- 大勳位頸飾章並に勳記
- 大勳位菊花大授章
- 紫組掛 緒

辭令

- 親任狀
- 民部大輔
- 大藏大輔
- 内閣總理大臣兼外務大臣辭令明治三十一年
- 同 兼任内務大臣 大正三年
- 宮中杖差許
- 華族被列
- 外務大臣辭令 明治二十一年
- 徵士參與職外國事務局判事橫濱在勤
- 被仰付辭令同別紙三月十九日付
- 各國條約改正御用掛 辛未三月
- 奧羽御巡幸供奉 明治九年
- 外國官副判事
- 任 參議
- 從四位下
- 橫濱裁判所在勤被仰付
- 外國官判事
- 鐵路製作ニテ英國ヨリ金銀借入
- 委任狀 明治二年十一月
- 大藏大輔辭令 明治四年
- 臺灣蕃地事務局長
- 參與職辭令
- 造幣寮創建之功勞賞狀 太政宮
- 御巡幸辭令 明治十四年
- 鐵道創設成功賞狀

衣服類

- 三聖像 容室侯ヨリ贈ラレタルモノ 侯爵氏名印
- 碁盤 碁石 本因坊察元ノ銘アリ
- 夫人手製佐賀錦煙草入
- 夫人遺愛ノ小品
- 八十賀ニ使用セシ天盃並銚子
- 御即位當時ノ侯爵萬歳ノ玩具小像
- 夫人手繡皿敷
- 夫人手製錦裂地 大一、小二
- 夫人手製絹刺及編物
- 大久保公土產ノ青玉鉢臺
- 八角机
- 衣冠束帶
- 御遭難當時の服其他
- 大禮服
- 烏帽子直垂 直衣
- 早大總長ガウン
- 夫人洋服
- 夫人雜袴
- 夫人紋服

肖像

- 侯爵肖像 (油繪)
- 同 肖像 (同)
- 老侯夫人
- 侯爵母堂並ニ夫妻油繪 (母堂米壽)
- 侯爵肖像
- 同木炭畫

家記

- 墓誌拓本、侯爵並に夫人
- 遭難當時病床日誌
- 大正六年病床日誌
- 大正十年十一年病床日誌
- 閑叟公臨時御祭典祭文章案
- 建白書
- 手東人名錄
- 大隈家尺牘目錄
- 改進黨被告事件書類
- 雉子橋邸賣渡約定書
- 葬儀誌
- 早稻田邸玄關日誌
- 園遊會招待人名簿
- 肥前佐賀ヨリ東京迄二百九拾里旅費
- 客膳統計表

- 准國老仰付書 舊藩時代
- 民部大輔御太刀料下賜狀
- 臺灣事件功勞賞狀
- 征討費經理事務局長官
- 勳章 (外國)
- 露西亞勳章 アレキサンデル、ネブスキー
- 佛蘭西勳章 グラン、グロア、ド、ロルドル、
ナシヨナル、ドラ、レチオン、ドンヌール
- 白耳義勳章 レチボール第一等勳章
- 伊太利勳章 王冠第一等勳章
- 獨逸勳章 赤鷲勳章
- 佛人カアン 寄贈銀牌
- 遺愛品
- 藕絲曼陀羅 故侯元服ノ際床ニ挿ミシ
梅ノ木ニテ刻ミタルモノ
- 天滿宮木像
- 太刀 拜領刀架
- 刀 劍
- 刀 架
- ステツキ 有栖川宮殿下ヨリ拜領
- 湯 呑
- 御手許用小箱

- 記念書畫
- 畫 帳 早稻田邸圖
- 畫 帳 母堂米壽記念
- 葡萄の圖 最初歸郷記念鍋島直彬公ヨリ
賜ハリシモノ
- 量松圖 支那校友ヨリ
- 四庫全書目錄 大正十年徐總統ヨリ
贈ラレシモノ
- 即位大典壽詞
- 肅親王手書扇子
- 短冊 直大、春霞二、尊福、榮子、
鳴雲、池原香穂
- 建子刀自和歌懷紙幅
- 夫人詠艸短冊及日記
- 同 曼陀羅の歌
- 侯爵最後日光參内の際の日記豐子手記
- 康有爲祭文書幅 書翰添
- 高崎正風國民讀本の歌
- 松平慈貞院和歌
- 川崎千虎筆浮隆之圖明治二十九年展墓記念
- 菊の寫眞帳
- 菊花壇の圖 卷物玉田筆
- 仁壽額 徐總統贈ラレ
- 伊藤公土產洋畫額 明治初年
- 母堂米壽賀筵席畫 小嶺
寛政

書簡

- 有栖川熾仁親王 北白川親王
- 山縣公 大久保公
- 伊藤公 大西郷公
- 澤宜嘉 木戸公
- 黒田清隆 江藤新平
- 板垣退助 後藤象次郎
- 梁、啓超 盛宣懷
- 傳記草稿
- 大隈侯著述及雜誌
- 特殊資料
- 傳記參考書
- 寫眞
- 雜
- 威仁親王 伊達宗城
- 岩倉公 松方公
- 三條公 井上公
- 副島伯 小松帶刀
- 福澤諭吉 大村益次郎
- 廣澤眞臣 肅親王
- 袁世凱 ハウス書簡

- 急須 侯爵蒐集物
- 古瓢 附杖二本
- 國府津別荘庭燒
- 野球ボール 始球式使用
- 鋼鐵球 米國自動車王フォード氏自製寄贈
- 爆彈破片 遭難ノ際
- 臨終寢具裂地
- 印度植物種子
- 玩具田舎家 侯爵夫妻の註文にて

- 侯爵演說レコード
- 臺所の圖 食道樂の卷
- 御巡幸供奉信
- 參議兼大藏卿大隈重信名刺
- 宮島大杓子
- ベンギン鳥
- 早稻田邸附近鳥瞰圖
- 南極探險寫眞
- 米國ヨリ寄贈ノ米國旗
- 名刺箱

中見世式藏書作

弱る程に属す大丸に福をし給毫ん分御堂
と其の附居の一字を三十三條と名を給毫ん分
初に此の陣列を有しと速記し宣を有るるを
備不を有る南とし給毫ん分進に御を有るるを
こ給多く有る大丸を有る陣列宣を有るるを
今如何もしかは目いから一あるに衣波の形
を何れか別の宣を陣列するるか亦毎の多
の品物の陣列も御を有るるか或は又右左
にけを全列日を異しと陣列するるか法
量と有る

此の陣列の至る目的は信記を有るるを
為めの宣信也是あり大限分候に全四回有候

大倉とひらき居席上候と宣信し昨の陣
列も余に都下の形も記を有るるを今も七宣信し
四十四の天候に候候あり由衆を今も七宣
信する候也大限も此法も陣列を世流
し居候に宣信の天候も有る偏量家候候
余を候すより有るこ多し因印此上無し

大限分御堂候今二三の同入候りある一葉
入に重んじ宣信し七の先づ其印候此
の月分ある一葉の信記を候あり候
此れ大限候を速信する念におもふ候衆
か候を信利する候も有る宣信し
のい候あり候

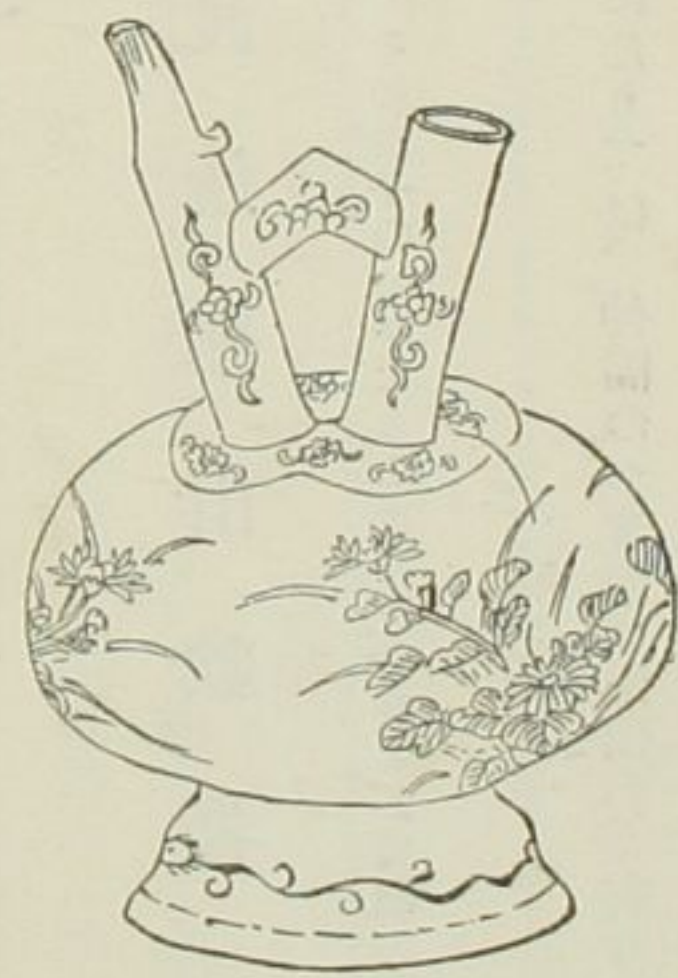
〇余の監修の遺著選集の元を印刷所より案上へ刊
 行せしむるに余の愚を顧みず載せし由り余を以て
 入んば其の二枚の紙に余の家名を記ししを以て
 するも世にたに收むるものも是也此選集あまの
 判もよくて甚だおもしろきを得たりとある者斯
 の人もいふべきなり今日報せしむる。十一月十四日

蘭山小野先生著

荃筵小牘

受 泰一 惟純 行忠 大年 評儀 將 正恭 列
 惟明 繁指 方恒 芸斐 豫 忠則 政徳 季博
 業 成績 玄挑 道砥 維章 由之 煥光 有慶 楪
 正勉 善景 敬義 等助資

異國に一種のたばこのけぶりを吸ふの具に、ふつかといふもの有。正編に其圖を載せり。此具は世に珍らかなる物なりと思ひしに、これも百有餘年のさきすでに此方に渡り、其用ひかたをも傳しにや、磁器にて此圖のごとく作れるもの有、これ全くふつかなり。やきは今の世に古今利と呼べる器にて繪様も其頃のさまなれば、二百年のむかしにはこれも用ひしと見えたり。こは浪速の骨董舗に何とも知らず持古りしを、大浪石川君見たれりとて求め來りて大人に贈りしなり。尾花がもとに曰本居宣長がたばこのこゝなかけるもの也おもひ草は秋の野の尾花がもとにおふるとかや中略末條にかくのみ、いみじくいひなすを云々、猶おきがたきものによ、あしたにおきたるにもまして、物くひたるも大かたはなるゝをりこそなけれ、かう常にけちかくしたしきものはなにかはある。さるをいみじき願だて、ものいみなどして七日もししくは、十日などたちみたらむほどにぞ、常はさしもおもはぬ此君の



目ざまし草

寛永の頃土佐光益が

畫きたるおどこせ

きりかむろに

長煙管を持たる圖

寛永の頃は人々長煙管を用ひ外出の時は奴僕に持せたり、其頃の人錢湯風呂に入りて歸るときを畫きたるものに此圖あり、其僕従のみを抜てこゝに摸す、但し髪のみだれたるは其頃入湯の時はかみをあらふが故なりとぞ



目ざまし草

○その頃中某寺から古文の古簡を入手し、要方
 余の姓の由来に就ての疑問あり、余の家は丹波から
 肥前を去るを姓とし、その後、地名の市崎を以て
 姓とし、その天正の頃、ある南北相争る時、
 市崎村の地名の如くあり、未だ歴があらざる時、
 べりことかろの免を、市崎村に属する所の天正の頃、
 あるから、市崎(入)と、関係あると思ふ、(大
 二角末山の全文を左に抄めおとす) (十一月十六日)
 却説高寺甲古事、和年中四主、平公、星上の
 由緒記、字に、往古市崎、帝主入道、平公、寺、市崎
 羅(寺)前大野郡、と、秦、漢、大の(洲)基、(被)成
 市、産、象、平、公、寺、白、山、権、限、と、毎、方、の、市

夢想、と、平、公、寺、に、龍、身、市、産、に、行、並、定
 島(南)に、移、住、被、成、遊、に、市、地、に、山、前、御
 じ、お、え、と、有、之、市、在、行、の、然、市、後、基
 の、佛、小、合、に、か、す、か、に、認、め、ん、物、に、帝、主、三
 昧、の、稱、あ、り、地、と、有、く、維、新、後、ま、り、市、後、寺、
 稱、し、た、り、何、帝、に、在、す、か、不、知、の、為、の、丑、鎮、寺、
 村、と、改、り、た、り、も、昔、校、名、に、今、從、市、後、寺、校
 と、申、し、居、候
 是、等、の、法、方、面、に、つ、き、考、え、る、も、市、寺、白、山、宮、に、関
 係、あ、り、候、も、思、ひ、ん、且、金、代、無、根、の、記、録、を、佛、心
 して、因、主、に、置、た、り、理、ゆ、を、無、之、と、有、り、是、か、ら、
 實、を、の、め、り、及、度、を、身、に、考、へ、及、る、も、其

瑞徳を得かたき候

市崎の姓(申古まむ市崎と音も)二つを各方面
に流るるは是亦御り例の無き姓の故也
凡貴位が同姓に被るは且つ祇後市崎徳
次郎也と深き関係ありと云ふ也
又市崎入
道と稱せんとする法河が瑞光社に在る也
又市崎記に又の瑞光社に在る也
拙寺記に付小生数年前より之を思ふ
ハ市王瑞光社に又宮の史実の暗き中古位
の誤りと云ふべく而して南地^註瑞光社とすん
瑞光社の天子の無くとも云ふ也又陸下が瑞

瑞光社に在る也
又市崎記に付小生数年前より之を思ふ
ハ市王瑞光社に又宮の史実の暗き中古位
の誤りと云ふべく而して南地^註瑞光社とすん
瑞光社の天子の無くとも云ふ也又陸下が瑞
果し曰寺に今存する楠を姓と改る
御後不の隈に長慶天皇也
ハ七の曰天台の南朝瑞後真の権國を
抱くこと思ひ別ると或は瑞身を入る也
一重位と権國を修る也
の血統正利寺が平の寺に在るを思ふ
曰寺に諸事ありと云ふ也

一方紙後新得の東方某福考に南氏の一族
 出家と隠れん多由る事候或は是等
 とも征討の御謀を志めし今いさん人の
 紙後と下らせりん又阿日何等かの由來
 して市島等の姓を稱する御一族を生せし
 ありしがやと空想為り御皇務中
 礼を虧みず御司中上御令と皇室
 に關する記録の石版を不河に附するの
 事なきを感し愚れを以て伺ひ治事
 御姓の由來の事なき限り御姓
 といふ伏ふ奉る候に恒有再程
 追白長慶天皇の尊號何時頃より

初り、市島寺部、この關係無之存
 一も為念中務殿を仰也

紙前四吉田郡五領ヶ島村

東定島平慶寺住職

一島義成

(四記市島上書ス)

市島尚書殿

侍史

○坊間を遊り四五の虫を得、中一、二羽を六七の鳥
十一月十六日終

一 琉球四志略

六冊

官版七西復刊し、此本ハ今稀觀ニ屬
し市價高し、此本ハ唐本ハ官
版ハ原書也、官版ハ家蔵ニ多ク
京故本ハ珍々し、けんハ好ハ入。

一 草茅危言摘義

五冊

中井山ノ草茅危言を、
音神惟孝ハ辨校を
加へ、
康ノ柳條閣治政と
あり、幕末

十二行

未流ニ附し、
吾等ハ況然
と云、
其ノ後、
此を分
ル得カシ

一 新江雜記

二冊

心人岡田有邦ノ著、
梅丸ト云、
其ノ評、
岡田ノ著、
新江雜記、
其ノ後、
此を分
ル得カシ

一 南京永民船下田港漂着記

五冊

文化乙亥十二月廿九日、
南京永民船下田港漂着記

愛玩する。

書道家の心算に其の書道なるか、亦く日蓮を
とんとおる向古あるが、山陽の書道も亦いれが、
その為めである。

二 日本外史が幕末の風雲を捲き起す故に

一、是れが時勢に投した

山陽の名聲に、是れが揚つたお色であるが
是れは、是れが名聲が持続すると思へ
ぬ

山陽が日本外史に、一、此勤王論の創案
の援授と、志士を鼓舞したるお

是れが、是れが、今、對王論を、外史から、
くまむである

山陽の待た書や、山陽、平素、持続する
の澤も、強ち、外史の、著者の、心から、とい
ふ、単純な、澤も、あるまい。

三 愚案の、山陽の、心算、に、民衆を、起す、素

質があると思ふ、乃ち、山陽の、國民的文
藝を、家へ、あるが、故に、序へ、永く、一般へ、
紹介せしむる、を、あると思ふ

日本外史が、冷然と、世の、歡迎を、受け、
る、所以、は、是れが、國民の、嗜好、に、投する

やうな書物があるからである

山陽に此外史を著する。新体の文を工夫し、
せんが国民の嗜好に最もあてはまる体であつ
た

従前の史家は日本歴史を懐くも左傳の七段
あつたこと、まづ日本風味の無いやうな書物
が山陽の如きところでも日本歴史の体を得
た

新体の文といつても非難のあつたものゝ山陽も
ある方面から非難せん。司馬遷が新
体の文に史記を書き、まづ一時非難があ
つた。後と不朽の文とあつたと同じことと

ある

四 日本外史の文章は宛から五彩燦然とす
終を見るか如く、グラヒツクの描寫
ハめを得てある。人前ハ七段あるも
軍ありを漢し、
● 其味がある

漢の著るもの時支那史の文格、外に
その非難し、聖書に之んを作文
の加筆材料に用いた後である
當時の狩野土佐の無けんは終に無い
と思つたと同じく、支那模倣の文である

の實に夥しいものとある。そして是れが今も珍重
せらるる譯に古名の文人の筆蹟にといふ所の
も亦其考を振うる時云々云々の面白味
があるからである。彼れは従つて手紙の文
も亦一体を創めて國風を指導するに支那
から来た形式、物派する者、簡文の改ま
つたのち、山陽の感化が多きとおもふ
く、漢文と漢文をうけて、縫ひ縫ひと
ゑる手紙の面白味の溢るゝやうな
筆を考へた所、其れ通人の筆、田代
田代書簡の筆と云ふべきものがある。

八 山陽の書に一家をなす、晩年、殊に熟して
ゐる、書法の意がある、道楽のあり、氣
持のよい、氣品の高き、能者である、
書家の身振が、その、粗直の所
も、真に、名人受けのする書である、
の書情が、進々、價を日印め、未だ、
大名があるから、金、趣味があ
るから、此れ、田代、趣味、
ある。

九 山陽の多般、趣味家がある、
立極りの方面から、受のよ、原因が

廿日記

○早稲田号機の記ある余に就て大隈彦彦(高橋)の
語を聞き就ての余の所感を述べたことと七と
大隈左の如き事とを論じ且つ其の旨を述べし

長瀬合が其の如き事とを論じ三日一巻の人衆
を交えたり感えたりと云ふし故に是の人衆
のあつたを以て長瀬合の故に亦是を認
むしある事最々よくいなり今病は大隈
侯の寝起然と云ふ事あり今も亦病に在り
し時のことと云ふ事あり今も亦病に在り
何れも今病に入らば直ちに故便を道徳せざる
事し北條侯を今病とし侯の侍従の資

料や遺物を陳列するに在りて自然のことに
て今病と云ふ事北条やある事北條の事あり
曾つて北條侯と云ふ事あり或る事北條の
一豆あり或る事北條の床に置かれり或る
其の物も陳列するに在りて自然のことに
んが如き事あり或る事北條の侯あり
物も陳列するに在りて自然のことに
り親衆の道徳を一層却てせしむる事あり
其の夫入をえたり今病の事ありしきを
るも北條侯の陳列の仕方の特異なりと放
脱する事あり大隈侯に開放的なること
亦今病をえたり或る事北條侯の事あり

従来個人の記念展覧会をいふよりも、その人の貴
重の品物やおそろさん世人の貴愛の品物や骨
董などを陳列するものが多く、例をいふれば、
このものを秘して公けずてきたものが、此の大隈
侯の陳列に於ては、或ると何物をも、甚しく
敬的の趣があつた。家寶として、切大切なる
御衣類さくも、陳列さん。秘の富ちる
へも、多くの私酒、侯の私記のことも、さ
けささん、此斯の道前、侯の無きこと
にて、侯の開放主義が、此場合に於ても、現
さん、小中物がある、いさく人の感動を呼
びおこし、このことにある、いさ、陳列物さく

の物さく、此出、此に應合、いさ、さく、
書畫、さく、さく、骨董、さく、さく、
史的紀念の意味がある、といふ所、又大隈家の
特徴がある、俗的の相の陳列、といふ、
いさ、いさ、

の上叙の如き什物を、大隈中、指し、
：陳列、衆府の、供、さく、さく、
と、さく、此、搬、さく、さく、
重、四五割増、といふ、
増、さく、さく、さく、
いさ、いさ、いさ、

そのある辰間、類ハ物ト人ト一ニ格持護スル也
この丸窓があつた、穴ハ斯ういふものを素地、動かすこ
とハ破天荒といふ、大改の大丸の穴階、依
リハ陣列として新改記有、見七九所、洗石、相白
毎リ九泥者輩ハ七喫教う、此、この物有、よと大
改、こ見る、ことハ如のそ、ある、よと七思ひ切つ、此地、
七思ひ切つ、見七、神底尊、七神名の、ある、よと、
飾り、よと、よと、よと、思ひ、此、節柄、カ、左、傾、派、カ、
名の、目、為、の、混、疑、ト、乘、し、不、教、の、こ、と、を、あ、う、と、
此、体、ろ、う、と、の、教、七、戒、説、守、守、ろ、新、改、記、者、側、
聞、く、七、あ、も、お、う、大、丸、こ、日、の、殺、判、の、群、衆、一、日、三、
乃、五、萬、と、い、ふ、に、此、の、度、改、説、傍、先、七、石、を、三

十三行、今、改、名、と、路、と、同、格、の、廊、下、こ、思、ひ、
改、七、狭、道、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、難、道、七、思、ひ、
廊、下、七、夜、間、の、説、説、を、止、ま、す、大、丸、こ、交、
し、神、底、尊、中、最、七、日、元、し、七、二、幅、を、場、こ、出、さ、
ぬ、こ、と、し、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、臨、棧、の、寄、記、を、
を、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、七、方、大、丸、の、定、休、日、ろ、ろ、
陣、列、傍、七、新、改、説、傍、を、七、中、七、八、貴、重、
を、置、き、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、通、り、七、硝、子、
ハ、面、七、方、に、傾、斜、あ、る、陣、列、架、を、
埒、を、設、け、ア、一、千、を、心、ろ、ろ、ろ、大、丸、の、
ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、
し、今、改、の、弊、を、護、を、切、害、し、

画の紙に對抗物を見えとの奮闘家かあつて描く
 此紙一枚の爲のコンクリートの滲れを心と心との
 繋ぎもある太陽系に放射の日光を輝く爲めの
 金泥と砂をび金千五万円を要する由画家が
 らる技巧と交渉があつた、コンクリートは
 結局出来上るものは画家より漸くまきまき保
 めたら一箇月位ころも初めは固く硬く
 力やうりけいけいありある生憎観山が病臥
 である、其の病臥の甲斐もあつた、其の病臥の
 〇てゝゝゝことごとくハアアア
 十月廿六日

十二行

圖書の壁

松青き本牧和田山に
観山畫伯を訪ふ

中止の噂は虚聞
竣成は來秋に

「圖書館の大ホールは突き當りにある、白く、まぶしい、大きなものはあれは、何だい……荷くも早稲田に籍を置く程のものはこんなことをいふ筈はあるまい、然し圖書館の壁、問題も久しいものだ、香ひばかり嗅がされて

有難く ないものは、香ひも香ひだが身も食ひたいのは人情で、かなき屋ならぬ圖書館の白壁を目録筆を通る程のものは、香障目に眼んで通つたものだ。

今年の四月二十四日始めて横山大淵下村観山兩氏相携へて來校の上圖書館大玄關に實地檢分されて以來吾々は藝術家の氣持を尊重して決して急いだのではなからぬが、斯様な氣持のない事もなからぬ。

壁畫も遂に 氏の影響を受ける事なく終るのではなからうかと案じたのは記者のみではなかつたらうと思ふ。

帝大の安田講堂の壁畫は小杉木醒氏の筆で之はかなり當時評判になつた力作であつた、然し大觀山兩氏の合作になる以上我圖書館の壁畫は其の完成を待てば恐らく之に劣るものでなく、我圖書館の永遠に残る限り其の作の輝くであらう事を信じて良しものである事は論を俟たない。

然も大觀、観山兩氏ともこれに就ては非常な熱心で以て當られて居り大觀氏は今帝室御物の製作中の故を以て直接壁畫を振るふ事は出来ないが、構圖の圖樣並に直接筆を把られる観山氏に對して充分なる助力を惜まれないし、また観山氏は自ら彩管を振るつてこの直徑二十尺余の大幅に下方には重疊たる壁層の雄大な雄姿を描きその上に

昇天しつ がある旭日の機然として光彩陸離たる所を描

かれるのである、そのために上野寛永寺の大廳間を用意される事は既報したが、この際観山氏の病を併へられたるは如何に吾々を失望せしめたか言ふまでもない。

横濱本牧和田山の観山氏の玄關に記者は立つた、右方の谷二の谷から陣風が浦の潮が眺められ、松林の間からは紅碧の海が見え水線の間から房總の山々が見え、居る、病床にある観山氏に代つて夫人は記者の間に答へられる、暖かい陽は壁畫を暖かく照らして居る、元來観山氏は頑健な性でなく、薬餌に親しむ事が多いので現在も病床にあるにはあるがこれとて生きているの死ぬのと言ふ重病でもない、先日某所の集會に參會しなかつた事が誇大に傳へられたのであらうと

夫人は語 られた聖徳繪畫紀念館の事も既に決まつてゐたこと、今病氣なるがために起つた問題ではないのである、やがて元氣回復次第圖書館の大廳に着

記者は此の清邁の地に氏の本復の一日も早く畫想の益々豊ならん事を祈つて辭去した、歸りの汽車窓から夕陽に蓋微色に染められた雲を背景にして將り立つ富士の秀峰が眺められた

潑刺たる 慶應の前途を暗示する様に雲間から旭日の昇天するを我圖書館の未來のために我學園の前途のために祝ふことの出来る日の必ず来る事を確信して良いのである

記者は圖書館の神聖なる壁を、なごき屋の欄邊と一掃にする非禮を再びしないであらう

再びしないであらう

○横瀬琢之其の先人編する所の近世名家碑文集續
 の篇を刊行竟とすし以り志を遂ぐる余の家は其の接
 ず。余聊も其の生後之の志を遂ぐる所あり琢之余
 か國方より風味あるを知り先人手書の詩文集十二
 冊を京より来り余に贈る。皆上木を継ぐるものなり
 珍とするは是の其目左の如し

- 一 豊山題跋 長吟 一冊
- 一 真陰略稿 中井竹山 一冊
- 一 坦茶詩稿 江川 一冊
- 一 水竹文集 尾花六竹 一冊
- 一 栗山逸文 一冊

- 一 北嶽集 姫路菅野海 一冊
- 一 節旨文鈔 法家の孫近可 一冊
- 一 立岳詩集 一冊
- 一 東武百回京詩 古賀何庵 一冊
- 一 家世遺事 尾花六竹 一冊
- 一 鬼四山人西游日記 尾花六竹 一冊
- 一 編庭所考 安井息軒 一冊

以上

北嶽集は横瀬君重を跋する

以上皆好官本也。横瀬の未刊書其の頁劍録をい
 刊行する機合もあらざる也
 ○此部は四冊の久方振寝おまの山中内田西
 尾花六竹の印刷物が枕頭と置りて、何れ

兄も十二月難く、靴を中央に論じ、靴を足首尾
の法書に、禮が抜刷、字行冊子と云うてゐる。よむとあ
つた、此の内、余の隨筆、靴山陽に對する、批評が五
頁、餘韻のつゝ、足首尾の拙著を評する。いんが
初めである。六増訂、山陽を批評し、此のつゝ、いんが
ある。足首尾の隨筆、分皮肉の筆、も押ふ人がある
から、必らず針がある。いんが、死か、五生、文、じち
後、ちか、エ、ワ、く、後、いんが、足、も、ま、あ、の、ま、皮、肉
七針、も、ま、く、徹、款、徹、尾、若、者、を、後、め、の、の、
の、い、寧、ろ、あ、ま、の、く、感、し、に、實、に、若、者、と、通、る、尾、の、交
り、に、圓、者、銀、切、字、の、向、人、と、し、七、稀、を、複、本、を、い、の、向、人
と、し、七、稀、を、複、本、を、い、の、向、人、若、者、の、い、の、向、人、知

りぬいし、若者、若者の、足、尾、若者の、改、論、若、者、
の、執、味、来、入、と、若、者、若、者、の、毎、回、今、今、の、時、若
者、が、解、後、録、平、の、こ、と、を、い、あ、し、お、正、を、敬、む、か、す、の、い、
内、田、い、ま、く、心、を、あ、る、内、田、の、心、を、あ、る、こ、と、い、合、て、
も、あ、り、い、ま、く、心、を、あ、る、内、田、の、心、を、あ、る、こ、と、い、合、て、
六、測、量、の、め、あ、り、も、無、つ、に、か、地、の、評、を、足、し、お、め、し、ま、
感、し、し、め、に、こ、と、か、合、つ、に、評、者、山、陽、と、い、ふ、若、者、の、
方、を、い、ま、く、識、つ、て、あ、る、の、い、評、論、七、山、陽、に、就、て、い、ふ、
い、ま、の、寧、ろ、若、者、の、性、格、に、就、て、い、ま、く、語、つ、て、あ、る、山、
陽、論、の、い、ま、く、春、城、論、の、い、ま、く、自、合、の、拙、著、を、出、
し、し、を、接、合、す、友、人、か、ら、各、か、性、格、を、評、し、し、
賞、ら、つ、に、の、い、前、に、和、田、萬、吉、也、士、也、今、

内田魯庵がある。双方せ、浅からぬ交りがあるから
著者の事もよく知つてゐる。随つて其の評も
餘り外をいぬぬ魯庵の和國のうらも一層痛
切を究へる。や々魯庵のさき比優もさあんと著
者も魯庵の唯と呼ぶ著者[●]の長も奉
げ、昔号々世河^通とさす此きい知已の言と謂ひ
やると得ぬ。批評をすい、瑕玼を摘める事、
例とらうとみるん、これ、亦人の美を濟する事、
が無い。近來変体の批評と謂ふへきである。

大正十五年一月廿一日記

附白 魯庵の拙著の評、余の性格、就て修む事、
か多し、余が侍の或る部分、先づ得る事、山本、早稲

もあるし論難抗議もある。卷初の村上專精博士の序と辻善之助
博士の概観は大凡當時の實情を盡して略ぼ遺憾なく事件の輪廓
を描いてをる。且此の排佛毀釋の巻添えを喰つて亡佚した文獻
や喪失した大佛教美術も少くないので、是等の顛末や喪はれた
もの、目錄は文獻史上極めて興味がある。

此中には又社寺の分離や移管に伴ふ種々のエピソードが傳へ
られてゐる。小さな社寺の廢合、齋らした一町一村の榮枯安危
や、個人の信仰の破れから生ずる悲喜劇や、當時の民衆に及ぼ
した信仰混亂の不安状態、單なる經世家の思ひ及ばないものが
あつた。且郷土研究や民俗進化の上からも深く考ふべき幾多の
事例が擧げられてをる。維新史又は文化史の資料として貴重な
るは勿論であるが、之を外にして信仰を基礎とする生活諸問題
の研究上考ふべき資料の集積として『神佛分離史料』は近時の
出版物中最も特異の産物であつて、又今年の出版界の最大收穫
の一つに數へべきものである。

市嶋春城翁の『頼山陽』

は近來最も人氣ある名著である。小説を除いて此の如く人氣が
あるは誠に少なく、又人氣があるのも不思議で無いほど興味に
富んでをる。小説を除いて此の如く面白く讀ませる著述は滅多

にあるもんで無い。小説以外の著述を滅多に覗いた事の無い
文學青年で、偶然之を讀んで面白さに堪り兼ねて有頂天になつ
て激賞止まなかつたものが私の交遊内に有つた。

凡そ年齒の長じたものゝ作は如何に苦辛した著述でも生彩を
缺いてゐる。學術的や思想的に勝れたものはある。考證的に貴
いものや趣味的に面白いものはある。が、人氣を吸集するもの
は容易に求められない。年長者の著述を面白く讀むのは年長者
で、壯齡者は感嘆し或は敬服しても面白く思ふものは無い。
丁度老優の技は感服させられても牽付ける力はないやうなも
のだ。

春城翁の名著を我々が讀んで嘆賞するのは少しも不思議は無
い。が、若い者までも牽付けて人氣を高くするといふは誠に異
數である。春城翁が老來益々冴えて壯者の意氣を横溢するを知
るべきであるが、春城翁の著書必ず人氣を呼ぶのでは無い。翁
の近付は少くも私の知る處で『蟹の泡』と『藝苑一夕話』と
『大隈侯一言一行』と三部あるが、最後のものを除き前二著は今
度の『頼山陽』と多少ドコかで共通する所がある風流傳であつ
て、相當面白く一部に讀まれ、現に私の如きも暫らく机右を離
さなかつたが今後の『頼山陽』ほど盛んな人氣を呼ばなかつ
た。之といふのは前の二著は翁の博覽の産物であるが、今度の

見て其人が解る。況んや其の生涯や業績を月旦し品藻するを聽
けば言者の品性や習癖や好尚も亦自づからに彷彿される。等し

の缺陷があつて意外な暗黒面を持つてゐても、丸裸としても相
當に値踏みされる一簾の人物であつた事は争ふ事は出来ない。

『頼山陽』は縦令時代を異にするも何十年間傾倒沈潜して殆んど相識の友の如く、所謂足駄を履いて其の腹中を駆け廻り廻る心肝肺腑の底の底までも究め抜いてゐたから、山陽に就て語る恰も自己を語るが如くで、生氣が全幅に溢れて讀者を牽付けずには措かない。

翁は座談の雄。圓轉滑脱の中に機鋒を藏して聽者を擒縦するの妙を究む。翁は政治に奔走する何十年間、演壇の闘將として雄辯を以て鳴る。が、演壇に立つて數百人乃至數千人を對手に長廣舌を掉ふよりは數人の小集に得意の風流を縦談横談する處に翁の本面目が現はれ、滾々盡きざる博通と快辯とが愈々冴えて讀者を煙に巻き酔へるが如くならしめる。如何なる平凡の家常茶飯的話柄も翁の口頭に上る時は忽ち精彩を生じて活き／＼とする。翁の座中に在る恰も枯木花咲き三冬煖氣を生ずる趣きがあるので、群客自づからに牽付けられて翁の周圍に集まり、翁は常に座談の中心となる。圓滑にして俊爽、恬淡にして辛辣、機智縦横、諷諭百出、翁の座談は天下一品の稱がある。

『頼山陽』は恰も翁と相對して此の巧妙な天下一品の座談を聴くの間がある。戸籍調べや履歷書から初める傳記の從來の型を破つて、丁度フキルム劇が先づ登場俳優の素顔を映寫する如くに山陽自身を引張出して素顔を讀者にお目見えさせる。翁の巧

術なる話術は先づ讀者と頼馴染にさせてからソロ／＼と牽込む。翁の座談の緩急調のリズムは句々章々に現れて聲を聴くやうである。最も得意の壇場に入る時は紅を潮して破顔する翁の會心の笑聲が紙面から聞える。翁が竹田の描いた山陽の肖像を評して、山陽に親炙して何も彼も腹に這入つて名手の筆であるから活氣が自づからに漲つてをると云つたは、其儘移して翁の山陽傳の評語とする事が出来る。

此の竹田の山紫水明處に主客相對酌する圖は本書發行後愛讀者から寫眞を送られた由で増訂版に挿入されてるが、山陽の面目と生活を偲ぶべき好畫圖である。暫らく此の小影を熟睹して瞑目すると竹田と代つて春城翁が山陽と對座款談する別畫圖が眼裏に泛んで来る。翁と山陽とは時代を異にしてゐるが、恐らく翁は山紫水明處に主客對座する會心の場面を夢寐の中に幻想する事があらう。

翁が山陽を語る殆んど自己を語る如くであるは當だ何十年來山陽に傾倒して、山陽に就て細大究めて知らざる處が無いばかりでなくて、山陽と翁とドコかで共通點會してゐる處があるからであらう。山陽は儒を以て起つて操觚に隠れたが、念々國事を憂ひて大義を唱へて止まなかつた。翁は今こそ讀書風流に韜晦してゐるが、本と政治に志ざして曾ては議政壇の候補を争つ

た事もあつた。山陽は儒を任しながら何を摘み章を授くる師たるを喜ばなかつたが、經學文章は自づから門下に俊髦を集めて松陰鰲水等の異才を輩出した。翁は學者を任せず教育家を以て處らなかつたが、永く早稻田に席を置いて教壇にこそ餘り立た

なかつたが諸生を董沐し、早稻田三長老の一人として推されてゐる。山陽が翰墨の技を以て鳴り書畫骨董にも亦暗からぬは翁の傳ふる通りであるが、翁も亦筆札に長じ道勁雅馴は儕輩の推す處である。好事の趣味に造詣し且醜誦するは山陽以上であらう。就中翁と山陽とは一が青州從事たれば一は醴泉の大守、中山千日の酔も足らざるべく、翁が山陽の酒を談するや山陽の酒曆よりは春城先生の灘の禮讚を聴く感がある。若し夫れ酒中の三昧境に入つて品詩折花の風流に陶然たるに於ては翁と山陽と何れぞや。山陽若し存在するなら翁と相見て天下の英雄は使君と操とのみと云ふならん。翁も亦恐らく、山陽と時を同うして生れて相共に對酌して伊丹の美醜を談する事が出来なかつたを終生の恨事とするであらう。

山陽傳の批評は春城論となつた。が、昔しから其友を見て其入を知れといふ如く、當に生ける友ばかりで無く會心の故人を見て其人が解る。況んや其の生涯や業績を月旦し品藻するを聴けば言者の品性や習癖や好尚も亦自づからに彷彿される。等し

く山陽を評するにも翁と蘇峰氏と故思軒とは各々看方を異にするので、三人三様の批評は各々各自の面を照らすの鏡とする事が出来る。

が、夫は扱置いて山陽は何たる多幸の文人であらう。近代文人中山陽ほど多く評されたのは無い。其の尤なるものだけでも前記の翁と蘇峰氏と故思軒とに加ふるに木崎氏の著がある。小篇零冊斷章片楮まで拾ひ上げから一部の山陽書史を作るは決して難く無からう。當に近代ばかりで無く、古今山陽ほど人氣ある文人は少からう。雲耶山耶の吟ぜられるは枯れすすきや籠の鳥どころでは無からう。日本外史の賣れ高は恐らく今の人氣小説家の作の全部の賣れ高を合算したよりも多からう。人氣は眞價を決定する唯一の尺度にはなるまいが、亦決して眞價を裏切るものでも無い。少くも人氣を沸騰させる魅力が著書にも人物にも有るのは争はれない。

山陽は既に論じ盡されてゐる。著書も人物も評價は略ぼ一定してゐる。外史の文章が漢文として成つてをらんでも、歴史として出鱈目の小説野乘に過ぎなくても、外史の日本文學史に於ける位置は動かすべからざるものがある。又山陽の性格に幾多の缺陷があつて意外な暗黒面を持つてゐても、丸裸としても相當に値踏みされる一簾の人物であつた事は争ふ事は出来ない。

『頼山陽』は縦令時代を異にするも何十年間傾倒沈潜して殆ん
傳なる話術は先づ讀者と類馴染にさせてからソロ／＼と牽込
む。翁の座談の緩急調のリズムは句々章々に現れて聲を聴く

人氣のあるものは必ず半面に敵がある。判官最負といふ言葉があるほど人氣のあつた義經に兎角の芳ばしからぬ艶聞のあるのは事實の眞否は左に右く義經の花やかな成功を媚嫉するものが有る事無い事尾緒をつけて觸れ散らしたのが後の世までも傳へられたのであらう。廉塾に於ける青年山陽の不品行の如きも、義經の艶聞と違つて較や信すべき根據があるやうであるが、矢張山陽の後の人氣が招いた反感から若い時代の暗黒面が扶ぐり出されて吹聴されたのであらう。縦令事實であつても青年時代の所謂若氣の過ちは後の業績と相殺して左して咎めるに足らないのは、若い日吉丸や藤吉郎が盜賊の居候をしても金の持逃げをしても後の太閤の偉業を毫も累するに足らないやうなものだ。

一體人氣は圓滿無礙の聖人や君子には湧かないものだ。多少の不良分子があつて面白味のある人間で無ければ人氣は生じないものだ。人氣は魅力であつて徳望では無い。徂徠と仁齋と比較して、仁齋の學徳人品は徂徠の敵では無いが、徂徠の方に人氣があつて護國は堀河塾の凡才庸器と違つて俊傑奇才が雲の如く集まつた。山陽時代の儒林を見渡して、小竹は市塵があつてホコリ臭く、履軒は田臭があつて喰足らず、敬所は朴念仁で對手にならず、一齋は固苦しく、惟堂はマジメ過ぎ、栗山は官僚

學者が珍らしくない今から考ふれば覺悟するがもの無い。山陽をして今に在らしめば國家の功勞者として少くも貴族院議員（山陽最負には不足だらうが）ぐらゐにはなれるだらうし、理財の才幹からは會社の重役ぐらゐにはなれやう。此の學者でもあり又理財家でもあるといふ點が亦幾分か春城翁に共通する。

由來學者や文人の仕事は書齋で營まれるから其の生活や行實の社會的に顯はれるのは少ないのを常とする。隨つて傳記を編まうとすれば昵近者に質すか或は交友間に往復した尺牘に頼る外は無いので、時代を距て、昵近者の多くは亡びたもの、傳記は手紙が唯一の資料である。幸ひ山陽は筆豆で無数の手紙を残し、しかも生前からの崇拜者が多くて斷簡零墨も大切に保存された爲め、故思軒及び木崎氏が手紙を基礎として傳記を著述したに係らず、春城翁は別に遺墨を採訪して二氏が使用したのものよりもヨリ以上の豊富の資料を集める事が出来た。此間の苦辛は喩ふべからざるものがあつたらうが、シカモ此の苦辛は山陽癖の翁が楽しんで満喫する處であつた。但だ之だけの資料を累積するには一通りで無い長い歳月を要したのは當然で、翁の著述的氣根の耐久は眞に驚くべきものがある。シカモ之だけではマダ満足出来ないで、發刊後僅に一年を経た第六版には其後收得した材料に由て復た新たに百頁を追加してをる。翁の山陽研

臭があり、中齋は物騒である。見渡した處、多才多能往く處として可ならざる無く、時務に通じ世事に精しく、慷慨氣節あつてシカモ風流を解し、詩を品し畫を談する清遊の友とすべく、醉歌亂舞の濁遊にも亦宜しき八面玲瓏の高才は山陽一人であつたといふも甚だしい最負眼で無からう。

山陽が廉塾の不良少年であつたといふは必ずしも山陽の偉器を傷つける話では無い。維新の元老が青年及び壯年時代は敢て云はずもがな、老年になつてさへ屢々有らぬ噂を立てられたのは渠等の成育時代の空氣が悪い習慣を與へたので、渠等の環境を多分考慮して斟酌しなければならぬ。古今の偉人傑士は大抵各々多少の程度を異にした不良少年ならぬは極めて少ないので、聖人君子と云はれた人たちの生ひたちにさへも不良の事跡を残したものがあつた。思慮未だ定まらぬ少年時代の多少の不良はワザ／＼洗ひ立てて咎めないでも目をねぶつて知らぬ振するが古人に對する禮儀であらう。

但だ一つ開棄てならぬは山陽は利殖に精しく幾分かシミツタレであつたといふ説である。が、富を卑しみ財を語るを不義とする封建の學者としては苟くも殖利に觸れる逸話を残したといふは不似合であるが、土地の投機や株の賣買に熱中したり、家賃や地代の取立てに忙がしく銀行の預金の利子を勘定して樂む

究惑はドコまで行つても留まる處を知らないものである。

翁の研究は微に入り細を究めて學者著述家としての造詣や業績や見識や態度から日常細事まで萬遍なく行渡つてをる。門人某の筆録を基ひとして猶騷動まで記述するに到つては如何なる些事をも見のがすまいとする翁の細心を知るべきである。資料の豊富なと、洞察の犀利なると、一言一行一舉手一投足までも洩らさず記したのは恰もボスウエルの筆に酷似してをる。女弟子細香との風流韻事の如き、酸いも甘いも嚙分けた苦勞人の翁ならではの容易に窺ふ事の出来ない極めてデリケートの機微にまで穿入してをる。恐らく翁の最も會心の一章であらう。

最後の山紫水明處を訪ふの記は畫龍點睛の一篇無韻の長詩である。叙景、咏嘆、感慨、懷想、情珠り筆隨つて綿々の餘韻盡きる處を知らない。讀畢つて暫らくは鴨漚の水莊に魂馳せて古人を懷ふの情に堪へない。劇以上、小説以上に人氣を呼ぶのも不思議は無い近來最も興味ある好什である。

我家の書齋は三十石である

吳越同舟、異種異類の群籍が雜然堆を成してをる。塵石に窮屈な籠へ入れられた鳥のやうに重なり合つて近刊の中にはマダ目をも見ないものがある。が、三浦周行博士の『過去か

田方面に多くの友人があるが余が生涯の如き高市唐の如
く福解しておれぬといひては解するも別の高
の人の不方が公平である。この浮世中の情こそ余
の情を補つて送るの心。

福ある余を山陽といひては就其を余があるといひて
政況の只由ゆきき事れ酒のうらぐ似寄りの本
けても中々世隔するの言あるは現狀を
ある點を山陽と北道に数くしてある就てある
これの事しく見申を誤つてある。

山陽を修ることも先から自家を修るが如く此の
浮世のい若者が山陽のこのことと先づ諸が深
いことも先づ此のいあうう、善しとんを以上の空

評ハ無き人を加知色の言に感せざるを得ぬ
評者ハ此若を不悦するも物の中をんてあると
いふのである。いふて其の使評ハ無い此頃
責擲店の方今たも其の行のよの本
に就て投票も券つは結果といふを要する
高市唐の某が先づ出故の言のよ二并
イ入字也。先づ二次くハ絶筆。新山陽が有
つれといふ人ハ此

六段七段半段本段の七うく中七段と取
らねばいふては其といふ。巻尾に高市唐の情
を収録せん歎。 ちから 十一月二十九日

○昨今昔高市唐行の母中、浪高をよむて浪

花葉を十六冊を刊行先とするの奉旨あり、其内後を
 と南の漫遊の若母看にもめれり提陽奇紀二十

攝陽奇観 五册

著者濱松歌國自筆の稿本にして、原本は六拾冊。未だ世に刊行されぬ所謂天下に一部より存在せぬ
 珍書です。歌國は三世中村歌右衛門が帷幕の作劇家で、この攝陽奇観全部は當時歌右衛門の庇護者
 として知られた島之内の素封家(人參三藏圓本鋪)吉野五運氏の祕庫に永く珍襲されてゐたのですが
 今回我が刊行會にては、特に吉野氏の好意により此の門外不出の珍書を今期刊行の中に加へ得たこ
 とは此上もない喜びです。本書の内容を略言しますと、第一より第九に至る九冊には、世に廣く讀
 まれた『攝陽落穂集』、『筆拍子』、『南水漫遊』等の材料が蒐集されてゐます。また第十以降の五十一
 冊は、大阪落城の日から貳百餘年に亘つた年代記で、著者は其の最初に「……大坂市中を初め攝河
 泉の間に古老が口碑に残れる事實、または家々の日記に書と、めし忠貞孝子仁政の吉事、舞馬水災
 の凶事を記す」と自ら書いてゐます。まかも此の年代記は特殊の味ひを持つたもので、畫あり、
 詩あり、歌あり、俗謡あり、相撲番附あり、芝居繪番附あり、時には流行の新刊原書を板行のまゝ
 に貼付けあつて、元和以降天保に至る浪速の繪巻物がこゝに展開された觀があります。

冊とあり、前日浪葉に記しし友人二三をきく、此書
 の吹聴をきき、右にぬあるの其要録を
 ○課税の進出あるにつらからざるあり、而も毎年
 収入款の抽出をきき、面倒あり、税務署の本定
 り任する、こと受て年々、えんは漢の并に徴せ
 無りし、本年及に、所り、よく祝賀増加する、
 初め、税務署、税て、元納く、二千六万、月計り
 の漢の并を、を、えん、の、一、四、八、漢、并
 の、ま、け、け、り、り、中、二、回、に、行、正、を、要、求、す、
 外、し、て、其、目的、を、達、し、以、て、ま、る、く、二、面、倒、る、
 半、数、を、経、り、而、も、ま、る、と、長、お、の、仕、合、を、得、
 ぬ、ま、此、の、見、徴、行、正、を、申、上、り、ま、る、が、新、機、と、

漸やくかみん、家庭に凡彼を記すことのみを
 一、このまゝに社名や説と見えなきは、彼人の詩
 故に此程のよまも、世の法に男子の
 痛罵、彼人の詩集の趣、男女互に
 この此や流の特色、彼人の此詩も、
 勢を感しての故、あゝ、彼人の詩集
 こゝに在る

十一月廿九日

○静子の採選亭、柴崎直古か木活字、
 を印行した事、彼の「一、木活字、
 が、高田、採選亭、山梨、
 上段、此ことが、
 出たことを、初め、
 福川、

七初めを兄も、
 係があつたこと、
 高福川と、
 採選亭、
 可なり、
 採選亭

採選亭木活字板に就いて (下)

笹野 堅

私は採選亭木活字板の興味から、採選亭主人柴崎直古の事蹟を知らんが、僅かに前號述べた以外のものを得なかつた。墓所を探ねて駿府傳馬町法傳寺だと知つたが、墓石にそれらしいものもないのを聞いて、未だ踏査をしなう。

柴崎直古著「俳諧歌六帖」二冊は、製本、縦七寸四分、横五寸一分、無野、毎頁九行で、上巻は青色、下巻は淡褐色の表紙が附いてゐる。私はこれ以外にこの種の活字を用ひた著書を知らない。只時雨窓の「心ひとつ」といふ句集に因んでつけた、時雨窓、雪中庵の句集「心の閑」の中に僅か四丁ではあるが、「三井園評夏季四句吐」といふ三井老人の撰句の巻が、この活字で印刷されてゐる。句を「俳諧歌六帖」所用の活字で、俳號を正譜漢字の活字にて刷つてゐる。私はこれによつて、採選亭木活字の明治前後まで傳へられてゐることを想像してゐた。然るに今茲九月、行書体の漢字と平假名との二種の活字九十六本が発見された。この活字に就いては、既に前號に詳しく報告されてゐるから、こゝには贅言しない。

採選亭ではこれより先、正譜漢字の活字大小二種を新刻した。そして文政四年初冬に始めて、稻川居士の「稻川詩草」七卷五冊が、その二子文行玄堂によつて輯せられ、門人鹽谷定遷伯景、戸塚維春春輔によつて、校訂され世

に出た。

稲川はこの新刻の木活字板を喜んで、七絶一首を作った。

採選亭主人新刻活字板成矣字畫精工可愛喜而賦之爲贈

草火不須燒藥泥鑄成萬顆列瑤瑤長期海內流傳遍應與武英珍板齊

「稲川詩草」收むるところ、五言、七言の古詩。五言、七言の截句。五言、七言の律詩。五言排律、六言、雜言、通計六百九十四首である。「詩草」に跋のないのと、有るものがあることは既に云つた。何れも巻首に、友人松崎懋堂の序を稲川自ら書して載せてゐる。松崎懋堂、名は復、字は明復、木倉又益城とも號してゐる。肥後が生んだ近世の碩學である。此の人稲川と同じく、明和八年に生れ、稲川より壽を保つこゝ十八年、弘化元年七十四で終つた。有跋本は、門人和田正誠の文を柴隱居の書したるを附す。和田正誠、字は子韻、由比隣町屋原、盤山和田玄揮の子である。柴隱居は、柴田氏、通稱權左衛門、名を庸昌といひ、慈溪と號し、後柴隱居と稱した。遂翁和尚に參禪し書をよくした。庵原の人で稲川と交りが深かつた。

「稲川詩草」の卷末には、「書林採選亭鐵屋十兵衛活版」とあり、稲川玄度先生著述書目として、「稲川文章」五卷、「周官聯事圖」一卷、「古今韻箋」一卷、「字緯」十二卷の近刻豫告があるが、遂に刊行されなかつた。

稲川と柴崎直古との交誼は、「稲川詩草」出版以來益々深くなつたが、稲川が文政六年夏華圃に占居した時は直古がよほど盡力してゐるやうである。石上竹隱におくれる手紙に、

買宅一件書林直古之了簡有之何か一目論いたし候由に御座候若又成就不仕候ハ、又々相願可申候先日者御丁

寧御傳言忝奉存候 以上

七月十九日

君 輝 足 下

玄

度

いある。

文政九年には、平尾他山の「他山近体詩稿」四卷三冊（嬌、鳳、龜）が出版された。此の書縦八寸二分餘、横五寸二分餘、「稲川詩草」より稍小形で、單郭、毎頁九行罫紙、毎行十九字詰、焦茶表紙、唐本仕立なること、兩者共に同じである。

平尾他山、諱は信順、字は徳卿、他山はその號である。美濃岩村藩士刀丸某の第三子で、同藩平尾氏に養はれ嗣となつた。寛政中、藩主松平侯世子の近習となつて江戸に出で、太田錦城の教を受けた。その後諸職を歴て、文政三年、西駿横内村宰となり治績を認められて、同九年岩村郡宰となり、藩校の儒官を兼ねたが、天保十一年六月七十四歳で郷里岩村に歿した。他山が文政三年から九年まで、西駿横内村々宰たるの日、横山近義なるものその詩を絶好し、信濃山本義卿に計つて、詩集出版の機が熟したことは、山本義卿の序に見てる。然るに稲川先生「東寓日歴」、文政九年五月八日の條に、

有岩村藩人山本來訪、致平尾歛藏書、且催詩集之校評、先是歛藏、以其集詩余点檢、既閱其半、未畢業、故相促也、山本乃其門人云。

とあり、又十八日の條には、

○是日岩村藩人某來訪、錄取平尾鐵藏集而歸。

さある。鐵藏は平尾他山の通稱か、山本は山本喻義卿のことであらう。

即ち横山惟信近義(卷之一)、山本喻義卿(卷之二)、杉山温如玉(卷之三)、杉希寧幼安(卷之四)が之を校梓した。山本喻を除いては、校者皆駿河の人なれど、その何人たるを知らない。

「近体詩稿」載すところ、五言律八十七首、七言律百二十首、五言絶句五十四首、七言絶句六十九首、七言絶句二百十二首である。

文政十二年には、猿飼敬所撰「西河折妄」三卷三冊(上、中、下)が上梓された。製本、縦八寸、横五寸七分、四周單邊、毎頁十行野紙、毎行二十字詰、茶表紙にして普通本の仕立である。

猿飼敬所、名は彦博、字は希文、通稱を安次郎といひ敬所の號を以つて知られてゐる。寶曆十一年京都大宮に生れ、弘化二年八十五歳で歿す。篤學の儒者で、公卿士人が多くその門に就いた。權大納言藤原資愛が此の書に序してゐる。校者は駿城長田道王である。長田は駿府の勤番長田左京のこまか。跋は中邨元恒である。その何人たるか未だ詳にしない。

清毛西河牌説古今著述尤夥其立論好臆古説世之好新奇者莫不帳秘予甚惡之近時江戸山本北山梓其徑問九卷稱其博達平安敬所先生憂其感後學姑、就其本著西河折妄三卷非言其妄止此也予讀之細大必辯悉中膏旨西河復生不能解免豈不愉快乎敬所先生博洽好古不喜新奇平生所論著平實明確絕無虛誇之風予嘗遊于其門自後致書質問二十餘年每服其精密西河之學則反之宜其及此舉也今此數卷其妄盡見又何及論其全集哉故予上之活版以公于世

夫好新奇者或見之庶幾其悔悟乎

文政己丑仲春

高遠儒員 中邨元恒謹識

さある。同じき十二年には、羽倉簡堂撰「駿河府志」一冊、それと大同小異の「駿河小志」一冊の二種の地誌が前後して出た。兩者共に製本、縦八寸三分、横五寸二分、單郭、有野、毎頁九行、毎行十九字詰で、裝訂は全く「稻川詩草」と同様である。

羽倉簡堂、名は用九、字は士乾、可也、蓬翁昌齋等の別號がある。寛政二年大阪の官舎に生る。文政六年、駿府の代官として赴任し、駿府紺屋町に住んだ。彼の勤績は十有餘年にて、殆ど第二の故郷の如くであつたであらう。二書を比較するに、「小志」は「府志」の例言二條に、

此篇分爲八門而藩封附之部都城郵驛附之海港二者記事寡少不足立一門也

の一條を加へてゐる。即ち「府志」は本文十八丁なるに、「小志」は三十一丁及雜記九丁といふ倍以上の増補である事を叙する極めて簡潔なる名文を以てし、小冊子よく地理の一般を知らしむるは、この書の特色である。

「駿河府志」、「駿河小志」及び、「他山近体詩稿」、「西河折妄」の刊記は共に

久能山御用

駿府江川町

御書物所

探選亭 鐵屋十兵衛活字版

とある。探選亭鐵屋十兵衛、或は書林直古の名は、内容外觀共に立派な刊書事業によつて、記憶さるべきであらう

(丙寅十一月九日下稿)

○頼山陽の印に「嵩」の二字を刻したるものあり、漢防に
「^押印をえしめる、自刻のありたかきその刻もあつたか
今に隠し多いか、此印の由来に就ては曾りし通に
とも無の比、然るに此頃山田正平が池大雅の自刻の印を
得たりと云ふ可き、大雅の印に「嵩」の二字が横に
刻してありしを、^鈕葉が所から推すと「嵩」
の二字の體形より、書よりを葉しは語にありか、推
測せんと無味もあらず、此印もとも無名の在歟、^刻
ありし一比、此の山陽の手入り、先んが「嵩」といふ
比と云ふる所から考へるに、山陽の印に「嵩」と
いふの無名の印を採つたの心ありまじきかと
推測せらるるに、^印「嵩」といふこと、^嵩「嵩」といふこと、^嵩
推測せらるるに、^印「嵩」といふこと、^嵩「嵩」といふこと、^嵩

し書きつはれり

十一月二十日記

○中央公論社から編輯主任が初めに訪ひ来たる、何か字の
福しと云ふれども、依頼を受け、社からの注文は、
が出し比、蟹の泡のやうな逸話を東西對するや、
は蒙米成の撰んむといふこと、むあるが、
は、ことを自つと思ひ、自らいふこと、断つ比、
死んむ、何んむ、むといふこと、
の才二の地、^書字に、^{登載}を、^およ、^そを、^原稿か
出来し、^おの、^その、^一端と、^語る、^を、^そを、^そと、^い
どうせんが、^支の、^氣を、^提し、^是、^眼を、^頼、^山の、^心
来年の二月號に、^{登載}せしむること、^し、^た、^こ
九、^い、^あ、^三、^十、^頁、^位、^を、^と、^ら、^ふ、^と、^思、^は、^れ、^る、^か、^ら、^い

○名古庵の舊家平出が此次回書を著したるのむ五
當國は今のむが關東國西白のむ居の予に由し此
此家の舊家む尾張と南の其前住にあつた關係から
自れ進者が多し、が古殿が多く交つておゑ、西勢
本をむカヤかゝるすあつた為の多くの値をむつた
と見へる、村口者居の談に明應殿の論議せあつた
が千二の目も京師の出来の予に物し比とか、自分
いさむのむ論議を見比しむことが多し、其の版式も
全く公平、版をつくりしむといふから、此本を西勢
刊して明應の年止らを入ん比しむと名く、西平
も七百年七あとのいさむあつた、西平の版も
却つて價の島といふもあつたこととあつた、村の入

札に云ふに古物の内に三才回境といふ書もあつた
と、これと中本林洞の著述む未刊のむあつたが七十四
歳の時の著かあることか序文で知らる、林洞が一
個の画家のむあつた、いさむの著述のあつたことと
あつた、多くの人のいさむてあつたが、**わ**自今が架
中、これ五六の著者あつた、あつたのこころむむむ
てあつた、あつた、コンナ著述のあつたこととあつた
あつた、あつた、林洞む尾張の人の平出延慶とい
ひあつた、あつた、あつた、此行むむむむむむむむむ
を求めむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
見へる、現に者守にむ出島の林洞の平出版が折
込んむあつた、あつた、折込を頼んむむむむむむむむむ

又、村に自らありて、そのありしが、自分にとりて、信じて
いのか、儚く自らありて、あるから、購入と見念ふこと、
書名は、こゝに、存し、おく、是、安かある、非、洞とあり、
該、情、る、その、者、と、ら、く、得、る、平、出、本、は、自、分、の、贈、り、入
り、の、二、三、の、古、法、家、を、い、は、る、が、珍、ら、しい、の、い、

一 和名集 并 異名 判 記 上下 合 一冊
いろは順に 排列してある 元和の年
強、ち、あ、つ、て、願、了、珠、籍、に、あ、る、出、版
大、波、の、贈、り、に、海、民、記、も、久、張、り、迄
海、軍、の、記、に、あ、る、が、こ、の、も、久、張、り、迄、
と、あ、る、本、を、郵、頼、する、に、稀、観、の
出、て、あ、る、

一 庭訓抄

一冊
元々和漢の法字本があるが、年
刊し、て、ま、る、こ、の、も、亦、稀、観、の、出、て、あ、る、

一 和歌本

一冊

目此者一本家花とあるも大に細字の
此者と版刻同し、かつ、あ、る、こ、の、も、亦、稀、観、の、
の、刻、年、あ、つ、て、珍、ら、しい、

一 和歌今昔抄

一冊

明治十七年刊行、函館英人バテロル
の、和、歌、観、也、と、あ、る、印、辨、一、冊、の、あ、る、の、
ら、和、歌、研、究、の、一、家、初、の、こ、の、も、亦、稀、観、の、

高の價値がある

十二月四日

○ふ又散葉坊有り、因方と逸る、獲る不あり、是れ
複製品の古文書若干をゆりゆく。 (十二月四日)

前田家複製古文書

二帖

小野道内奉康白書 一巻

楠正成奥判文書

一巻

明治十三年 聖上 前田好、臨御の節
獻詔に供し、是の事を記念する複製品
し、是の也。楠正成の文書、和野助康の
戦功に裏かしたるもの、一枚の致証源
あり、是れ、奉康、前田、就美の複製品

傳も美院のもの、せ、就、は、所、文、者、の、後
追記す

茶根園所文也

茶根園所本陣在、内、臨、殿、に、花、事、文、者
の内、若、干、を、送、心、大、正、二、年、五、月、小、田、原
の、中、山、某、が、復、本、を、し、た、る、也、其、の、目、左
の、如、し

一 茶根園所の圖

一 瑞草あり、三竹冬、おりの、福也

一 園所控、出、高、札、園所への、伝、出、の、合、鑑

一 花、名、園、不、通、り、の、手、形、数、種

一 所、人、の、此、園、不、通、り、の、手、形、数、種

著者の名を闕すも跋文より推す
錦文流の草子と見へし、本文八行の大
本を挿給あり、神代の事始を滑
秋の事ありしを、艶氣の無きを
見るも、跡を稀也、大改永田氏
舊花とす、價る二十日也

一 芳野新詠

小菊本

一冊

鳴門の荒井庵年の芳野新詠
二 廿方山極本始月の巻跋と
一 刻しなるとも也 卷首ニ文以元
年 亦元正原野年の序あり詩

十二行

百数種、多くは極、潤す、稀観の
書あり、芳野、真史、歌、名所の巻曲と也

一 四文印譜

一冊

谷代文晁文一文二文中四家の書
印を輯め、その大山元年、其書名極
山の印行に傳ふ、印は、新井某花すと
あり、他の文晁印譜に存しと之ん、
欠くものあり、余如皇宮目、嫁
ふと家宛の印者、加ふといふ

一 續唐三體詩

四冊

康遊年河江柳有士高の送山所詩人の
 政とるをるんとを獲易か々々るの者
 ず

○五月同書級ニ一りも松七谷有士高の送山所詩人の
 あるる方も並に擇し後ある者獲の易か々々るの者
 を得しはるは松七谷有士高の送山所詩人の
 るよりし一は松七谷有士高の送山所詩人の
 才二位ニ高有士高の送山所詩人の
 のる表とこいふぬめおと
 十二月十日

| | | | |
|------------|-------|----------|-------|
| 画面題辞典 | 二五三 | 日本評論社 | 二、八〇六 |
| 上代国文学の研究 | 三八〇 | 我国経済と財政 | 二、一〇八 |
| ラチオ講演集 | 二八七 | 思ひ出草 | 八六九 |
| 製図便覧 | 三九六 | 東西流行情 | 六七一 |
| 自然と文化の偕調 | 二六三 | 我國の金融市場 | 六二八 |
| 合計 | 六、四五六 | 為替問題十講 | 六〇二八 |
| 警醒社 | 二、九〇一 | 同文館 | 一、二二六 |
| 一 日支丹物語 | 三七四 | 近代簿記精義 | 一、三七〇 |
| 吉利支丹物語 | 一、〇一二 | 日本民法総論 | 四八六 |
| 神による解説 | 一、八〇三 | 親族相族法綱要 | 四一七 |
| 日本鳥類図説 | 二九四 | 社会計監査 | 三九五 |
| 母の愛 | 二七三 | 社会改造と企業 | 四八二 |
| ナイチンゲール | 三三六 | 債権法概論 | 二六二 |
| 運命以外の一路 | 三三〇 | 産業革命史研究 | 二二五 |
| 武蔵野の一角に立ちて | 一、〇六〇 | 企業形態論 | 二二四 |
| 星の研究 | 一、〇六〇 | 企業業論 | 二二四 |
| 井伊大老傳 | 二九五 | 英国産業革命史論 | 五、八一六 |
| 子供のフランセス | 九、七七七 | 合計 | 五、八一六 |
| 聖フランセス | 九、七七七 | | |

申込者のはがきは総数調査の上夫れぐ各書店へ配布致しました

この表を... 十二月十日

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

謹啓 貴店益々御隆盛の段慶賀の至りに存じます、陳者当月一日より向ふ十日間文部省主催の全国読書週間に於て本社は此趣意に添ふため、各書店の最も自信ある良書を選択し読者に向つて書籍の無料提供を催せし処非常の好評を受け総数六万二千七百六十六通に昂る大数の申込みを受けました事は平素各位の御後援の賜と茲に感謝の意を表し謹んで御礼申し上げます、就ては総数を各書店別に分ち更に書籍別に分類し御参考迄に御一覽に供しました、本社今回の催しは常に読者に向つて読書趣味を鼓吹し併せて書籍広告に注意力を惹起し益々購買能率を増進せしめ度きの信念に外ありません何卒本社の書籍広告に対する主旨を御了解の上倍旧の御声援を御願ひ申し上げます 敬具

大正十五年十一月廿五日

報知新聞社 広告部

大正十五年十一月一日日本社の催せる書籍無料提供成績発表

各書店別内訳総数 申込者数

| | | |
|--------|----|--------|
| 三省堂 | 二 | 八、五六八 |
| 早稲田出版部 | 五 | 九、七六六 |
| 博文館 | 一三 | 六、四五六 |
| 同文館 | 一〇 | 五、八一六 |
| 春陽堂 | 七 | 九、九〇一 |
| 改造社 | 五 | 六、四五四 |
| 日本評論社 | 五 | 六、〇二八 |
| 警醒社 | 一 | 九、七七七 |
| 書店 | 八 | 六二、七六六 |

三省堂 廣告掲載点数 申込内訳
英和辞典コンサイス 八、五六八
和英辞典コンサイス

早稲田大学出版部

隨筆 頼山陽 二、七八四
哲学 概論 二、一一六
現代政治の科学的視測 八三五
ロメオとジュリエット 二、一五一
社会政策新原論 八八〇
合計 九、七六六

博文館

油絵の手ほどき 九七〇
電気の知識外 二、四三七
近世日本世相史 九七三
象徴主義の文化人 一一一
谷由文 庫外 二八六
画題辞典 三五三
上代国文学の研究 二八〇
ラチオ講演集 二八七
製図便覧 三九六
自然と文化の偕調 二六三
合計 六、四五六

警醒社

一日一語 二、九〇一
吉利支丹物語 三七四
神による解放 一、〇一二
日本鳥類図説 一、八〇三
母の愛 二九四
ナイチンゲール 二七三
運命以外の一路 三二六
武蔵野の一角に立ちて 三三〇
星の研 一、〇〇六
井伊大老傳 一、〇六〇
子供のフランセス 二九五
聖フランセス 九七七
合計 九、七七七

申込者のはがきは総数調査の上夫れ各書店へ配布致しました

春陽堂

廣告掲載点数 申込内訳
寂しければ 二、五三二
近代異妖篇 一、九八一
孤島の琉球史 六三九
近世紀聞 一、四三八
日本民謡大全 一、四九五
農文藝十六講 七六七
藤村詩集 一、〇五〇
合計 九、九〇一

改造社

秋の一夜 一、九二七
民法と労働法 五三二
日本農民史語彙 六二八
故郷 一、參七一
海に生くる人々 九九七
合計 六、四五四

日本評論社

我國民經濟と財政 二、八〇六
思ひ出草 一、一〇八
東西流市場 八六九
我國の金融市場 六七一
為替問題十講 六二八
合計 六、〇二八

同文館

近代簿記精義 一、二二六
日本民法総論 一、三七〇
親族相族法綱要 四八六
社会計監査 四一七
社会改造と企業 三九五
債權法概論 四八二
産業革命史研究 二六二
企業形態論 三九五
企業論 二二五
英国産業革命史論 二二四
合計 五、八一六

○坊間を過り花千の園方を得

十二月十二日

一官板古本五編

三冊

此書朱竹垞の宋本を覆刻本を更に覆刻し字より一官板中最も稀なるもの也

一奮忠行類編

韓政

二冊

此者松室の子跋系に詩又を収め松室の壬辰の役を公海正の陣に今高麗海正を載るのしる韓傍に後使節として日本に来る。北集申入海正名中探訪

Handwritten notes at the bottom of the page, including the characters 'の' and 'の'.

記尤も興味あり。

一 癸巳西遊日記

古三共一本
昌平一映写本

五冊

其一の自筆本本の次十四年為前の所記
其の條々之に男守一其の副本を傳
り寄けて映写し其こと巻尾に左の條
記す之を以てす。

ニ又西遊日記の次十四年春為前の
之類條々公傳之に及て是等より田所源
一少年借老有し其の必も源成者不
都なありしや子長出入を改む内光三
一出入改ありし由死之に及山本に遺物と

十二行

所記いなり其の必も源成者不

都に守一

本記を以て日誌体日付宿泊本若干の記す
あり外多くは日當目を告し其の必も源一
部粉をとり心を傳へし

一 駢志

十六冊

此者素丸(身)に類似の事、實を駢列し比
るにようして日本に、柿鞆の方言、當つたり
仿伯文庫のものありしこと、為記を以
て、いつかの支那へ戻り、亦日本に巡
回し未だ明政を出版式在也

一 金石志

一冊

市河寛高撰あすの日本金石志也好字本
糸巾のものところあるもの

一 水鏡集

言

三冊

一 月可録

言

一冊

此二書共々中井履軒の文集と共々
未刊本より訪とす

前掲奮心忠行雜錄の巻末にたゞ新入の切
抜も収む

○奮心雜錄 (釋)松雲撰 (法孫)南鶴輯
本書は、壬辰の役に松雲大師の國難に盡し
たる類未を、實錄によりて簡明の記したる
もの也。松雲は朝鮮密洲の僧なれども、智
謀膽略に富み、而も功名に淡たる人物なり
き。身を山林より起し、敵を討ち朝旨を奉
じて清正の陣に入り、後使者として日本に
來り、清正の問に答へて「わが國、實なし將
軍の首をうる之實なり」として、清正の膽を寒
からしめ。論功行實の日深く山中に隠れて
出でさうきといふ。しかに高橋の豪傑たり
しかを知るに足らむ。一卷は、舒繡錄にて
流中入清正營中「探情記」の文尤も興味
あり。歴史の參考にはよきもの、二卷
は四溪堂大師集也。即、松雲の詩文集を
び。文は樸朴にして山林の風ありといへ
ども、自から規律あり。三卷は「表忠祠題詠」
と題す。こは松雲の祭られたる密洲の祠に
韓人の詠みたる追悼の詩文をのせたり。松
雲いかにかの忠烈、重峰、健齋等と義兵を擧
げ、國難の危を救ひ、社稷を泰山の安にか
きたるかの偉績を究むるには、屈竟の材料
たり。本書は續史籍集覽に納む。ついで見
るべし。

大隈老侯が薨せられて既に五尾霜を重ねる。老侯が薨せられてからは如何にも天地寂寞を感じる、之はひとり老侯の薫陶を受けた吾々許りではない、満天下あらゆる方面が寂寞を感じておるのだ。只こゝに吾々を慰めて寂寞をまきはさせたものがあつた。それは何かと言へば、吾々が侯の傳記の編纂に着手してこゝに五ヶ年を費した事である。此五ヶ年の間は、侯が佐賀に誕生されてから大正の侯の歿せられる迄の八十五年と言ふ長い間の事を、毎日調べたり書いたり語つたりしておつたので、殆ど毎日の様に侯にお目にかゝつてゐた。侯の極めて幼少の時にもお目にかゝり、侯の書生時代にもお目にかゝり、身を起して維新政府に仕へられて非常な勤をされた侯にもお目にかゝり、明治大正に亘り吾々が始めて侯に近付き日々侯の傍に居る時代の事にも、毎日一觸てゐた、だから何人も天地の寂寞を感じる中に吾々だけが、餘り寂寞を感じ

大隈侯八十五年史の發刊に際して

市島名譽理事談

じなかつたと言ふやうな趣がある。老侯の傳記を編纂しやうと發起されたのは、老侯が薨去されて五十日目に五十日祭を施行された時である。其時多數の侯の親近の人々が集り、今は故人となられた元宮内大臣で老侯と郷里を同うする子爵波多野敬直君を會長に推し、吾々が老侯の傳記を編纂するに當る事になつて、こゝに編纂事業が開せられたのである。此編纂は實は頗る大事業で、先づ材料の蒐集から着手して、筆をつけ始めたのは老侯の薨後約五ヶ月許りの後であつた。全體人の傳記を編纂するに就ては、其人が歿してから直ちに着手する方が其の理屈もあるけれど、又其のいとす理屈もある。其人を追慕する念慮の盛な時には自然人の氣込もよい譯であるから早速に始める方が其のいとす言へる。簡単な生活をした人の傳記の如きは、其人の亡くなつた時から直ちに作るのには、寧ろ時機を得てゐるであらう、然し老侯の如く齡を保

つ事八十五年の長きに亘り、時代を言ふと幕末から長い明治に亘り、更に大正に迄亘つており、然も其人の事績が非常に多般で複雑を極めておる。斯様の人の傳記を直ちに編纂しやうと言ふ事は、或意味では無謀の様でもある。何しる材料がそう一時に集る筈のものでなく、又殆ど三代の歴史に亘つておる複雑な事を研究するにも少なからぬ日子を要するから、其人の墓木の拱するのを俟つて徐るに書くといふのが、寧ろ當を得ておる。然し乍らこゝに遷延を許さない事情があつた。それは老侯は八十五の高齡を重ねられた人であるが故に、老侯の同僚或は友人、それ等の人々の多くは既に多く歿しておるので、今存してゐる先輩は幾人もない。其僅かに残つてゐる人も皆高齡の人であるから、何うしても生きたる材料を得るには、之等の人によらねばならず、又之等の人の校閲を経る必要もある所から編纂を急にすることが已むを得なかつた。老侯に就ての材料は天下に満ちておると言つても宜しい、新聞に書かれておるだけでも豊富なものである。誰も知る如く、老侯の晩年の如きは、全國の新聞は老侯の言論や其他の記事で滿されてゐた様なものである。老侯歿して天地寂寞を感じると私の

○十二月五日早稲田宮内省で載る左の二ツの電報の
れに余の口後を承り行々々々もつた也、他方の未だあるも
こゝにぬのあつて

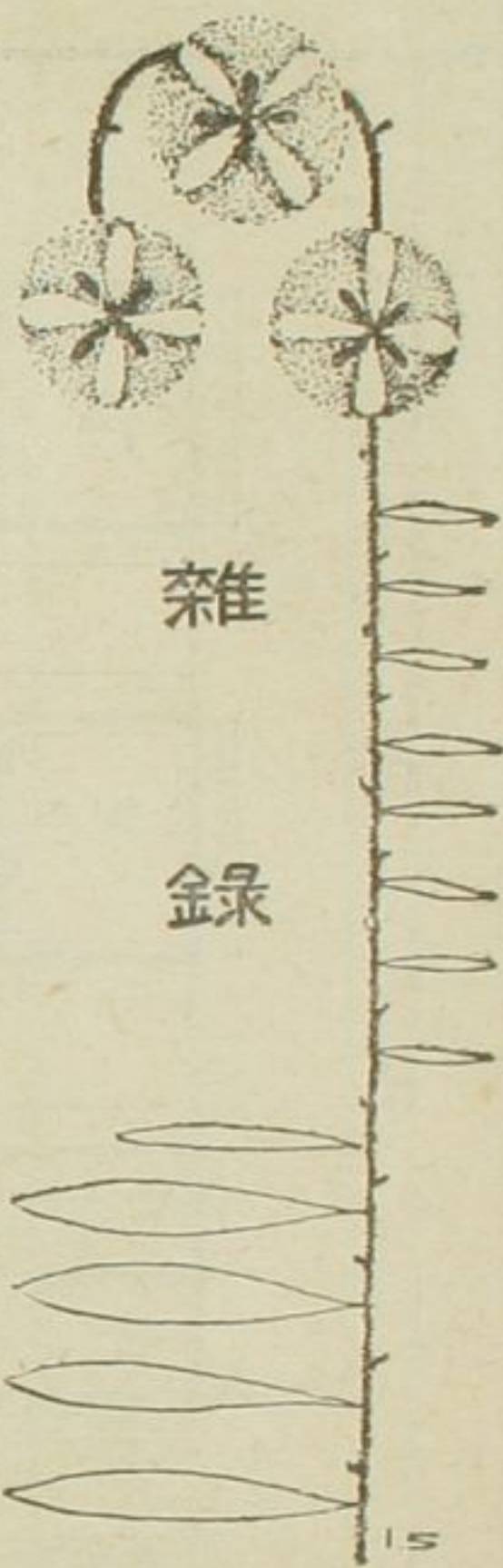
として歴史が出て来なければならぬ、とすると老侯の傳よりも一般の歴史になり易い傾きがある、然し老侯の傳である以上は其體を失はず、飽迄老侯がどこにも現れておなければならぬ、こゝが實地に臨んで面倒で、どこにも老侯が躍々として現る、と言ふ様にするのは、筆者の頗る難しとする所であるが、幸に此點に於ても遺憾なきを得た。普通一個人の傳は餘り興味がなく、十枚も讀過すると、早や倦念を來すのが通例である。それは畢竟書方が乾燥であるからの事だ。高須氏に私の感心したのは、これ程の大きな傳記を幾百頁も興味を以て殆ど時の移るを知らざらしむるやうに一氣に讀過せしめる點にある。尙ほ今一つ感服してゐることは材料がよく咀嚼されて散漫でなくどの章でもナルガナイツしてよく纏つてゐることである。

私と中野禮四郎氏が監修と云ふ様な位置にあつて最善を盡したつもりである。然し乍ら何と言ふても、大隈侯の昵近の者が集つて編纂をし、校閲をしたものであるから、之を第三者から見たらば、多少公平を失しておるとか又、觀察が異るとか、材料が足らないとか言ふ様な缺點は決してないと言は居らん、又吾々とても之を完璧とは思つて居らん、恐らく他日老侯の傳記を何人が又書くこともあるであらうが、少なくとも此の傳は第一稿と見る可きもので、從來あるもの内では最も完備に近いものであると言ひ得るであらうと密かに信する。猶此傳記に附帶して、老侯を長く記念する意味を以て、侯の家に藏する貴重の文書を複製して大なる一冊のアルバムを出版した。それには皇室より老侯に賜つた御宸翰を始めとして、親王家の直筆の手紙、維新の諸豪傑から寄せた重大なる國事に關する手紙が多く收められてゐる。此内には傳記の材料となつたものも少なからずあるが、明治史の材料となるべきものも又少なくない。どの一通と雖も嘗て世間に現はれたものはなく如何にも貴重のものである。要するに此傳記は、大隈侯八十五年史と標題がついてゐる如く、幕末—明治から近年にかけ

てのあらゆる方面の歴史とも云ひ得る、従つてひとり政治に興味ある人のみでなく、何の方面の人でも之を讀むの必要がある。此長い間の歴史が老侯を中心として三千頁近くに纏つたと言ふ事は、讀者にとつては眞に都合のよい事であるので、これを座右に置けば幕末からの歴史がわかるのみならず、その經過推移に就て、教訓を受けることが出来るのだ。私共はこれが故に此傳記の廣く世の中に流布せん事を希望する者である。私自身は老侯の左右にあり、或は旅行に隨從し、其蕭陶を享けた事が四十年以上に及び、そして老侯薨去の時は自ら葬儀を幹して、所謂國民葬を行ふの光榮を負ふたが、猶其に次いで光輝ある侯の傳記の編纂に與り無事完成を見るに至つた事を深く光榮として喜ぶものである。

校友圖書館入館手續

圖書館入館御望の方は圖書館交付の圖書閱覽票請求書に(捺印の上)大學教務課又は學部の卒業證明を受け圖書館にて閱覽券をお引換のこと。
大隈會館入館券は校友會の會員證明があれば會館より一人一枚御渡します。



老侯の一生を偲ぶ

遺品展覽會

五ヶ年の日子を費した大隈侯の傳記も愈々完成して本月中旬迄には全部刊行の運びに至つたので、それを記念するがために、十一月十三日から三日間傳記の資料並に故侯の遺品展覽會が大隈會館に於て開催せられた。此會が引起した人氣は非常なもので毎日四千近くの人が入り、結局一萬以上の入場者があつた。之を猶數日開場して居つたならば五萬乃至十萬人の入場者を見たであらふ。

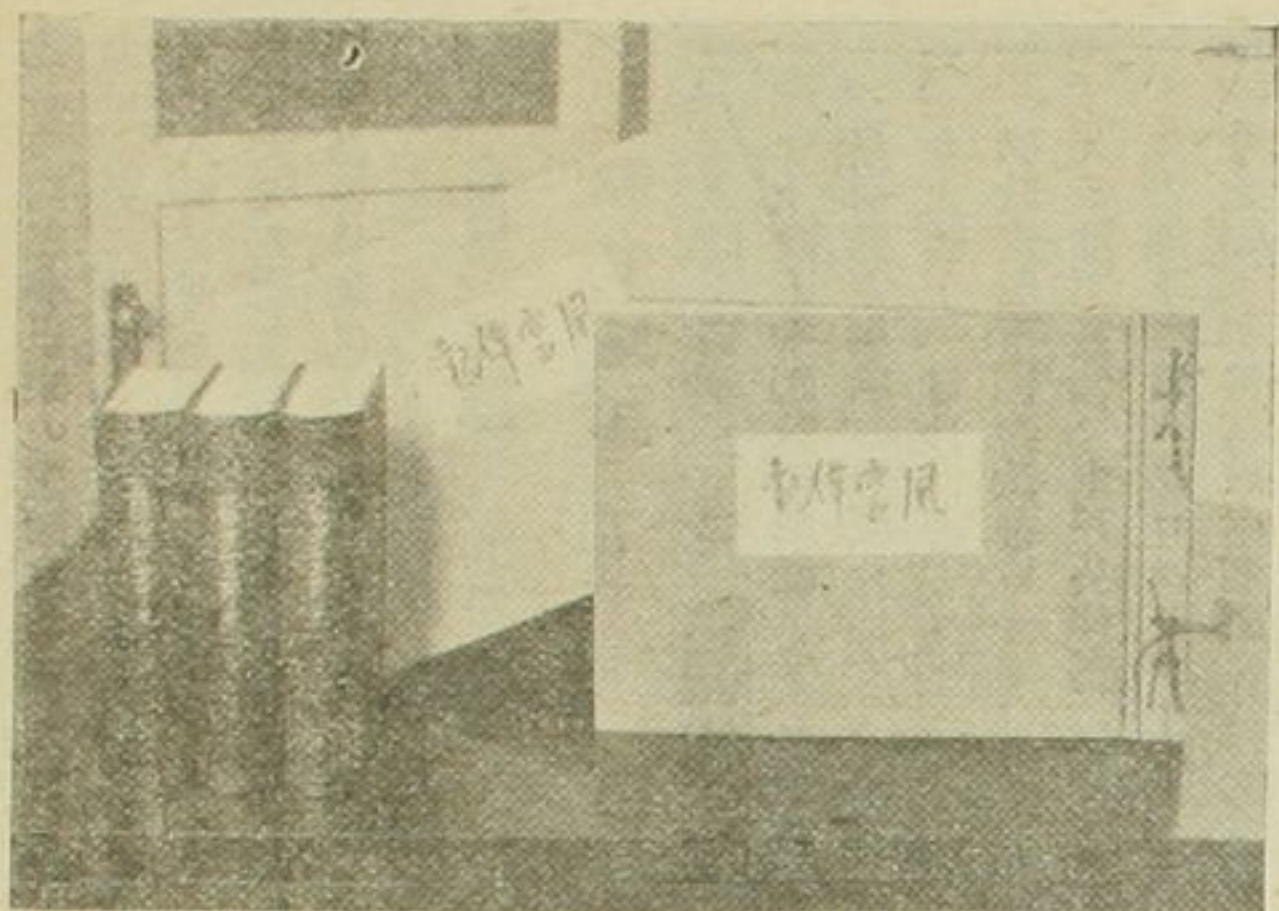
先づ第一室に當てられたる八號には、在りし日の故侯を思はせる數々の寫眞、遺愛品、扱ては日比谷の國民葬の盛觀を偲ばせる名刺箱等が陳列されてある。第二室は故侯の書齋で此處には主として傳記の草稿を

始めの資料が列べられ編纂上の苦心を物語つてゐる。第三室は夫人應接室、此室は全部御下賜品で、老侯に對する皇室の厚き聖恩の程を拜察し得る品々が展覽に供されてゐる。第四室は大書院、こゝには侯の勳功を語る勳章を始め、侯の經歷に關する資料の多くが陳列されてゐる。中に興味を感じるのは明治初年朝廷から受けられた辭令書で、十數枚のそれ等は凡て其當時の侯の經歷を語るもので、御名御璽のある頗る尊いものである。辭令書の中にも親任狀と言ふが如き國際關係の文書もあり、又侯の鍋島藩に居られた時の辭令書等は立身の經歷を物語つてゐる。次には老侯に宛てた各方面からの書翰であるが、場内に光つたものゝ一つであらふ。此の書翰の大部分は、明治十四五年迄の元勳の存命中のもので、陳列されてゐる多くの手紙は、十中八九迄國

事に重大なる關係を持ち、活きた明治大正の歴史であつて、靜かに之を讀んで行けば實に無量の興味の湧くものであるが、何分人込みの中であるから、有識の士でなければ之を味ふ事の出来なかつたのは甚だ遺憾であつた。第五室は居間此所は老侯が平常夫人と共に居られた室で、常でも老侯在世の時と同じに座布團、烟草盆の如きも其儘になつてゐる。此度はそこに多くの服裝を飾付けた。其服裝は參議時代の烏帽子、直垂の如き古き制度の禮服を始め、御大禮に用ひられた衣冠束帶、早稻田大學の赤きカウ、前年遭難當時の爆彈に破れた服、靴並に爆彈の破片等を置かれ、何人にも追憶悽愴の感を偲ばしめたであらう。

最後の寢室に於ては、「大隈侯の一日」と「老侯國民葬」の活動寫眞を映寫し、加ふるに老侯が總選舉の時に「憲政に於ける輿論の勢力」の題下に蓄音器に吹込まれたレコードに依つて、親しく老侯の聲を接する事を得、以上の遺物と相俟つて老侯を偲ばしむるに遺憾がなかつた。

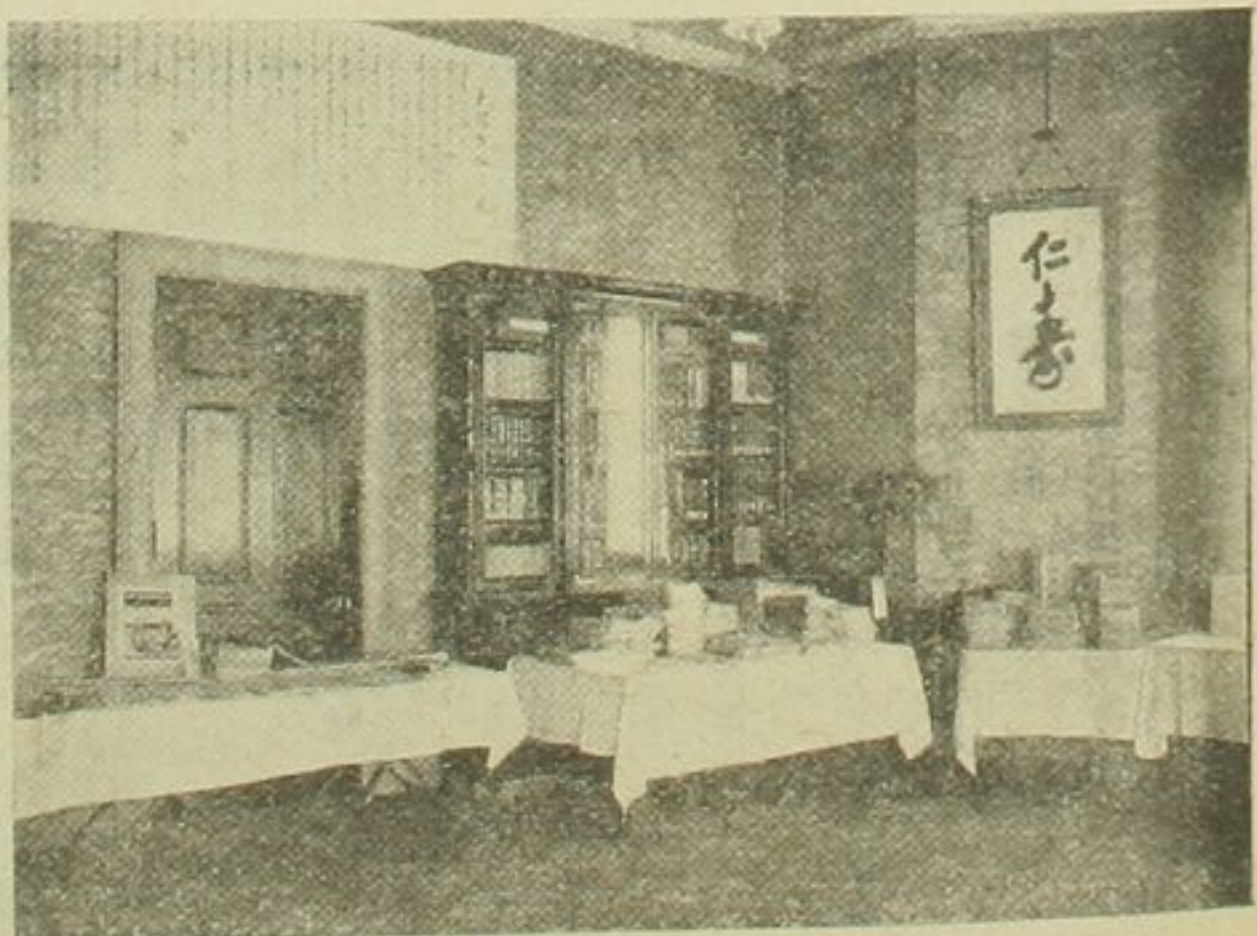
此度の展覽會の會場大隈會館は既に老侯の舊宅、即ち老侯が起臥された所で置物迄が老侯在世の當時と同じ其儘にされてあり、此處に來るものは直ちに老侯の存命中



の事を聯想させる、其處を會場として、老侯の家に秘藏されてゐる物を陳列したのであるから、之れ位適當な陳列場所があらふ筈がない、で此催しが非常な人氣を呼び、大なる感興を引起した事は、會場に其所を得たと言ふ事に原因するであらふ。然し之は單に會場許りの意味では勿論ない、此陳列裝幀なれる大隈侯八十五年史と風雲錄

列と言ふものが如何にも思ひ切つたもので、老侯の家に深く秘められ、昵近者と雖も見る事を得なかつた物や、陛下の御宸翰の類の如き、多くの場合陳列會等には恐れ多い意味を以て妄りに拜觀の出来ない物等が少しも秘すると言ふ事なく開放的に、大膽に衆庶の展覽會に供されたと言ふ事は、既往に於て一寸類例のない事である。勿論御宸翰其他の御下賜品等に對しては特に宮内省の許可を得て、特別の室に陳列して、敬意を拂ひ拜觀を許した譯ではあるが、此の展覽會は實に故侯を想起せしむるに十分なる物がある。即此の如く何物も秘さないと言ふ所に故大隈侯の特色があるの、老侯の薨去後に於ても大隈侯の特色が發揮されたもので、此の大膽なる開放的な陳列が、隨に非常な人氣を博したに違ひないと思ふ、老侯は一體書畫骨董に興味を持たれなかつた人である。然し今度の陳列に當つて、種々出所に依つて見るのに仲々優れた物が多く出てゐた。其れは多く老侯の記念に關係ある物で、單に價の高い骨董書畫として珍重する性質の物でなく、老侯の家に取つて永く寶とならなければならぬ、因縁を持つ物が多かつた。

普通大きな家筋の陳列には、之は故人が



老侯遺品展覽會(第二室)

何萬圓かけた名幅名器であるとか言ふのが、多くの場合であるが、此の陳列會には斯様なものはなく、どの品物でも歴史に非常に關係を持つもの許りであつた、其處に此の陳列會の意義があつた様に思ふ。人は、展覽會の入場者が會場から溢られて支那から門外にまで、連がつてゐる盛況を見て、日

比谷の國民葬以來の盛觀であると噂し合つたが、兎に角此の三日間に渉る展覽會は非常な人氣を博し、老侯を追憶せしむる點に於て大なる功をなしたものであつた。因に展覽品の目錄は左の通りである。

目錄

御下賜品

- 一、今上陛下宸筆 二、内正其心外修其行 菅原道真御繪花圖
- 一、今上陛下御製詠老翁歌
- 一、皇后陛下御歌 色紙
- 一、今上陛下 御沙汰書
- 一、攝政宮殿下御沙汰書
- 一、先帝陛下宸翰 木戸公拜寫
- 一、先帝陛下御料 フロッグコート
- 一、今上陛下御料御紋附羽織
- 一、先帝陛下御下賜箱根細工木製酒盃
- 一、照憲皇太后陛下御短冊 岩倉公書簡 女房消息二添
- 一、先帝御手製柑皮煙草入
- 一、今上陛下御賜鳩杖
- 一、御紋章附白茶錦卓子掛 酒後全快 參内拜領
- 一、侯爵病中拜領御紋章入牛乳硝子瓶
- 一、大勳位頸飾章並に勅記
- 一、大勳位菊花大授章
- 一、紫組掛緒

辭令

- 一、親任狀
- 一、民部大輔
- 一、大藏大輔
- 一、内閣總理大臣兼外務大臣辭令 明治三十一年
- 一、同 兼任内務大臣 大正三年
- 一、宮中杖差許
- 一、華族被列
- 一、外務大臣辭令 明治三十一年
- 一、徵士參與職外國事務局判事橫濱在勤 被仰付辭令同別紙 三月十九日付
- 一、各國條約改正御用掛 辛未三月
- 一、奧羽御巡幸供奉 明治九年
- 一、外國官副判事
- 一、任參議
- 一、從四位下
- 一、橫濱裁判所所在勤被仰付
- 一、外國官判事
- 一、鐵道製作ニテ英國ヨリ金銀借入 委任狀 明治二十二年十一月
- 一、大藏大輔辭令 明治四年
- 一、臺灣蕃地事務局局長
- 一、參與職辭令
- 一、造幣寮創建之功勞賞狀 大政官
- 一、御巡幸辭令 明治十四年
- 一、鐵道創設成功賞狀
- 一、准國老仰付書 舊曆時代

衣服類

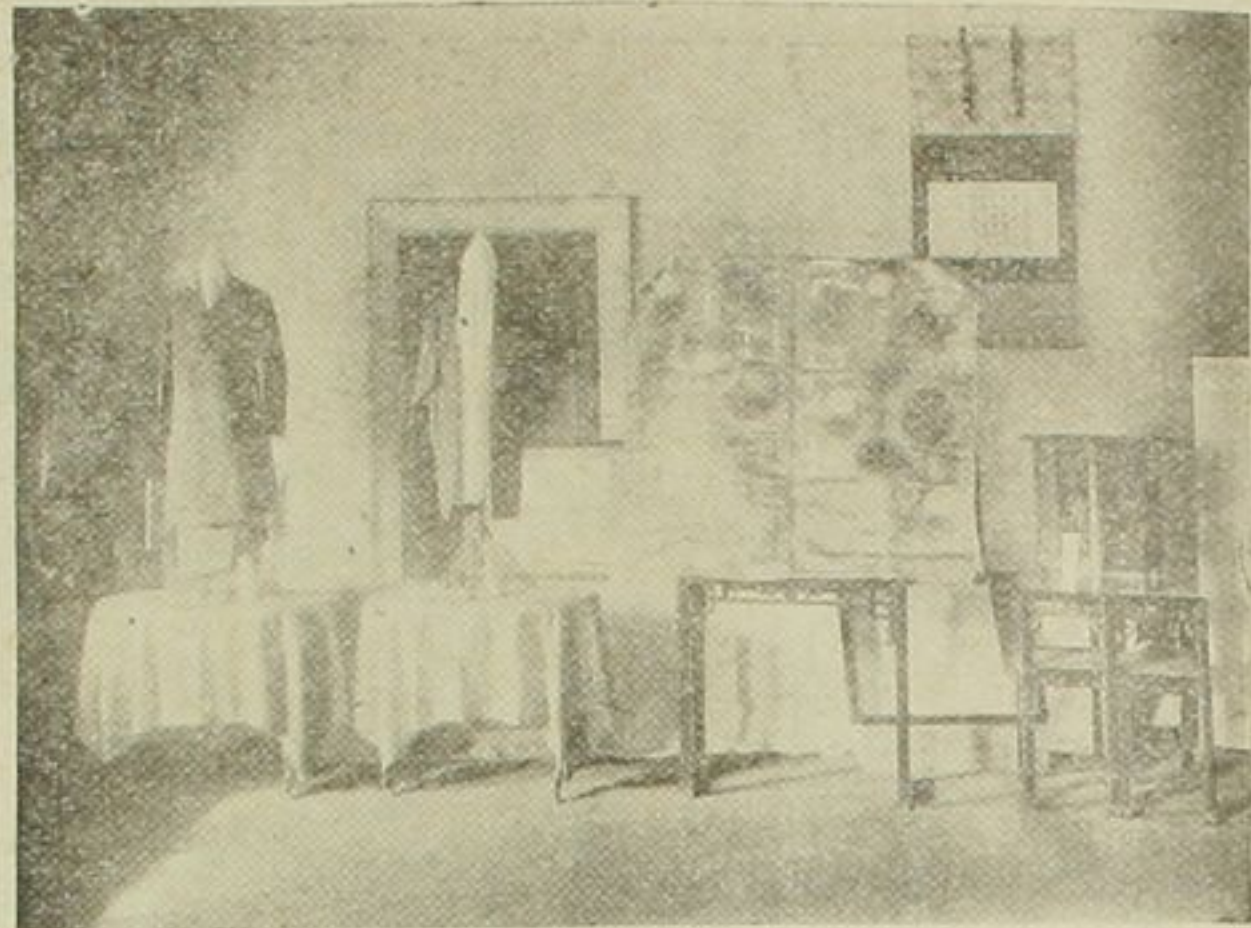
- 一、衣冠束帶
- 一、御禮當時の服其他
- 一、大禮服
- 一、烏帽子直垂 直衣
- 一、早大總長ガウン
- 一、夫人洋服
- 一、夫人袴袴
- 一、夫人紋服

肖像

- 一、侯爵肖像 (油繪)
- 一、同 肖像 (同)
- 一、老侯夫人
- 一、侯爵母堂並ニ夫妻油繪 (母堂未記)
- 一、侯爵肖像
- 一、同木炭畫

家記

- 一、墓誌拓本、侯爵並に夫人
- 一、遭難當時病床日誌
- 一、大正六年病床日誌
- 一、大正十年十一年病床日誌
- 一、閑叟公臨時御祭典祭文章案
- 一、建白書
- 一、手柬人名錄
- 一、大隈家尺牘目錄



—老侯遺品展覽會(第三室)—

- 一、八十賀ニ使用セシ天盃並跳子
- 一、御即位當時ノ侯爵萬歳ノ玩具小像
- 一、夫人手繡皿敷
- 一、夫人手製鑲裂地 大一、小二
- 一、夫人手製絹刺及編物
- 一、大久保公主産ノ青玉鉢盃
- 一、八角机

事に重大なる關係を持ち、活きた明治大正

- 一、民部大輔御大刀料下賜狀
- 一、臺灣事件功勞賞狀
- 一、征討費經理事務局長官

勳章 (外國)

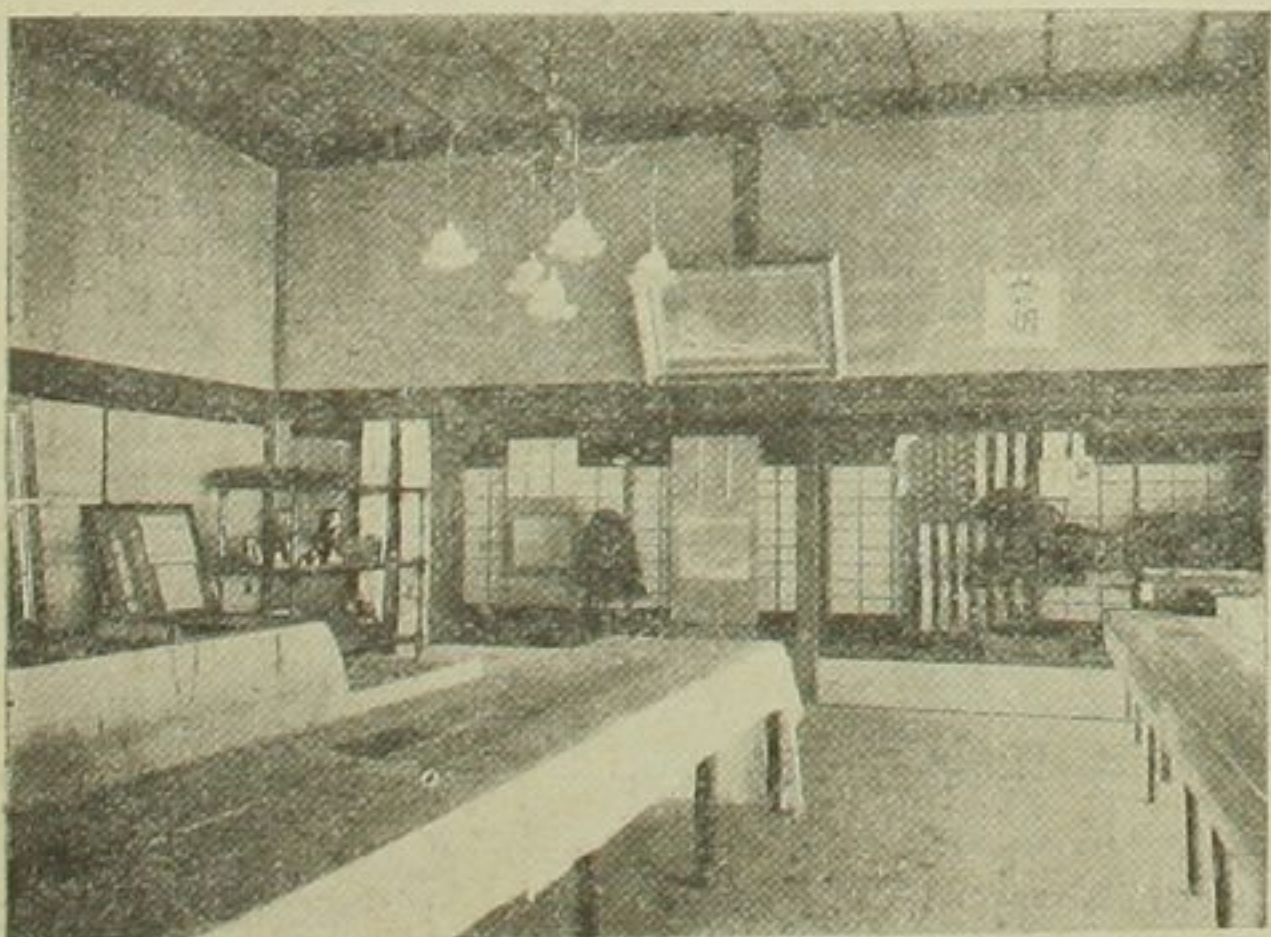
- 一、露西亞勳章 アレキサンデル、ネブスキー
- 一、佛蘭西勳章 グラン・クロア、ド・ロドル、ナシ
- 一、白耳義勳章 ヨナル・ドラ、レチオン・ド・ヌール
- 一、伊太利勳章 レヲポール第一等勳章
- 一、獨逸勳章 赤鷲勳章
- 一、佛人カアン寄贈銀牌

遺愛品

- 一、藕絲曼陀羅
- 一、天滿宮木像 故侯元服ノ際床ニ挿ミシ 梅ノ木ニテ刻ミタルモノ
- 一、太刀
- 一、刀 架
- 一、刀 架
- 一、湯 呑 有橋川宮殿下ヨリ拜領
- 一、御手許用小箱
- 一、三聖像 容堂侯ヨリ贈ラレタルモノ
- 一、印 侯爵氏名印
- 一、碁盤 碁石 本因坊繁元ノ銘アリ
- 一、夫人手製佐賀錦煙草入
- 一、夫人遺愛ノ小品

- 一、改進黨被告事件書類
- 一、雄子橋邸賣渡約定書
- 一、葬儀誌
- 一、早稻田邸之關日誌
- 一、園遊會招待人名簿
- 一、肥前佐賀ヨリ東京迄二百九拾里旅費
- 一、客膳統計表

—老侯遺品展覽會(第四室)—



記念書畫

- 一、畫 帳 早稻田邸圖
- 一、畫 帳 母堂米書記念
- 一、葡萄の圖 最初歸郷記念錦島直彬公ヨリ
- 一、量松圖 支那校友ヨリ
- 一、四庫全書目錄 大正十年徐麗鏡ヨリ
- 一、即位大典壽詞 應ラレシモノ
- 一、肅親王手書扇子
- 一、短冊 肅親王手書扇子
- 一、建子刀自和歌懷紙幅
- 一、夫人詠坤短冊及日記
- 一、同 曼陀羅の歌
- 一、侯爵最後日光參内の際の日記 豐子手記
- 一、康有爲祭文書幅 書幅
- 一、高崎正風國民讀本の歌
- 一、松平慈貞院和歌
- 一、川崎千虎筆浮隆之圖 明治二十九年屋敷記念
- 一、菊の寫眞帳 卷物 玉田筆
- 一、菊花壇の圖 卷物 玉田筆
- 一、仁壽額 徐麗鏡贈ラル
- 一、伊藤公土產洋畫額 明治初年
- 一、母堂米書賀筵席畫 小編

有栖川熾仁親王 北白川親王 威仁親王
 伊達宗城 山縣公 大久保公

- 岩倉公 松方公 伊藤公
- 大西郷三條公 井上公
- 澤宜嘉木戸公 副島伯
- 小松帶刀 黒田清隆 江藤新平
- 福澤諭吉 大村益次郎 板垣退助
- 後藤象次郎 黄澤眞臣 肅親王
- 梁啓超 盛宜懷 袁世凱
- ハウス書簡

傳記 草稿
 大隈侯著述及雜誌
 特殊資料
 傳記參考書
 寫眞

- 一、急須 侯爵蒐集物
- 一、古瓢 附杖二本
- 一、國府津別荘庭焼
- 一、野球ボール 始式式使用
- 一、鋼鐵球
- 一、爆彈破片 遺物ノ際
- 一、臨終醫具製地
- 一、印度植物種子
- 一、玩具田舎家 侯爵夫妻の註文にて
中見世武蔵屋作る
- 一、義足
- 一、侯爵庭園運動車

- 一、侯爵演説レコード
- 一、臺所の圖 食堂樂の巻
- 一、御巡幸供奉信
- 一、參議兼大藏卿大隈重信名刺
- 一、宮島大杓子
- 一、ペンギン鳥
- 一、早稻田邸附近鳥瞰圖
- 一、南極探險寫眞
- 一、米國ヨリ寄贈ノ米國旗
- 一、名刺箱
- 一、活動映畫 大隈侯一日 國民葬の光景

早稻田温交會例規大會

以上

學園唯一の交際機關として、本大學教職員によつて組織せられ、三百五十名に近き會員を包容する早稻田温交會は、年一回の例規大會を去る十一月廿一日(日曜)午後四時から大隈會館内學生ホールに開催した。此日天氣晴朗なるも朔風枯葉を捲いて吹き荒び、かなり冷氣を感じる日であつたが、定刻に至るや會員諸彦續々と詰め掛け、約三百人の出席者を見る盛況を呈した。會は先づ藤江又喜の狂言「寢音曲」と「蝸牛」から初まり、滿場腹を抱へて笑ひ興じた後に、竹本足喜美の義太夫が演ぜられた。綺麗たる佳人、丹花の唇より洩れ出づる

此の地にて微天を決くしてゐらるゝか七紙の奴、此の
の談話、左の如くしある

文化八年、嵐次辛未夏六月、京師書林、
善以之換我所有之新活二王帳矣

岱海畫行中

岱海画此年京師に游んしか書林、林善し余未
知らず、此の如くしあるべきあり

此者信託の如くし進居し来り、いろく、物を高し
来り、余の鑑定を治ふ、保安の年号あり、法隆寺
一切経の内一卷（法隆寺の刻印あり）右も見ふべ
し、古字本類、從四史一冊（別錄綴）亦珍也、云
華并、四維山の短冊、此の正品と推す、又忙中

の寫目、細記し得る也、亦ふる、任かても、短冊三枚、
高しと推す、

天武をうし、示るゝ此の物の内、若一二紙、うし、
ある、故原宏、うしが、古紙と推す、人の、次、斯道、の、成、
柳北と云ふ、うし、古、荷、の、経、後、を、うし、
集めて、一巻一冊、あり、又、忙中、一、日、後、名、の、好、あり、
と、うし、と、推、す、柳北の原に、教、あり、と、云、は、詳、か、ら、
り、又、の、流、廿、五、年、以後、の、古、紙、家、の、者、皆、一、枚、を、示、
す、こゝ、余、の、初、と、して、見る、所、也、又、大、関、東、の、兵、谷、川、
西、川、為、舟、忠、不、中、車、の、関、跡、に、原、宏、子、と、あり、余、
一、説、一、説、を、見、る、偶、々、新、紙、を、見、し、と、云、ふ、
の、を、考、え、余、其、を、あ、鳥、記、の、傳、一、枚、と、古、紙、

番付と撮影せしむ。余のこんに関する海流
を業録せしめ、新年の錦の埋の巻とるを
あ
新江流左の才言相来客多く来る中、高橋
義彦あり、三山堂印講を携へ来り、亦、此講
七と高井家の珠花の係り、花六新江流に物来
り、印人旭木の才、油し後高井に移り、今も
高橋の手まゆ、余の和花と同日しからず、余
所為をみる、序故あり、女婿某の増補の印
を収めて、蓋し才二版あり、此高橋を初版と見
しきものまん、序改り、其数を焚く、
んとも甚任をこ

新江流の遠に難波海士あり、余面談あり、此人治世
信を多く所為すと、いふあり、人新江流の妓の錦信
七枚を借り多く来り、亦、年錦を録けしもの、
十二年頃のよか、四角草あり、亦、人形町具足屋
出收り、新江流の名妓七人を各紙に書き、
一刀を佩り、背に尺八を揮り、錦信今と録り、
今、妓所居の尾錦あり、風幸、新江流の物故
あり、宮まゝ、さう、宮まゝ、清原やま、つき、
の君も、余か、印時、知、所、名、錦、錦、余、の
初め、て、見、る、所、あり、
新江流、此の故に、献、支、特、に、賞、状、に、入、る、旨、し、と、
大、る、冊、子、を、お、り、来、り、何、い、と、見、る、に、
何、い、と、見、る、に、

か新のこ着、南庭二三日の酒梅と併飲し、その
いづれも中、こを海をここの故人に拙書と書
め、ここのこと、之れに應ずる、い勢ひ早起客
の訪ひ来、まか、其を果さ、このを待す、今次
七十枚紙漫出、して其、

今次季世光同行、余、代、つ、所人の家を訪、
余の号を省きたる、特に、向ふの生家を、主、
左、訪、し、め、し、い、の、い、無、き、事、
訪、河、に、之、方、の、故、り、
大正十五年十二月十九日記

○此、東、の、あ、り、の、十、一、日、印刷、合、社、に、到、り、社、長、に、賞、典、を、
行、せ、余、社、長、と、し、例、を、多、く、刻、示、演、説、を、あ、げ、
大正十五年十二月十九日記

を、御、大、切、の、指、合、特、に、承、度、の、言、も、あ、り、
賜、こ、あ、る、へ、き、を、海、を、傍、ら、今、年、の、ま、
、及、び、三、倍、大、の、合、社、に、比、し、
賞、典、を、社、長、に、承、度、の、言、も、あ、り、
行、し、進、て、賞、典、の、言、も、あ、り、
さ、も、也

○此、日、の、十、一、日、印刷、合、社、に、到、り、社、長、に、賞、典、を、
行、せ、余、社、長、と、し、例、を、多、く、刻、示、演、説、を、あ、げ、
大正十五年十二月十九日記

慮憂も達子の馬竹

[見所り通橋本日]て見を外號の態重御



石垣築造の作業中

けさ市ヶ谷驛の椿事

十八日午前八時四十分頃目下橋内
拡張工事の市ヶ谷驛下りホーム
後方の石垣築造基礎作業箇所が突
然高さ五間幅五間約五十坪の土砂
崩れ発生し、作業員も巻き込まれた

に、今日は取り分け目立つて多い
午前七時卅二分、八時十分、九時廿
分ともに東京からの汽車は皆栗山
への人々、十時卅三分、十一時卅三
分には大井、立花兩陸軍大將以
下前線長連、名和海軍大將、貴族
院の松平頼壽伯、中川良長男それ
それにあわたり、目撃者は多し

到着するので購待タクシーの争奪で
自動車は直ぐ消えてなくなる、井
上孝誠代議士などはかつてこの地
に知事だった關係から事情を知つ
てゐるので「やーと走り」とシル
クハットを抱へて外套の襟を立て
る、イカつい憲兵、こはい願の巡査
して

號六十六千八万一第

一般の御容體

御良好に向はせられず

十八日宮内省發表

第一回

午前八時四十分

| | | | | | | |
|----------|-----|------|-----|-----|-----|-----|
| 十七日午後十二時 | 御體溫 | 三八、二 | 御脈搏 | 一三四 | 御呼吸 | 二二八 |
| 十八日午前二時 | | 三八、五 | | 一二八 | 二二八 | |
| 午前四時 | | 三八、六 | | 一二八 | 二二七 | |
| 午前六時 | | 三八、八 | | 一二四 | 二二七 | |

平沼驛長と同様に御用邸に入り
間もなく再び御用邸に召かけつ
く八時廿二分、田文相を初め井上
次いで兩分財部、宇垣兩
御局長官、松村警保局長等
々參殿し御用邸を
退殿し、た、安達



武者小路實篤著
氣まぐれ日記
未發表の日記出づ
定價壹圓五拾錢・送料拾錢
東京牛込矢來町新潮社

慮憂も達子の馬竹

[見所り通橋本日]て見を外號の態重御



雪風も、ものかは 大内山、伺候者の群

慌しくも涙ぐまじき

参入者受附所の光景

深き憂色のうちにあけた十八日の大内山は夜の未だ明け渡らざるに御容儀を御案じ申し上げ参入するものひきまきらず坂下門より東車寄にかけて自動車の往來おるが如く地方からはる／＼上京した代表者が東京驛より四ツ谷の

自動車 で駆けつける

光景である。宮内省立派に上つた参入者受附所には御容儀の人々が赤誠のほどを次ぎから次ぎへ書き連ねてゆくおすべらかにしつるのも、威儀を正した下田歌子女史が本野公子未亡人とともに表立に現れ「愛國婦人會代表三位勲一等下田歌子」と書くはる／＼上京した

奈良縣 吉野郡十津川村十津川文武館代表や神戸學院同女學院長米人グレース・エッキストー氏が午前九時半頃候して御見舞の名簿に神戸學院長とだけ書いて退出し女學院の名を忘れて東京驛から大急ぎで引返してまた書き足してゆく清浦子爵夫人が「大日本婦人

「葉山發」曇つた顔、つめたい面、葉山御用邸さして来る人も、

なしたを捕まへに數名の皇宮警手が追ひまはす騒ぎもあつた

大官連 が全部葉山にうつつた留守を預かる宮内省は、江審査局長官を首魁として東八世内匠頭、杉内殿頭等が十七日夜、まんじりともせずに葉山よりの御容儀をお待ち申しそれを各官家に通知する百冊餘名の新聞記者は省内に詰めきり腹食をわすれ親道の任につき宮内省の足どりにも神慮をピリツと動かしてゐるのも赤誠の現れである深閑とつけ渡る大内山の午前二時三時官房庶務課の電話が數度か静けさをやぶつて「陛下の御容儀は……」と各方向よりのお伺ひで當直員を働ましてゐる

土砂崩壊し

人夫二名惨死

石垣築造の作業中
けさ市ヶ谷驛の椿事

十八日午前八時四十分頃目下椿内橋工事中の市ヶ谷驛下りホーム後方の石垣築造作業箇所が突然高さ五間幅五十呎の土砂崩壊し、作業中の人夫二名を土中に押しつぶした。死者は、市ヶ谷驛下りホームで作業中の人夫二名、土砂崩壊した箇所は、市ヶ谷驛下りホームの石垣築造作業箇所である。

ごつた返す

逗子驛の邊り

来る人も歸る人も
曇つた顔冷たい面

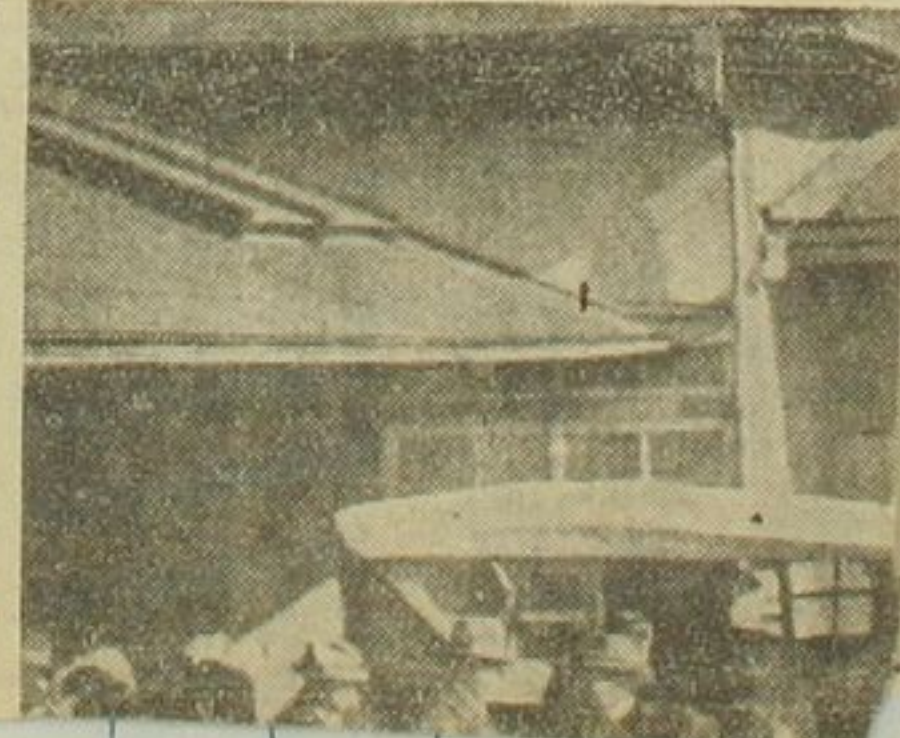
「葉山發」曇つた顔、つめたい面、葉山御用邸さして来る人も、

逗子驛

はごつた返し

金ピカに、禮装に、シルクハットに、今日取り分け目立つて多い午前七時卅二分、八時十分、九時十分ともに東京からの汽車は皆葉山への人々、十時卅二分、十一時卅三分には大井、立花兩陸軍大將以下前線長連、名和海軍大將、貴族院の松平重信、中川良長男それ

武者小路實篤著
氣まぐれ日記
未發表の日記出づ
定價壹圓五拾錢・送料拾錢
東京牛込矢來町 新潮社



到着するので購得タクシーの争奪で自動車は直ぐ消えてなくなる、井上孝成代議士などはかつてこの地に知事だった關係から事情を知つてゐるので「おや」と走り「シルクハットを掲げて外装の襟を立てるイカつい軍兵、こはい調の巡査

○山田海心二三の著書も流し書と云ふは、
卷の不出も、と云ふ主日出し等、と云ふは、
即の手日入等、と云ふ也、稀出後、
を致すといふ

一 麻式たわりの係はる

おま子の版、うろこ形を版
美濃紙大本、挿写多し
麻の巻葉、と似定のよあ也
三冊あるべき、の中巻欠也
吹了珍籍也

一 朱在志のぶずり 二冊

貞享四年九月改、好書軒心

一 朱在清合鑑 二冊

延寶九年改、丸屋深兵衛

一 朱在遠目鏡 二冊

臨原松梅の行初、
延寶九年正月改

右三行半紙、右と臨原の細見等
総七挿入し、あゝい、あゝい、
稀葉の

書

一 花山流きとせきあらし

二冊

無年本

延寶七年 大夫直之正を命

と巻末のあり上方の也えん七亦珠

也

以上

日藏映(国)者七海ノ獲ノ不或許ト云レ但此
南浦文集一部と得字を素云

十二行

南浦文集

三冊

慶安二曆壬子秋中旬

中野道伴

行

此者薩摩の僧南浦の著す所南浦の著す
云曰といふ桂庵の世のぬ也日抄南浦外
浦二生んたる如ある南浦といふ東福龍吟
庵の川流するらなる其軒を雲興と名し
或ハ懶字を云ともいふ
大徳傍の文集仲麻呂の関するもの多きを例
とするは此の集然らば多く文雅の多し
するもの多し満庵の記室として外四
前しる文籍七の如く北傍の日佐入等

藩士の島津義弘と豊公征韓の時
七身死したる関係上従て記述の先後に
涉らざるあり、種々考証の内幕を叙し
たる一文の如きもの頗る幼道の老成極とす
みざるにあり、要するに此者、史新とい
ふ意味あり、價値あることとす、未嘗と
すを収む、寛永某年、川人の編する本也
此者巻首二三枚破損あり、善本と得し
字と補ふこととす、総体重表打等
修補を價四十四 十一月廿三日記

一 義経記評判

十四冊

十二行

由比の評判と題する者一二冊とす、
義経記評判の古版や、稀に、此者元禄
十一年京押小路通麩屋町西に入町
金屋、安南市兵衛の刊行に依り
美濃紙大なる一冊、西あり、義経記
り巻首に、義経の童形の図を収む、

一 玉燭寶典

古逸

四冊

楊守敬の佚存書者や、このあり、
これ日本に西渡利の時楊の家蔵と校
合し、今も版木店に保存され、
一伊藤蘭端書詩加留多、
箱の記に云く、此牌子、明和年間、

牌子裏表紙表納地
 唐待女二句つと二枚
 二合書し各百枚あり
 一枚に細言を長巻
 書と若す
 △次書更
 製表月函
 横因着
 記其由云
 丁丑孟
 夏
 伊藤三洲
 書

一 破損三文字不明
 安永表紙表祖父蘭島所令
 書君捐館而傳在夫人氏之行後贈諸其室先
 谷口大り舊當子於蘭島獲之孫花日久

一 参考伴勢物語
 二冊

伴信友の丁寧うまくの書入とあり
 一冊書也

一 神記大全
 一冊

一 石印、
 一刻刃魚鳥の圖
 一冊

三書在り料記の色也料記大全紙
 紙を以て山徳四年江戸出版編載の色也
 一冊書也

石印、みり抄をりて定永教仲教と刻
 意を流くふに此者の特筆有るは此也
 魚鳥の圖、四條家の刻刀絶倫と評
 するもの也

一 高野大帥行状圖書
 五冊

繪巻物語を放りし書よの似し詞者あり
 片仮名文あり、刊年ありけりとも寛文
 頃のものと思ふ。

一 秘録十二月待帳
 年中行事と基と一冊
 春書と冬

同二泊あり、ち風去らば、睡臥す、詩は
凡欲あり、書、何人の書、多し、判、
七、ある、帖也

一 亀井法集記

内曆三年、京都田中文内の判、
三巻、合冊

大正十一年十二月廿四日購

○奥平長正と山川男爵の關係に就て、余が、
七、所、可、し、の、こと、の、とき、法、講、
二、男、爵、の、立、派、の、大、要、の、前、
幸、に、也、の、後、を、し、の、詩、
載、て、あ、る、の、切、板、の、こ、
月、廿、日、記



奥平謙輔先生

樞密顧問官 山川健次郎

三、亡國の二少年

元來、佐渡は絶海の孤島だが、金鑛の所在地で徳川幕府の直轄であつたので動もすれば、官軍に反抗するといふ氣運がうごいた爲、壬生總督は、參謀前原一誠君に相談した。

「佐渡を何とか鎮撫せねばならぬが、適當な人物は居らぬだらうか」
「それは、奥平が適任であります」
言下に、先生を推薦された。

此ういふ次第で、先生は、越後府權判事といふ肩書で赴任した。判事は、今日の行政官であるが、同時に兵馬の權を掌握してゐた。従つて、その威勢は當る可らず、佐渡一圓、先生の上陸によつて、忽ち平靜に歸した。

強をつゞけることが出来た。
その中に、妙な噂が傳つた。
「役宅に居る書生は、會津者ださうだが、大方、會津の殘黨であらう、謹慎所を脱走して來た者に相違ない、怪しからぬことである」

やがて、先生が佐渡から新潟へ出かけて來られた際、我々は、初めて先生に會つた。

此の風説は、ちよい／＼我々の耳に入つたので心配して居つたが、遂に先生の威望でも我々を島に止め置く事が出来なくなつた。

「すぐに佐渡へ來い」
さういふ話で、我々も、先生について、佐渡の土を踏んだ。河原田の金北山中腹の、佐渡奉行の役所兼役宅につくと、眞野灣をト目に見渡す、見晴しのいゝ長屋ト棟を我々の爲に提供された。

先生も、餘程心配された結果、我々を傍におくことはよろしくないと思つたのであらうか。
「新潟へゆくから一緒に來い」

「これが、足下達の居る所だ」
此の上もない優遇であつた。

先生は、當時、家族はなく、獨身であつた。衣類なども、木綿物の粗末なもので満足してゐた、俸祿は月俸三百兩であつた、其の頃の事であつたから、三百兩は今の二千圓以上に相當して居つたと思ふが、大抵部下や、細民の救助に用ゐてゐたらしい。

先生は、仙臺から來て居た麻田と云ふ儒者を一人、私共の爲めに、かゝり切りの教師として、つけて下さつた爲、十分に勉

であつたが、前年戦亂の際には、兵を募り北辰隊と云ふを編成して、官軍を援け、丁度其の頃は、北辰隊長兼佐渡民政廳の役人で、隊と共に佐渡に居つた。

我々は、内實は、何もかも承知してゐたので、唯々諾々、先生の云はれるまゝに、遠藤方へ引取つて、半年程遠藤の宅に居つた。すると、明治二年の八月頃

「一緒に東京へゆけ」

と云ふ先生の言葉があつたので、私も、又同行することにした。

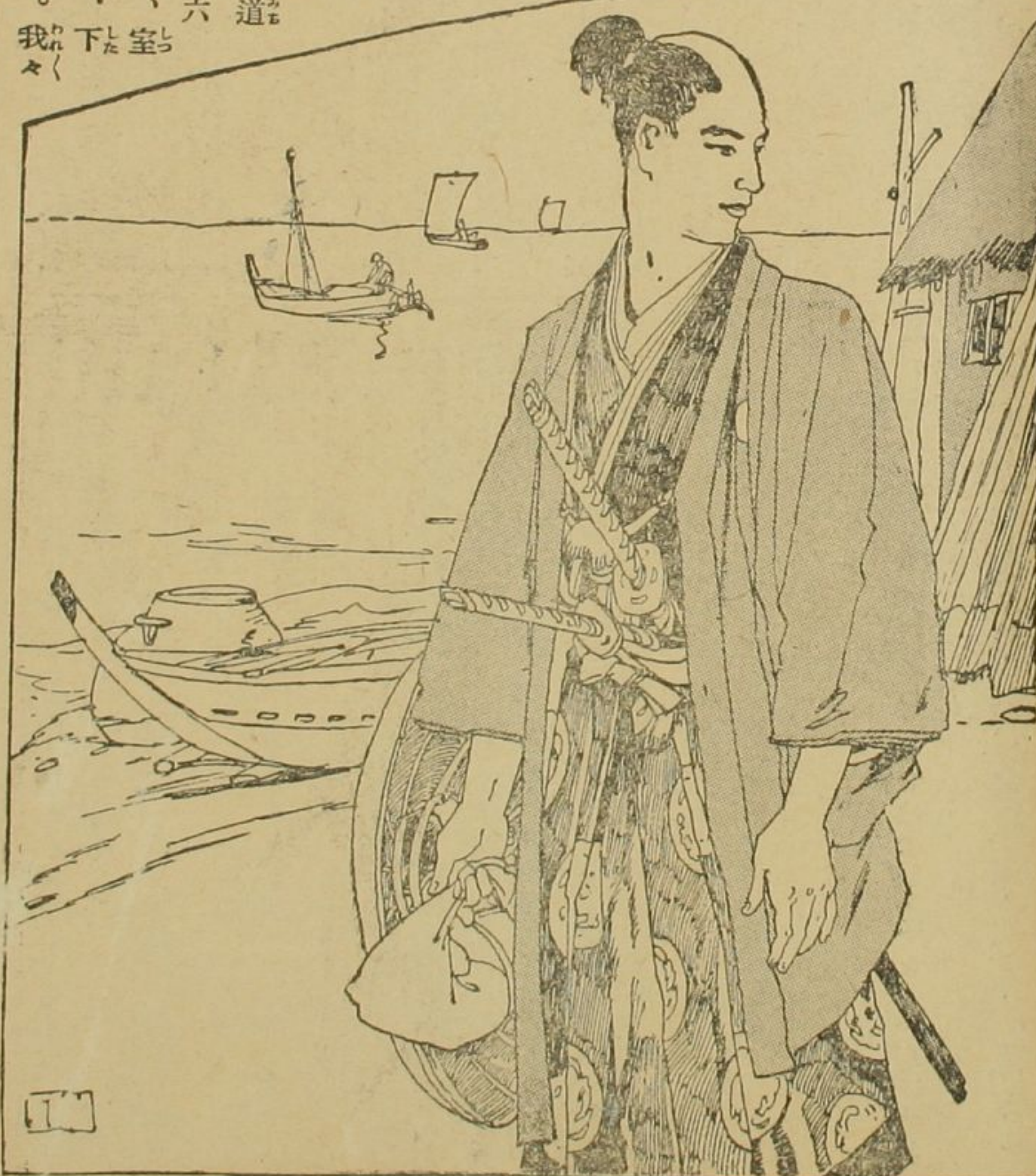
先生の東京行は、御用召であつたのである。是は後で、聞いた。のだが、佐渡に於ける先生の徹底的な排佛毀釋の實行に一部の年から、強い反對が起つて、政府に讒言した

ものがあるので、東京へ行けば、すぐ免官になることを、先生は知つて居られたといふことである。それで辭表を出されると、折り返して、御用召があつた。先生は、三國通りを

早追で行かれ、我々は、その後につゞいた。

東京では、深川萬年橋の側にあつた長州屋敷に、前原一誠君がゐられたので、そこへ落ちついた。前原君は、當時、参議であつて、後、大村益二郎の死後、兵部大輔を兼ねられた様であつた。先生よりは、四歳の兄に當つた。颯爽たる風姿を備へたところ、流石に、先生の兄事した丈あると感じたことがある。

屋敷は、二階に十疊の間が二ツあつて、其の次が、確には記憶せんが、十五疊位の室があつた、上の間に先生達二人、次には荷物を置いて、屏風でしきつて中央が通り道であつた、十五疊の間には、我々書生が、六人ほど居つた、二階には我々の室に隣つて、室があつたが、不用なのでしめ切つてあつた、下座敷には、走り使ひの下男が居る丈だつた。我々書生は飯の給仕、夜具の上げ下ろしはしなかつた



様だが、客の取次は我々の役目であつた、廣澤参議が退ましい西洋馬——其頃はアラビヤ馬と云つた——に、西洋鞍を置いて、和服で来たのを取次したのを記憶して居る、又誰か大官が夕方に訪問したが、其の頃我が輩は、重い鳥目を病んで居たので、丸で盲同様であつたから、二階の下から三段計の所から、踏みはづして下に落ちたことなども、記憶して居る。

三度の食事は、仕出し屋から辨當をとつた、参議といへば、今日の大官だが、此ういふ簡素な生活で、甘んじてゐたのだから面白い。

先生は、しばらく前原君と、同居してゐたが、免官になつて國へかへられることになつた。

「僕は、國元へ引あげる、足下等の世話をせねばならぬが、今の場合、何とも致方がない、つては、も一度、越後の遠藤のところへ厄介になつてゐて、その中、時機を見て、のり出すがよい」

是は、明治二年九月初であつて、我々に一篇の訓戒書を與へられた、其の内に、

「古の能く治をいふ者は、老莊韓非徂徠に如くはなし、予能く言ふと雖も豈其の右に出でんや、其の書を擧げて以て之を贈り且之に告げて曰、古の英雄諸葛亮と云ふ者あり、蓋し、忠實

の資を以て、韓非の術を蜀に治む、其の治管ならざるなり、後世の腐儒之を誹謗する者、豈能く四子を知る者ならんや、且つ孔明の志を知らざる者なり、云々」(原漢文)

日附は九月四日、尙ほ、老子、莊子、韓非子、鈴録を我々に一と揃宛贈られた。

「これ文、讀破すれば、治國平天下の道は判る、折角、勉強しなさい」と云はれた。

先生は大の徂徠信仰者であつたから、徂徠を老莊と並べて、稱讃して居られた、従つて、明の李攀龍や、王世貞の文などを好まれた様であつて、其の文も徂徠流、即ち李王流であつた様に思ふ、又我々にも、四家集(韓柳李王の撰文集)論語微、徂徠集、學則などを讀むことを奨励された、又右の文中「豈其の右に出でんや」の一句は、先生の面目を、ありありと寫してゐる。

今迄、世話をうけてゐた先生に別れることは、情としていかにも忍びなかつた。さり乍ら、國元へ引あげるなら、どうも致方ない。

「せめて、品川迄、御見送しようではないか」と、品川迄先生を送つた。

先生は國へ返られても、我々の事を始終、心にかけて居られた、

たと見え、明治三年三月三日の日附で、我が輩の兄浩、小出、眞龍寺の三名宛でよこされた手紙に、

上略山川小川の二生如何ん、想ふに當に勉勵舊の如くなる可し、相見るの日爲めに聲を致すは、吾の望なり、下略(原漢文)

又四月二十日眞龍寺宛の手紙に、

上略山川小蘇(我が輩を云ふ。我が輩兄弟を)何ん等の状を爲す、拜書に及ばず、下懇を致せ。不一(原漢文)

四月十二日
鬼谷上人坐下
源 居正 頓首

とあるのでも判る。

眞龍寺智海の斡旋で、危い處を切りぬけ、佐渡の孤島にわたつた我々亡國の二少年に對し、思ひ設けぬ款待をして下されたことは、我々の胸に深く銘じて居る。

我が輩は、其の時、先生と別れたのが、最後となつてしまつた、其の後一年許で、明治四年の正月に、我が輩は洋行して、歸朝したが、明治八年であつた、其の年に先生が上京されたことはきいたが、かけ違つて、會見することが出来なかつた。

さう此うしてゐる中に、間もなく、萩事變の爲め、先生は、刑死された譯である。

小川亮は明治三年の十一月上旬に、東京を發して、萩に向

つた、萩に止つて、先生の訓陶を受ける積りであつたが、萩へ行つて見ると、藩の制度が、他藩人の滞留を許さなかつた、是は大樂源太郎の騒動の後だつたので、他藩人の入り込むのを、好まなかつたと見える。

前原君と先生との斡旋があつたが、遂に、許可せられず戻つた。亮は剛直で、責任觀念の強かつた武士の標本的の男で、士官學校第一期の卒業であつて、相當に材幹もあつたが、世渡りは下手であつた。

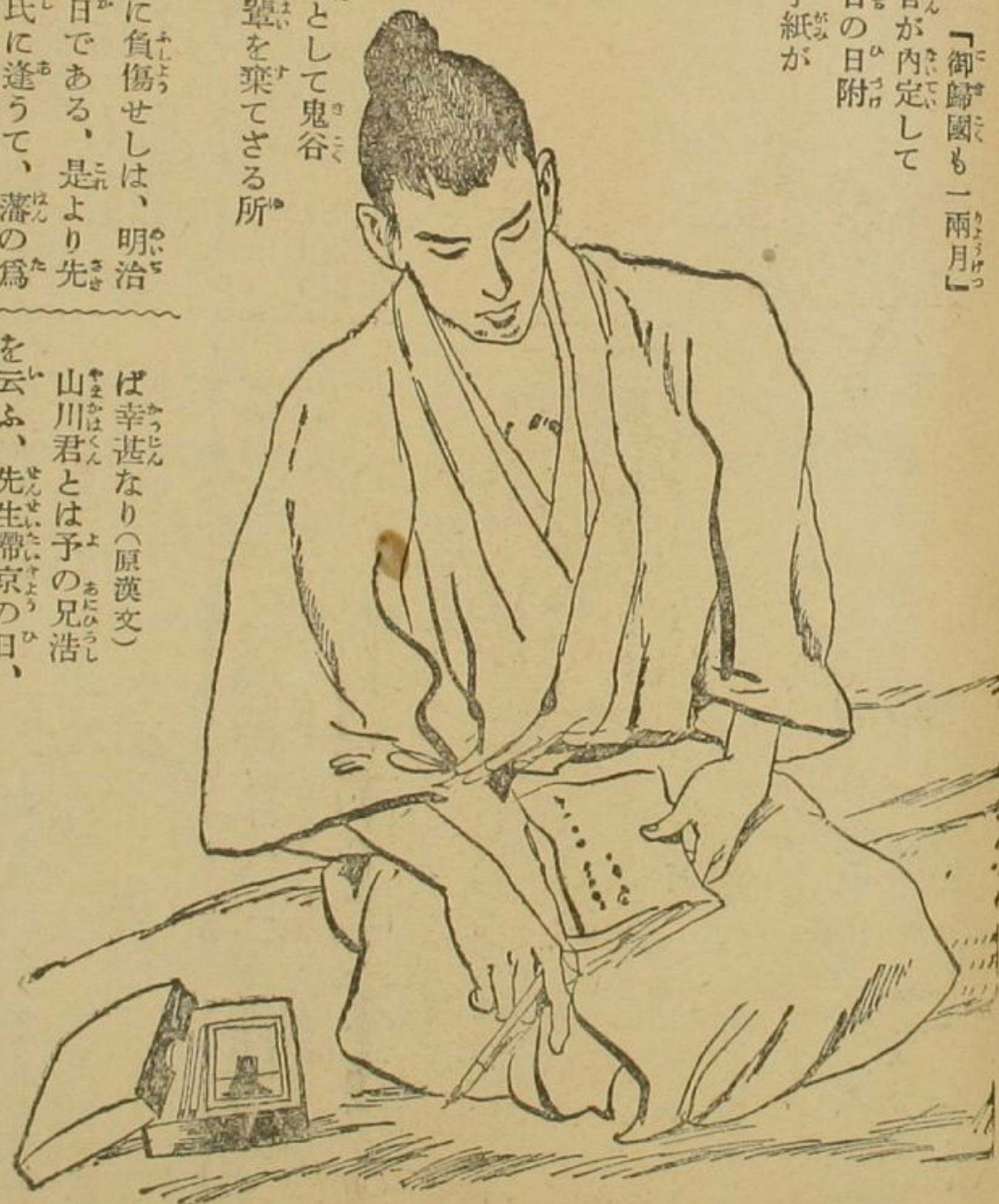
四、從容たる最後

先生が、官職を辭した裏面には、他の讒謗もあつたものと思はれる。前に云つた通り、佐渡の寺院取りこわしなどは、随分手ひどくやられた。先生によると、佐渡が、孤島なるにもかゝらず、寺が多過ぎる、一體僧侶などといふものは、無學遊惰、愚民を欺かして、勸財を事とし、袖手坐食してゐる、天下の遊民である、従つて、寺は國家の贅物で、無用なものであると云ふのだ。そこで由緒ある寺以外は、皆取りこはし、僧侶は還俗させ、佛具は取毀すと云ふ、大英斷を下した。これが反感を招く動機となり、且又、讒謗を受ける原因となつたのかもしれない。當時、我々は、年少であつた爲、さういふ問題に對して、

此の書面の日附は、二月十七日なるに、「御歸國も一兩月」とあるは、不審である。此の頃先生の免官が内定して居つたものでもあるか。先生が十月十六日の日附で眞龍寺と小出光照に宛て、送られた手紙がある。

「品川の別れ」として千古と成る、想像の餘り時に夢寐の中に形る、爾來近況如何ん吉人には天祐あり、兄輩恙なきを知り、欣慰昂んぞ勝へん本月五日郷に歸り、父母に膝下に見ゆ是則ち喜ぶ可し、大村生傷と雖も死に到らず、果然として鬼谷の術資つて以て行ふ可きなり、是天の兄輩を棄てざる所以んか敢て以て白す」(原漢文)

大村生は益二郎氏を云ふ、同氏賊の爲めに負傷せしは、明治二年九月四日で、其の歿せしは、十一月五日である、是より先前原君の紹介で、眞龍寺等の人々が、大村氏に逢うて、藩の爲めに遊説した、傷けども死せないので、鬼谷の術を施すに猶餘地あるを示されたが、大村氏は、遂に歿した。右の書面の追申に、山川君輩恙なきや否や、別に啓せず、爲に寒暄を左右に致さ

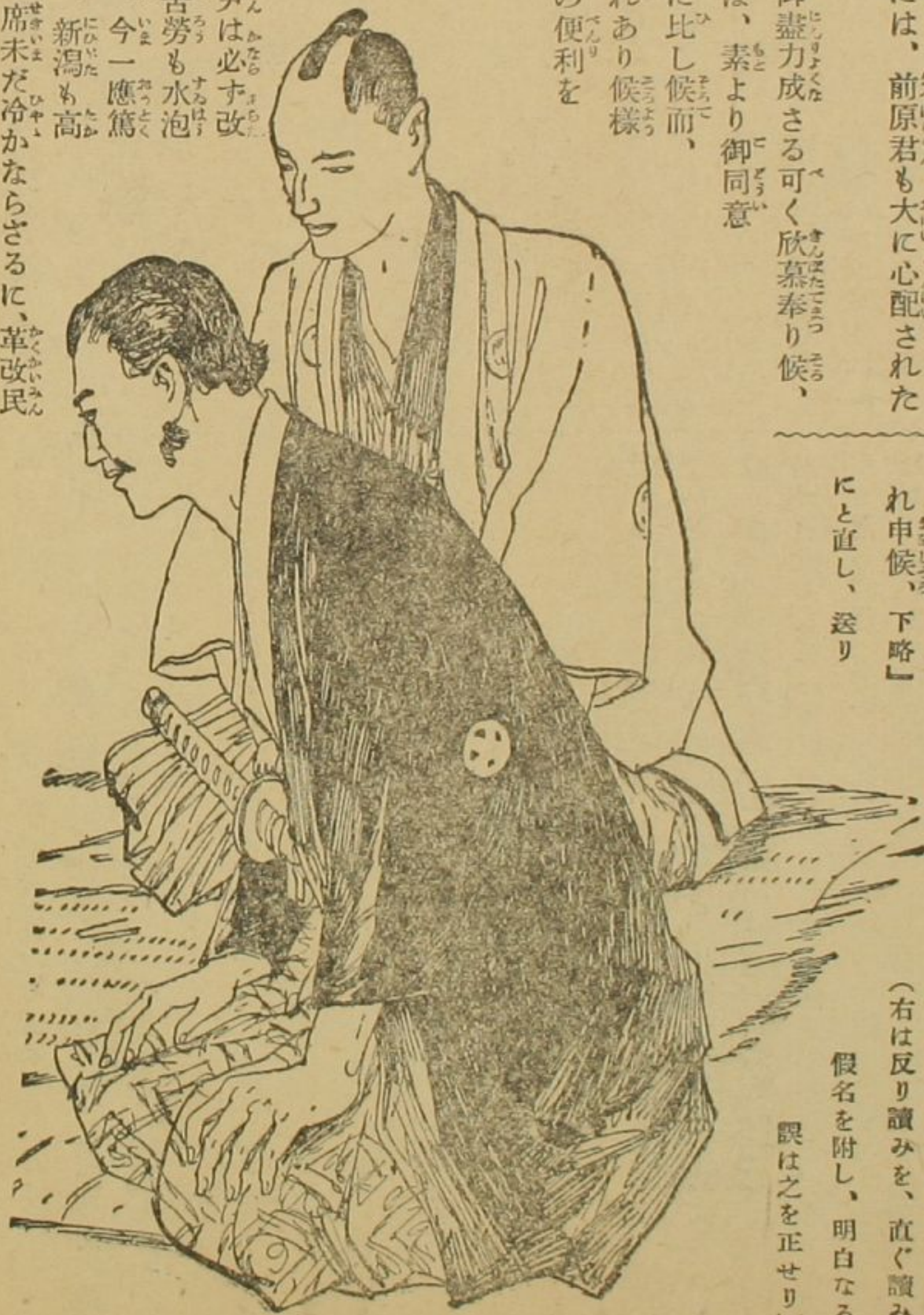


「幸甚なり(原漢文)山川君とは予の兄浩を云ふ、先生滞京の日、浩は屢先生と會見した。裁事變の際は、先生は、參謀として、前原君を助けた。前原君は、先生が國元へ引きあげると、間もなく、參議兼兵

様だが、客の取次は我々の役目であつた、廣澤參議が呈まし

委曲を盡すことは出来なかつた。後年、在新潟の前原君から、在佐渡の先生に贈られた書面の寫しが手に入った。書寫の間違もある様だが、大體は判る、先生の徹底的な、排佛毀釋の政策には、前原君も大に心配された模様である。

「前略 御渡海後、益々御勇猛御盡力成さる可く欣慕奉り候、陳ば寺院合併の御新政に付ては、素より御同意の事に御座候處、北國は諸國に比し候而、信佛殊に甚しく、種々の訴之れあり候様子に相聞き申候、素より民其の便利を知り候迄は、新政は議論之あり候は、古今同一に御座候へども、終には服し申すべく存じ奉り候、然る處、老兄御歸國も、一兩月の間に之ある可く、左候て新尹は必ず改め申す可きにつき、折角の御苦勞も水泡に屬し候は、必然に御座候間、今一應篤と御熟考之あり度存じ奉り候、新潟も高須(高須梅三郎なるべし)去りて席未だ冷かならざるに、革改民



心凶々(脱字あるか)恐れながら朝廷の事遂に成す可からずと相察られ候間、* 愚夫愚婦の嫌疑事は爲さず候て姑息に仕り置き候方れ申候、下略」

にと直し、送り

も亦他日の一手段かと考へら (右は反り讀みを、直ぐ讀み假名を附し、明白なる誤は之を正せり)

部大輔の重職を抛つて、同じく萩へ引退した。同じ長州人ではあつたが、木戸孝允、山縣有朋、井上馨、伊藤博文といふやうな面々に對して、好感をもたなかつた。前原君や奥平先生は、眞正直に、俗に云ふ竹を割つた様な性質であつたが、木戸等の諸士とは、性質が餘程違つて居つたのが基であつたのである。その不平が、萩事變となつて現はれた様である。前原君と先生とは同心異體、新潟以來、傾盆の交をかさねてゐた爲、事を共にされたのは、素より其の處である。

然らば、先生等は、どういふ點について、時の當局者に反對されたか。前原君一黨が、島根縣廳の屬官清水清太郎(同郷人)の間に答へられた處によると、次の六ヶ條であつた。

- 一、地租改正の件
- 二、權太千島交換の件
- 三、當局大臣沒責任の件
- 四、士族善後處分の件
- 五、當局者投機に關係の件
- 六、征韓論拒絶の件

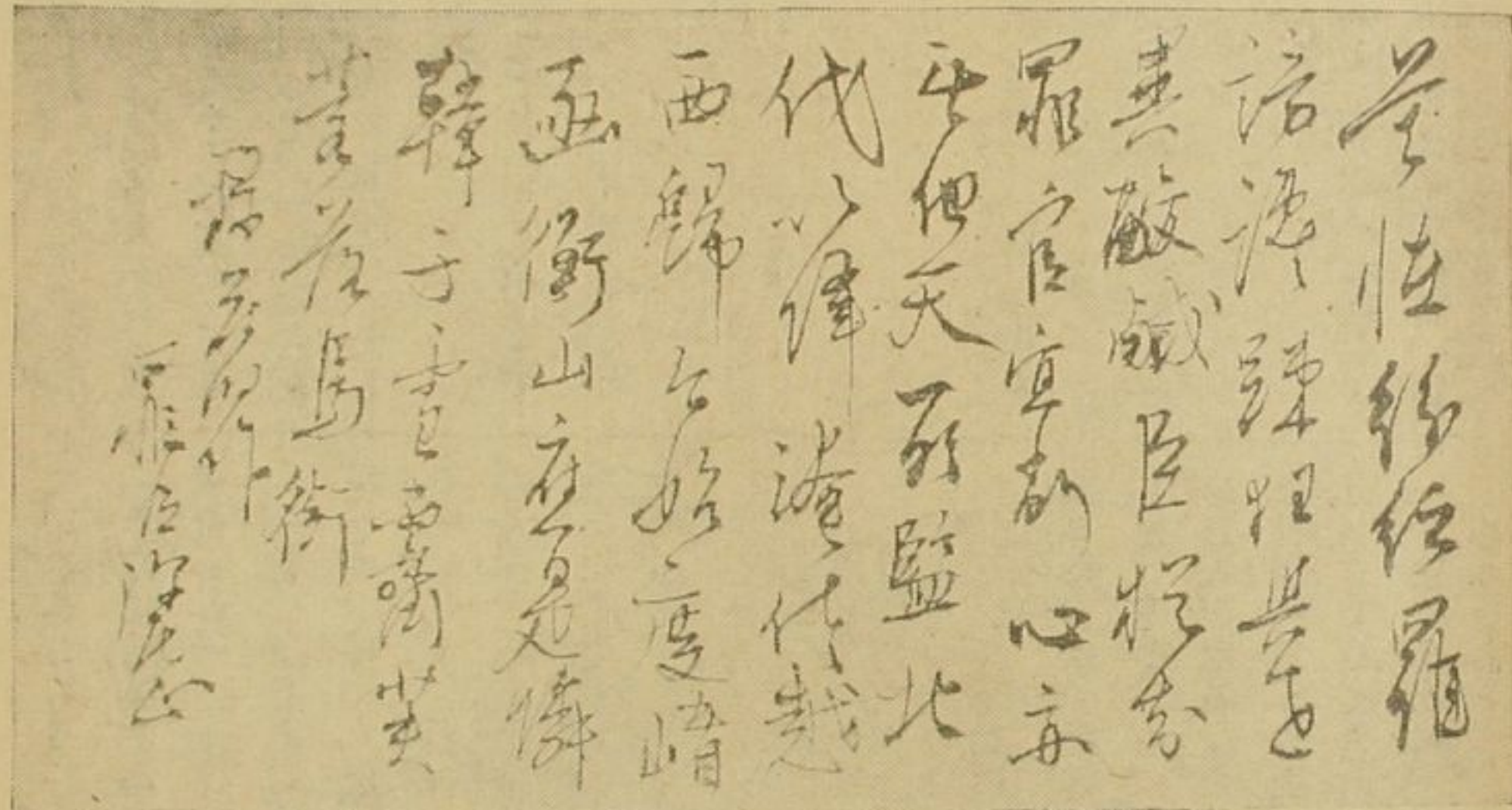
で、明治九年十月二十八日に、同志が萩の明倫殿に集つた。然るに翌十一月五日には、前原君以下、雲州に於て、島根縣官の手に捕へられたので、ほんの少しの間の出来事であつた、先

様だが、客の取次は我々の役目であつた、實業家も出て、

怯なるや、中略足下又善く書を讀み文を屬す、某太だ之を善す、足下若し早く樞を軍門に負ひ、平生作る所の詩文を献ぜば、某足下の爲めに哀訴する所あらんとす、下略(原漢文)

降吉が此の書を贈つたのは、降を勧むるものであつたが、斯る無禮な、惡罵を羅列して其の目的を達し得べからざるは火を暗るよりも、明らかであるのに、何と考へたものか、且つ先生常に、鰻を釣るに工みなるを、戯れ誇るより、釣鰻に例を引いたのは如何にも眞面目でなく、國士に對する禮を知らん者である。我が輩と小川は、先生と別れて後、越後の遠藤家に起居してゐたが、其の中に、津藩の處分も濟んだ爲、明治三年再び上京した。

翌四年、北海道開拓の爲、政府は人材養成を必要とし、留學生を海外へおくる事になつた。それには寒氣に馴れた東北



奥平先生が江へ與へた絶筆の詩

の諸藩から選抜するがよいとあつて、我が輩は、確には判らんが、同藩の先輩永岡久茂の推挽をうけ、海外留學を命ぜられた。永岡も、奥平先生とは、意氣相投じてゐた同志であつた。ところが留學中、政府の方針が、留學生を免ぜられた爲め、一時、苦境に陥り、困苦艱難の海外生活を終へ、明治八年歸朝した。翌九年、帝國大學の前身開成學校の助教採用された次第だが、それもこれも、其の初、奥平先生の特別なる庇護をうけた結果であることは、云ふ迄もない。然るに、先生は、罪臣となつて、刑死せねばならなかつたのみならず、留學生として、推薦の勞を取つたと思はれる永岡も、その一黨と共に、思案橋の、千葉行きの船中で、捕縛されたが、其の時、同志の井口慎次の刀

生も、此の時、前原君と、始から終迄、行動を共にした。此の事變の時、前原君の名で發表した檄文若くは書面が五篇あるが、前原君の口書によると、凡て先生の作である。即ち、甲、徳山の同志に贈つた「昔者我忠正公云々」の書。乙、縣令、關口降吉に贈つた「降吉足下二三年來云々」の書。丙、鎮臺司官に贈つた「鎮臺司官足下維新以來云々」の書。丁、廣く天下に傳ふる「太政大臣三條實美云々」の檄文。戊、長防二列の人民に傳ふる「御一新以來諸大吏云々」の檄文。

此五篇である、中んづく、丁の檄文は、先生が力をこめて、作られたものである。

十一月三日、山口縣令、關口降吉は、左の書を先生に贈つた。上略前原の書に云く、我に銃槍三千と、大砲八門とありて、西郷の贈る所なりと、噲音の戰に賊軍の發砲稀少なり、又人を四方に馳せて、煙硝を購求せしむ、是實に聲言するところは、虚喝に出づるか、戰陣の事は自ら鰻を釣るに異なり、蓋し又評して某を釣り、其の肉を割きて之を烙かんと欲するか、大丈夫事を擧げて總に西郷を藉りて小兒を恐嚇す、恐嚇し得ずして而して形見れ計漏る、抑も何ぞ鄙なるや、陣軍未だ山を越えずして而して千里の外に守りを撤して走る、又何ぞ

様だが、客の取次は我々の役目であつた、質屋等に...

に觸れて、太股に重傷を負つて、遂に卒死した。永岡には妾があつたのみで、外に家族がないから、死體を受け取る人がない。我が輩兄弟、赤羽四郎の三人で受け取つて葬式をしたが、三人ともに貧乏人なので、僅かばかりの費用に困つて、衣服などを質屋へやつて金を調べたことであつた。先生等を裁いた、たしか臨時裁判所の判官は、土佐人岩村通俊であつた。國事犯の死刑は、巨魁の死刑に止め、決して多殺すべきでないといふ意見の下に、前原君及先生以下すべて八人を斬首の刑に處した事で、他は懲役に附した。

「もう一度、裁判官に會はせてくれぬか」と、先生は、警吏にさう云はれた。

「宜しうまいります」

警吏等は、みな其の人格に敬意を表してゐた爲、特に同情をよせて、岩村判官に、此の旨を傳へた。

「奥平謙輔が、もう一度、判官閣下に會つて申上げたい事がありませんさうで」

岩村は、それをきくと、不快さうであつた。

「もう宣告がすんで居るではないか、奥平は天下の國士をもつて任じて居るにも拘らず、此の期に及んで、彼を申すのは、國士らしくもない男だ」と冷罵したが、結局、先生の希望を適へ

「いづれの御藩か」

「薩摩であります」

警視が應へた。

「左様であつたか、さて、格別の御國風、中々他藩の者の爲し難き御取扱ぶりである、感じ入り申した」

その時、丁度、警視に隨伴してゐた物江孫六といふのが、私の友人石井收氏の弟であつた。

「君は、どこの御藩か」

先生は質問の矢を物江に向けた。

「會津であります」

「それなら秋月梯次郎君を知つて居るか」

「はい、小官の恩師であります」

「それは、不思議な御縁だ」

先生は、奇縁に驚いて、秋月と應答したことなどを、物江に話した後、

「君が秋月君の弟子なら、好都合だ、今日の有様をくはしく傳へて貰ひたいものである」

さう先生は云つた。

「東京へ、もどりました折、のこらず申すことにします」

「ぜひ、さう頼む」

「つきましては、小官にも、御絶筆を願ひたいと思ひます」

て、法廷でもう一度相對した。

「本職に陳述があるといふのは何か、もう宣告はすんで居るではないか」

判官は聲をあらくした。すると、先生は、傲然として云つた。

「いや、外でもない、貴官を煩はしたのは、一擧の際、天下に向つて出した檄文についてである。あれは、拙者が執筆したものだ、率直に申せば、後世に傳ふべき天下の名文章だと心得て居る。されば、貴官の高配によつて、是非、あれは湮滅せぬやうに、斡旋をたのむ」

何かと思ふと、此の一條、先生の自ら高く矜持してゐるさまが、此の一事實によつてのみでも、十分にうなづける。

岩村判官も、何か、先生が泣言でも並べると思ひきや、意外の陳述だつたので、驚嘆したと傳へらる。

處刑は、中二日おいて、十二月六日に行はれた。時の縣令、關口降吉は、此等の謀反人に對し、個人として十分の好意を示した。その日も、酒肴の贈物をしたが、先生は、談笑、平日と少しもかはる處なく、何うしても、今將に死につかうとする人とは思へなかつた。警視寺原長輝が、紙筆を持參して、先生の

前へすゝんだ。

「最後の思出に、存分に御揮毫下さる」

さういふと、先生は、寺原警視の顔を見乍ら問うた。

「心得た」

先生は、快く引きうけて、半紙に、舊作の詩を認めた。(掲載の寫眞版がそれである)

「怪しむ莫れ、紛紜謗讒を被むるを。疎狂、世と酸鹹を異にする。臣猶罪を知る、官宜しく削るべし。心も亦他なし、天の監する所。北伐以降、佐越に淹り。西歸、今始めて、晴園を度る。衡山、應に是れ韓子を憐れむなるべし。雪霽れて、芙蓉、馬衡に落つ。録舊作 罪臣 派居正」

これは、我々と品川で別れた後、先生が函根を越えられる時の七律である。

物江の死後、石井氏は次の書翰をそへて我輩の許へ届けてくれたので、先生の絶筆は、今、我輩の手に保管されて居る。時下御多祥に候、半奉賀候、陳者別紙奥平君の絶筆七言律、莫怪紛紜云々左右に呈し候、明治九年十二月六日、奥平君將に死に就かんとする時、愚弟物江孫六儀、警視寺原長輝に隨行西下し刑場に列し候、奥平君詩集弘毅齋遺稿秋月章軒先生の跋中我郷人警官某と有之候は、孫六の事に候。(中略)賢臺と奥平君とは御縁故淺からざる事故、此の絶筆は賢臺に於て、御所藏ありて、然るべくと存候に付、御贈申上候間、御受納下され候はゞ、本懐の至に存候。敬具

大正十三年五月十六日

石井 收

○徳川頼命侯の追懐法を因者飯塚の
施説に定む

○石油時載に連載し予雅依おし
十二回を以て終りを去く

○飯後五十山野墓地に墓を以て
見の遺骨を合葬せんとし地下室
を作り玉塚を北城に造らし墓石
を建つ十二月に成り皆成る工費を十
三万圓也

○施説書篇に振出しその説を掲ぐ
白鳳社の考証も掲ぐ

○関西に旅行し京都に桂離宮二條

城大覺寺二考院寺持院新安寺云
来唐者と述ぶ

○関西旅行の由余田中吉山伯を蒲原の
莊に泊めて一泊す伯も早大因者飯
塚せんを古くも十数回を履きたる
伯に贈る

○余の筆費百とある集し予下歴を施
法書名に定む

○飯味と寺院の稿を施徳美の四に
す

○亡友三山侯の三十三回忌記念会を
上野新養軒に召み余日會者として一

坊の決説を為し且つ記念法を創りす

○小野村 四十年進退公舎を早大に譲り余
一坊の進退決説を為す

○龍徳慧星に在木内春録を譲ひの二行
を定す

○雜論「唯并」の焼に應じ余が早大在る
時決説練に就ての行を定す

○龍徳慧星の四行「茶」の行を定す
味の行を定す

○坊の進退の進集出故に於て在木内春録の焼
に應じ所見を其紙上掲げ

○龍徳慧星の四行「茶」の行を定す

す

○余が印崎元比前屋と奥平の行を改定
此の日本及の行を定す

○春城池巻の出版を思ひ三月八月十日
春城の行を定す

二月印刷成り後数ある三十

○春城池巻 亦二冊の行を定す
ハ成る

○大改毎の行を定す
傷と補元の和名茶の長編を定す十日

間「流」り連載

○「流」り連載「と」定す

の爲り此を修し又序文を修す
○太陽の囑に應じ、道進博士の別業におり
てのおねを定む

○大改の終り大隈侯の追悼会を一心寺に開き
たること余早大の代表として臨み堂前
に追悼演説を爲し、侯の追記の印刷
成りたる分二冊を堂前に置ます

○北行大隈侯追記の宣旨を爲す

○関西の放送局に依頼を交け北行新
支紙の書きし譯を放送す

○大隈侯常居の世に、北行の新和歌集、
およ

○朝吹英二侯と追憶談を定む

○青島社の爲の隨筆文を『集』の目
録を修る余の編輯を未年正月より
十二冊續刊の業也、卷首に余の隨筆
語を収む

○余の平生の苦心の大隈侯八十五年史
三冊外に、風雲偉觀の八冊一冊漸や
く成る

○右の頒布を爲す侯の爲の支展の費は、
後金を三日間大隈侯館にひらき
存りん事の大入

○北行の終り更なる大改の大丸善改店に

十日間漸く、余為めの大改と此迄輯録
する不あり連日大改する

○ 早稲田大なるに海内を遊も終おさる為日
淡利田有餘を没せんとし、妻友令と
俱備し余又妻友令に推せり

○ 都下書山骨著書高の為め東美代
・中郡に於て頼山陽を誦演す

○ 早稲田の報く大隈侯八十五周年史定
成の所感一編を撰す

○ 中央公論十二月號は内田魚尾の隨
筆・頼山陽に對する忠告の稿海出
づ余の性格の歪曲を悉す

○ 中央公論余の寄稿を需む北城雪嶺
と鈴木牧之・兼山東・京山の長公命を
授す、去年二月號に掲載の言也
○ 十二月中旬以後、世有新書の墓
を度す

○ 日清印刷会社の改革も行ふ昨年の
争議に願みする不あり也

○ 本年圖書の購入約五万部代價四千万
に上る

○ 爪哇傳説の終るに余が大隈家出納補
への長を命を備考しと收む

○ 帝即位記念として募金して圖書を

新築せんといふこと十数年延び本年初
め完成

○ 出版部ハ詳義部ニ多少の改革を行ふ
○ 早大の會計観定ニ余委スニ今計
九委員長トシテ數り合ヒ重公漸ヤク
決定ス

○ 世婿天次君三と楳枝、伴ハ新居ニ為ル
由途初めニ余計の東山温泉ニ送ス

○ 楳枝中徳城野池部ニ前時男比念の野
便向里の丸根云々ト判り觀ニ且ツ村成
の爲メ一協の演説を有ス

○ 本年五月十二日高が印刷會社の拂込を

行ハ五月十四日十一月七日ト製此年受
残りの書意買置臺を受印シテ金と
以つて平身拂込充テシテ

○ 吾等約五合資の出版部附屬代理部
と解散シ七丸養ニ海濱リ流ス

○ 此年友人花相早連惣心雨を喪ハ

○ 出版部改革ニ着手ニ費十三万円

○ 牧口義矩も往年借受けテ石山清界

○ 友人小川為次郎病歿モ千円借金證書
遺物トモ贈ス

○ 内務大臣石油社長を退キ在社中余の
援助も多トシ七千円の賜を受ク

明治廿五年三月八日(第三種郵便物認可)



號外

大正十五年十二月廿五日 (土曜日)

編輯人 井 照 義
發行印刷人 井 照 義
東京市麹町區有樂町一丁目貳番地 株式會社大政毎日新聞社東京支店
東京日日新聞發行所

聖上崩御

天皇陛下には廿五日午前一時二十五分一崩御
あらせられたる旨宮内省から發表された

新帝踐祚

御用邸御坐所において

天皇陛下崩御あらせられたるにつき皇室典範第十條
天皇崩ずる時は皇嗣即ち踐祚し祖宗の神器を承く
の明文により皇嗣たる皇太子裕仁親王殿下には同時刻を以て直ちに
葉山御用邸なる御座所に於て踐祚あらせられ祖宗傳承の神器を承け
皇位を繼承あらせられた

元號は「光文」

樞密院に御諮詢

元號制定に關しては樞密院に御諮詢あり同院において慎重審議の結果
「光文」「大治」「弘文」等の諸案中左の如く決定するであらう

「光文」

元號は「昭和」

本日詔書發表

本日左の如く改元の詔書發表された
朕皇祖皇宗ノ威靈ニ頼リ大統ヲ承ケ萬機ヲ統ブ茲ニ定制ニ遵ヒ元號ヲ
建テ大正十五年十二月廿五日以後ヲ改メテ昭和元年ト爲ス

昭和は書任の實書尙典の百姓昭明協
和万邦の取
御謚は未定、今先例より年号を取
り天心天皇と稱し奉るものとす



られた、一世の大儀式を御機嫌う
るはしく終らせられたことを国民
はどれ位

お喜び 申上げたことか
聖德太子の御謚は「孝徳天皇」とよめ
いた、さりながらこの頃からおほ
はれぬ御慶の色が拜せられ初め

労働御機嫌があらせられるが一
兩年前から尿中に糖分を見るこ
とあり昨秋末時々座骨神経痛を
発せられる
▲大正十五年十一月十一日（撰政
宮佐賀行啓御取止發表の日）発
表十月下旬以来御風気のため御
発熱、気管支炎の御症状を拜す、
御食氣幾分御減退

喪章の心得
洋服には幅四寸の黒リボンを左腕に、和
服には蝶形リボンを左胸に付する事

国民の服喪

一年の喪を二期に分ち
一期と二期は各五十日
男子の喪服と女子の喪服

大喪には、皇族及び一般国民は、
いづれも一年間喪に服します。服
喪の日数は崩御の日から起算する
もので、大行天皇及び皇太后、太
皇太后のためにする大喪を「開」と
いふのであります。この一年の喪
は三期に分け、第一、第二期は各
五十日とし、残る日数を以て第三

黒で光沢のないものに限られて
居ります。そして黒紗の飾り
をつけず、飾りもすべて黒で
なくてはなりません。第一期、
第二期とも同様です
帽子、袖飾、髪飾り等等はす
べて黒色で、大喪喪及一年の喪
には黒チリ紗を後ろにたれませ
手袋、扇、傘、靴、靴下すべて
これも第一期は黒を制つて居り

な消化せず堪えず胃に何か滯つ
て居る様な気がする續いて食欲が
だん／＼衰へて来て平素三杯の御
飯が二杯に減りおいしい御馳走も
少し箸をつけただけでもういや氣
がさす胃は常に重く食物が時に苦
がかつたり
時に酸がつ
たりする段々
々病勢進む
につれ胃痛
烈しくなり
嘔氣を促し
口からは悪
息を放つ舌
には苔を蔽ひ便通は不規則で軟便
もあるが多くの便秘す更に進むに
つれ便中又は吐物に血液を混じ身
體はやせ衰へ皮膚には痛に特有の
悪液質を呈して来る此時胃の内容
物を檢するに鹽酸の量甚だ少なく
乳酸は却つて増加し吐物は何時も
珈琲色を呈して来る胃癌は女子よ
り男子に多く三十歳位より七十歳
位の間に起る遺傳説も學界に唱へ



| | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

| | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

十二行

○此夏京都：淋ん此物京都大本を新打回書録去
 から、近衛家をも承久の寄託せん此白石の自書
 本唐の典を示さん此其法大略をノート書
 きつけ格草中にも収めて置置の此が白石の書
 や家選の改文、長又ひあるを言し
 を取ることか出来さうか、此利の本道楽
 るその全文か載つてあるから、こゝに収めておく
 此の初板中一家選が此考本と唐本とを唐典
 を刻さん此かよのを槐記の記多を漢書よか
 のこと此の教年、自ら冊帖、校訂さん、漸やく集
 を得る此此せん此時、校訂さんある此のむひとくま
 む此といふ有るも苦心淡んある譯せん、んを記さす此

○本道楽

のい道成ひ

○近衛家藏書の中に新井白石が近衛家熙公へ献納した自寫の唐六典がある先づ其献納せし時の書簡を左に

乍恐言上

一唐六典へ到来候付奉献候かねて言上之通某印等有之恐入奉存候次に末巻に水痕有之これはぬかせ候へばぬけ可
 申事に奉存候得ともわささしをきたるにて御座候き其故は先年東國大地震之時某文庫壁土われ墮申候地際猶日
 *其候ニ付とかくは大火可有之ニ存し即日彼文庫を修補候ニ程もなくはたして大火出来候に付て書籍等取入レ立
 のき申すへきに及び其存知候へ新たに修補壁土いまた乾申す火勢熾りに候へ、必定又われ出来候て火内に入り
 可申と存候ニ付引返し家の後の切岸のケ所の下に穴をほらせて公儀より御預ケの御書物並某秘藏の書籍等櫃ニ取
 入レ彼穴中ニ入レ疊ニ三疊上ニならべ土を切かけ候て立のきし時は家ニ火うつり候中を罷出候家やけ盡候て即時
 引返し見候處ニ文庫も無恙候扱又彼穴の事ハ岸の上なる他家やけ落候て焼のほり候間下人共してさうさうに取の
 けさせ見申候處ニ家ノやけ落候勢ニ土をうち散し疊ニ火うつり候てやけ申候ニ付てしきりニ水をそゝき候て火坑
 の中より櫃共を取り出し申候其時分下人等火傷を蒙り候輩も少々有之候キ此時ニ櫃中へ泥水入り候て彼是書籍汚レ
 申候しかれさも此書籍共一冊も焼失ノ事無之ハ某精力を用ひ候故ノ事ニて害を通レ候事ハ殊更秘藏の事ニ存し候
 てありしまゝにいつれもその汚をそゝき不申さしをきたる事ニて御座候今更その汚のまゝ差上候はん事いかと奉
 存今日もこれをぬきとらせ可申事を彼是承合候へこも日數延引もいかゝとまづそのまゝに差上候事且ハ憚入奉
 存候此書籍始は某心眼ノ力を盡し寫得終は某精力を盡し災害ヲまぬかれ候物にて御座候處今日御文庫ノかたすミ
 へも納め置可申御事ハ幸不可過之奉存候已上

京
 大
 久
 托
 九
 托
 九

十二月十三日

其書籍には書簡にある通り毎冊に「天府圖書記」といふ白石の蔵書印が押捺され末巻の後半分程の處よりして左
上端に水汚が染みて居る猶末尾に此書籍の経歴を詳述したる家熙公自筆の識語があつて「攝政家熙誌」と署名され
てある此寫本の原本は明嘉靖甲辰（二十三年）の重刻でそれを筆濃形の紙に影寫し之を八冊に分ち紙數四百三十枚一
行二十字詰二十二行である此字數を假に本文と割注とを合せて一枚凡六百字宛とすれば總字數は二十五萬八千字程
である、それが一点一畫情容なく修始一貫正楷にて寫されてある白石も此時分は學業研鑽の最中であれば寫字にの
み全力を費やす譯には參るまじく何れ寸陰を惜しみ夙夜勤惰俗に云ふ夜の目も寐すに讀書の餘暇を利用して寫した
ものであらうが幾年月を費して卒業したか兎に角其努力には感ぜざるを得ない、家熙公は随分と色々なことを書き
又謄寫もして居られるが署名されてあるものは絶無といつてもよい位である、然るに此識語には署名せられ殊に官
名まで署せられてある其識語の草稿を先づ白石に下げ示されたと見へて白石から其文章に對し竟見八件を別紙に認
めて返璧した書簡もある依之見此公が如何に此書を尊重し如何に敬意を表せられたか伺ひ知られるのである。猶公
自筆を以て校訂を加へ又參照をも加筆し且つ訓点までも施されてあるやら近衛版の唐六典は此寫本を底本として版
刻せられたのではなからうか攝政といへば人臣最高の位である其人に斯くまで尊重されたからには白石多年の勤勞
も優に酬ひられ且つ光榮の至りと云つてよい其尊重されたことを裏書するため識語の全文を掲ぐ

唐六典者明皇敕宰臣李林甫等所撰百官經諱千古典刑也余蚤歲搜索四方未嘗購得以爲遺憾今茲幕下士新井君美卿命
來洛其爲人豪邁卓偉讀書不撰何書學以適用爲本余一見之如舊識垂青話心不覺日之暮夜之且只恨相見之晚一日譚及

十二行

○本道樂

二

六典之事君美云昔講習之暇偶得一本手寫以珍藏焉謂備于覽可乎余甚喜之無幾送致之蓋飛驒以取來也且其言云此典
卷末斑爛乎有泥汚之痕也往年江府地大震山崩屋側書庫四壁道裂若龜文拆而後震動未息者彌月上下皆不安逸竊自以
爲不久必有醫收之變乃命匠泥其壁隙以修補之果大火藏書於庫中而去後以爲庫雖已修補泥新未乾硬火勢熾則恐又剝
落已回視其庫後地勢高如岸急鑿一坑於岸下取庫中官賜經籍等書所藏之書藏之一置埋入坑中以薦席安于匱上覆以
土塊此時爆聲響地火光接天奮然而衝出回首屋宇盡爲烏有矣再奔回赴埋書之處隣舍焚倒烈燄燎面急令僕卒徹巨燼掃
塘煨頻潑水於薦席而搜出書置於坑中故有匱中書典多泥水所染汚然鬼池魚之殃亦一幸矣所以不忍削其痕者冀諒察焉
余甚感之其人宏才謹慎今觀此典正楷端肅可謂勉矣又繕守備於未然發奇計於火速面令壁公私典籍於煨燼之餘苟非大
略過人孰能若斯哉古云歲寒然後知松柏之移凋余於彼亦云

寶永庚寅歲季冬日

攝政家熙誌

○次日得字奮忠行難録の多前二揚く
九七も并録す此方韓政廿二冊僧松雲壬申
の事蹟と録す巻首清沙金仲禮の序あり又
越前の小序あり此序に揚るに松雲の法孫南
陽とあり松雲手録の日記を揚す昂しと昂答
田といふ蓋し北條兵火仄焔の故に獲て傳うま
存するもの書中詮次なく其命名稱は改題
奮忠行難録といふとあり豊公朝鮮役我法
正の陣に臨み探偵しむるに此傍より清正書中
探偵記數冊あり又性湯劉府言事記
阿ふ松雲主ら清正に對して諍和條件の甚れ
理なきを極言し昂然曰威武に屈せざるの概

あり督府に向て言ふも亦因じ當時豫假
四事をも直まあるもの豈松雲の感するも
んや亦これ傳うし彼んは此も其の無き一
彼んは清正の卿の如何を以て實とすも則ち
清正の歎を斬つて之んを實とすも益くなく若
名するに松雲も此事も卷中に見ゆらば或は後
人の竊入するや否やを知らず然るも松雲こん
位の素氣無ん故傳へ入る昂然なるを得る
今歎松雲佐渡の後韓定相を以て言ふとん
一はんも受けし伽耶山海印とすに隱ふ所
るは韓定更らう此信を起し七執部に使せし
む松雲命を世帯日本二考あり三千の信書を

付ひゆると、その日本の都に素り種々の危険に極し
 道術を以つて免れんやといふか如き記事、信を重
 く能はざる也。此巻中、松雲の田舎に依りて書きたる
 一、亦諸書を巻取、松雲の注とす。其
 一、その興味を感ずるものあり、松雲の日本に使
 したる心り、其日語の類、涙び朝鮮に依りて
 といふ、松雲朝鮮に有名の俗言を其書に採
 取りて後記に、傳りて其書に採りて見
 て、後年日本に素りて其書に採りて見
 るものあり、日本に採りて見、此書に採りて見
 氣夏集あるものあり、此書に採りて見、此書に採りて見
 二、四史の資料、此書を採りて見、此書に採りて見

十二行



家祖米庵
藏筆に就いて

市河三陽

春城翁が家祖父の藏筆譜を掲記されたに就
 いて思つきの二三を述べさせて頂く。
 米庵の遺愛品が明治の初年に四散した後、
 藏筆譜にある筆は全部藤堂伯爵家に歸した。
 その頃私の父が再聚し得たものに二三十枝あ
 った。伯爵家が賣立てをせぬならば恐らく拙
 家のものと同じく先日地震に焼失したであ

らう。地震の後になつて山内香溪の家にも數
 十枝あつて、螺鈿の函入などもあつたが皆焼
 いてしまつたといふ事を聞いた。
 米庵の筆の集め初めは、子供の時からであ
 つて八九歳の頃に井子真といふ人から唐筆を
 何本か貰つた。其時は無我無中で習ひ潰して
 惜しい事をしたと自ら云つてゐた。此井子真

と云ふ人は、米庵の父寛齋や大典や栗山あたりと往來の有つた人であるが、詳しい事はわからぬ。若し御教示を賜はらば望外の仕合せであります。

米庵は初め百筆齋と號したが、後に半千筆齋などの印を刻して居る。天保五年頃に七百枝あつたので多分千にも達したらう。わたくしの獲た小山林堂書畫文房圖錄稿本で見ると、米庵何々と銘をつけて陶筆を支那で拵へさせてゐる。蒔繪、螺鈿、堆朱、玉などの筆は右圖錄の中に收つて有る。彼が筆に苦心した事は碑文にも出てゐるが、自家用の筆工は初めは生花堂大巖伯儀兄弟であつた。生花堂の額は寛齋が書いたと鵬齋の撰した伯儀の墓

文に見えてゐる。後には文魁堂が是に代つた。米庵の書は俺の製した筆の御蔭だと生花堂が放言した爲ださうである。此は父が戯れにわたくしに語つたのであるが、先づはソナ事あらう。試毫帖は伯儀の弟璋の新製した筆を試みたものである。

春城翁の筆管の分類は興味深きものであつたが、三ッ洩れたものを拙藏してゐた。それは勿論唐筆であるが、管も帽も皮革を用いたものである。ポケット用などに妙であらうと思つた事と、靈芝の柄を軸としたのと、今一ツは細い草を籐のやうに編んである扁平なる形のもので、それをぐる／＼と巻くと圓い一種の彙箒のやうな筆となる。



山紫水明處

東山を背に負ふて丸太橋の上に立つ、何處の家でも表側の美々しさに比べて、裏手はひさくるしいものであるのに、この川岸ばかりは案外美はしい、ひさくるしい何一つも見當らない、何時もながらに京は美はしい。その直ぐ橋の袂に古めかしい茅葺の小さい家がある、それが今話さうとする山紫水明處である。

一體山紫水明處といふ名は水西莊の一部の

書室の名である、水西莊は頼山陽の京の住居一體の名で、山紫水明處はこの茅葺にかせられた名である。

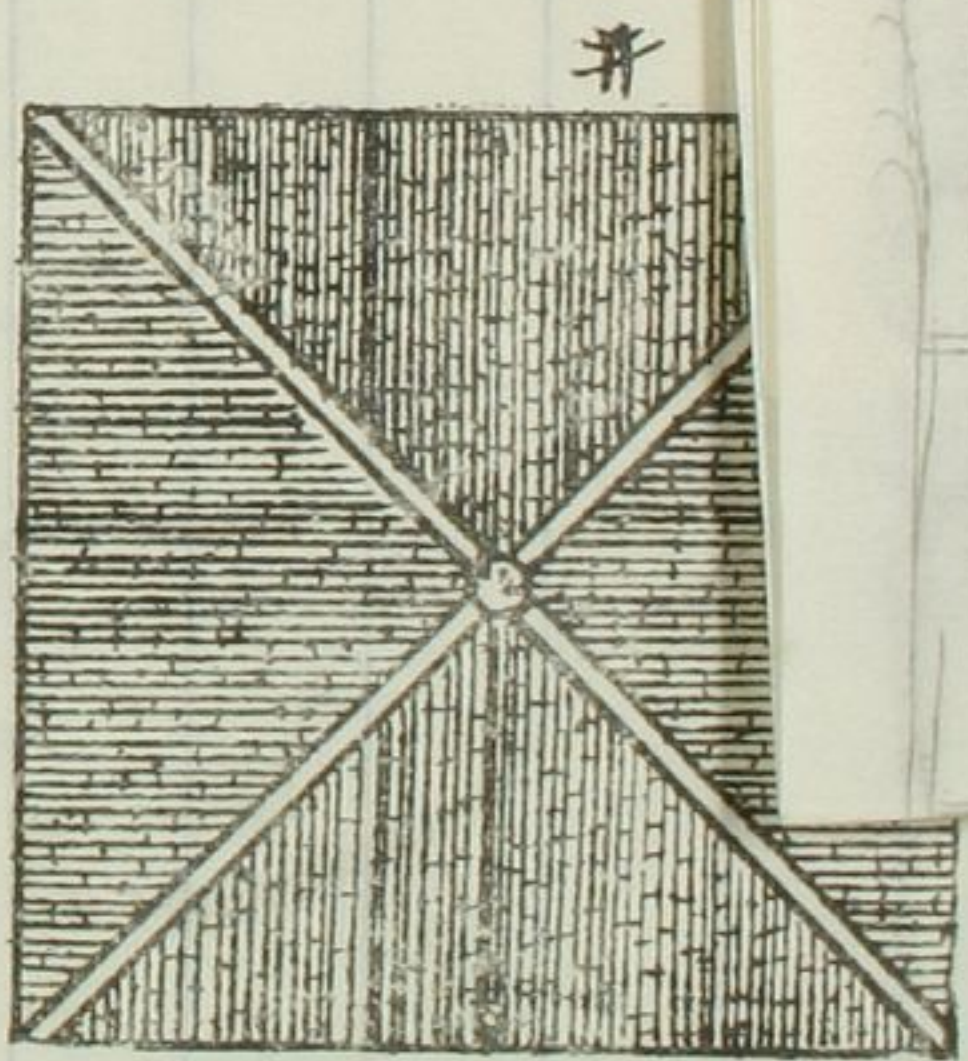
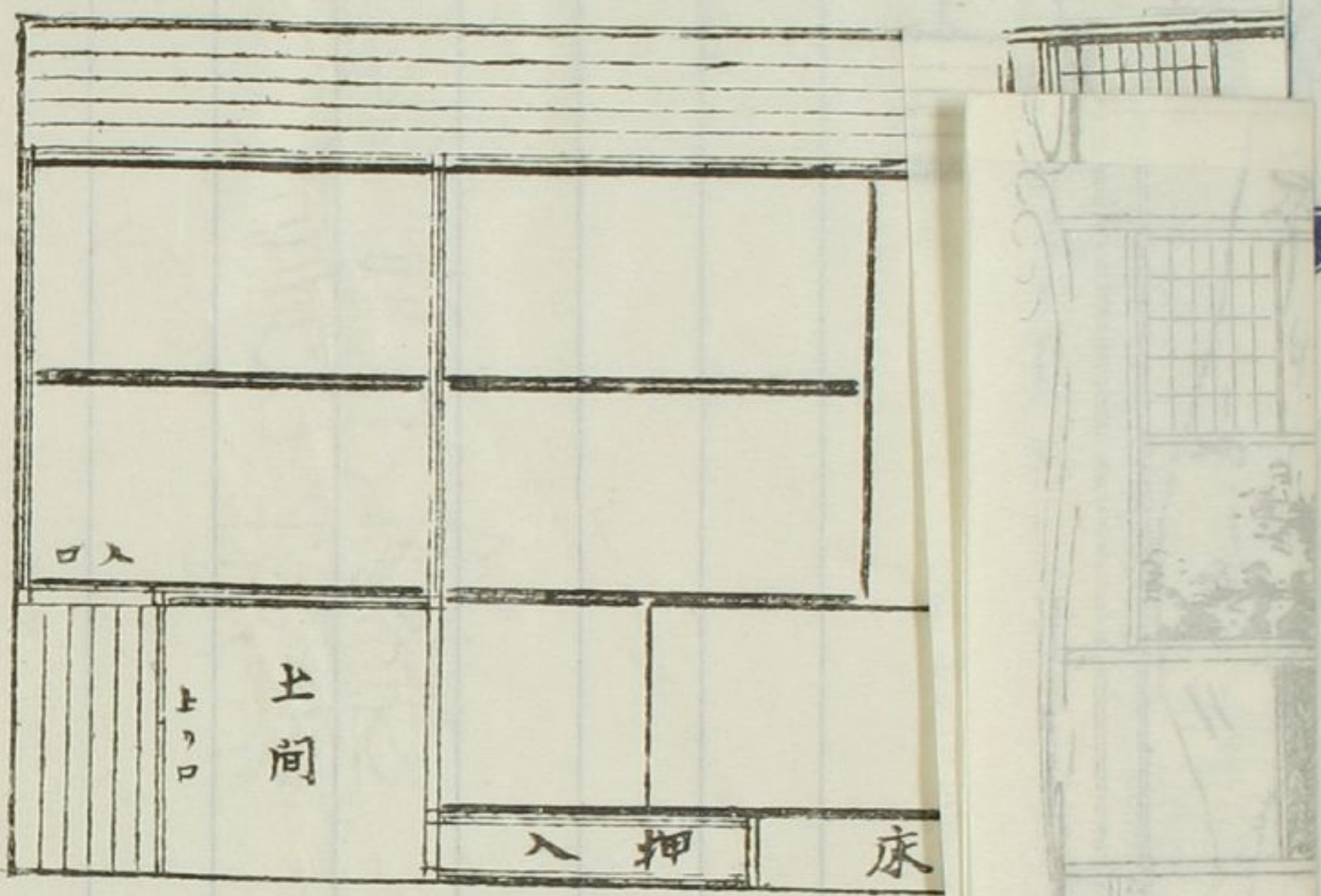
植込の中の飛石傳ひに山紫水明處の上り口がある。狭い板間から上つて二疊敷がある。次が四疊半に大目の床が付いてゐる。床の側に地袋がある、地袋の底は戸になつてゐて、庭の方からも出し入れが出来るやうになつてゐる。地袋を地袋で終はせないで、水屋變り

に應用した處に山陽の才氣がうかゞはれる。天井は四阿屋に見るやうな漢竹張りになつてゐる。障子の腰、壁の腰、全部割竹の網代張りである。川に沿ふて縁がある。縁は支那風の欄を有つ。凡て落附た煎茶趣味で一貫してゐるが、明るいに失し、爲めに落付がどうだらうと思ふ程であるが、決して落付の悪い部屋でない。東山を出た朝日は部屋の中までさし込む。欄の下を流れる水の音も高いが邪魔になる響ではない。坐り心地のいゝ書室である。欄に倚つて坐して見る。直ぐ下を透通つた水がどん／＼流れてゐる。ほんに蒲團着て寝たやうな東山は黒く静かに横つてゐる。種々混雜した對岸の家々が尠なかつた當時を考へながら、東山一體を想像する。浮んでくるものは一幅の繪である。狩野の景色でない土佐

景色である。廣重の松はない景文の柳がある。かうした眺めをもつ山紫水明處には庭はいらない。いらぬ庭を山陽は床の背後に置いて、この部屋から尠しも見やうとしてゐない。山陽は何處までも好きなことをする人である。再び四疊半の中に坐を移して偲ぶ。先人の「數行遺墨涙關子」の床には太湖石が置かれ、「卻向東南費一室」からは「要將三面看梅花」のである。夏は多い窓を開けば「要納東西南北風」得たのである。さうして山陽自身「庇得琴書已覺奢」程堆積されてゐた日を想像する、竹田を思ひ、棕隠を思ひ、眼閉ぢれば梅花書屋がある、水榭吟人がある。その窓の下には雲山雨意がある、清江汎月がある。ほんに山紫水明處は現在残存してゐる故人の書齋中ても好ましい一つである。(楠瀬日年)



野山
 千鳥
 山
 千鳥
 山
 千鳥
 山



山本家の家

二二

十五のナニ

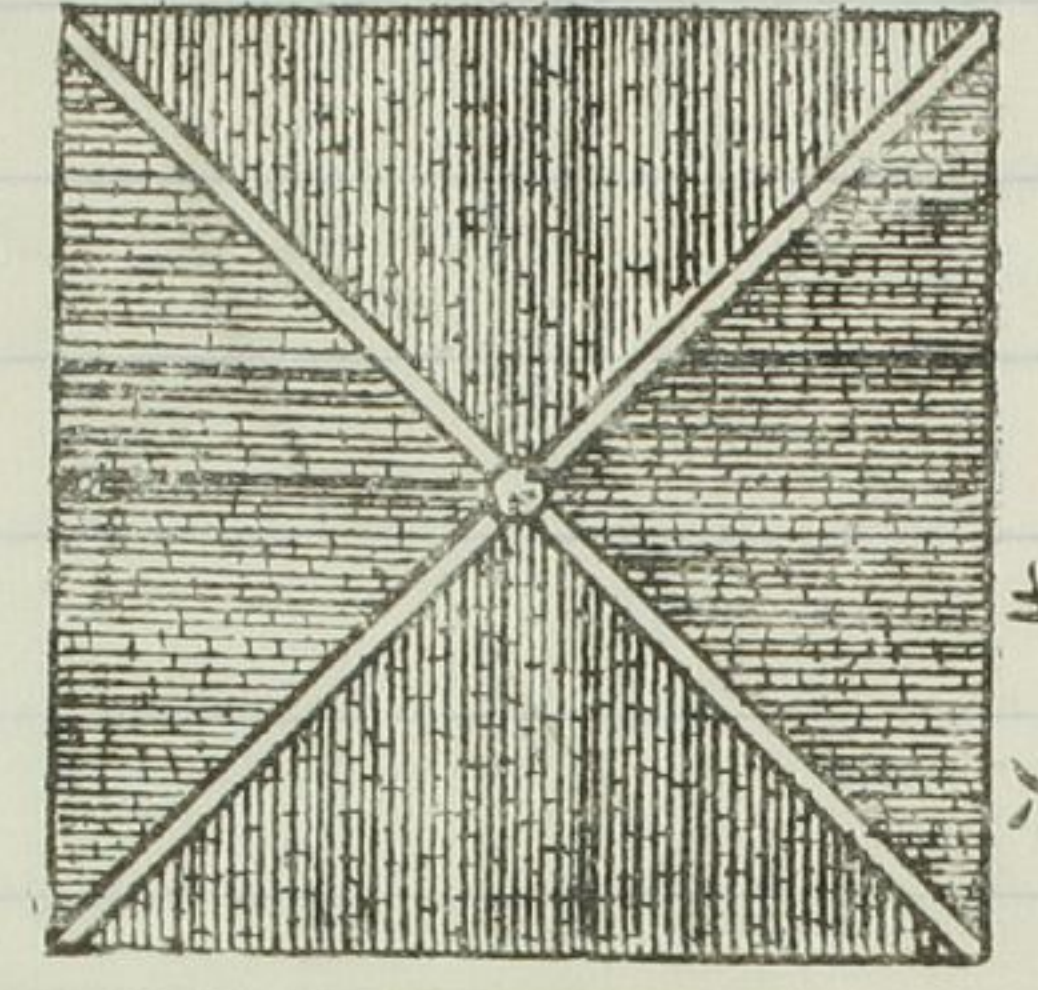
日中



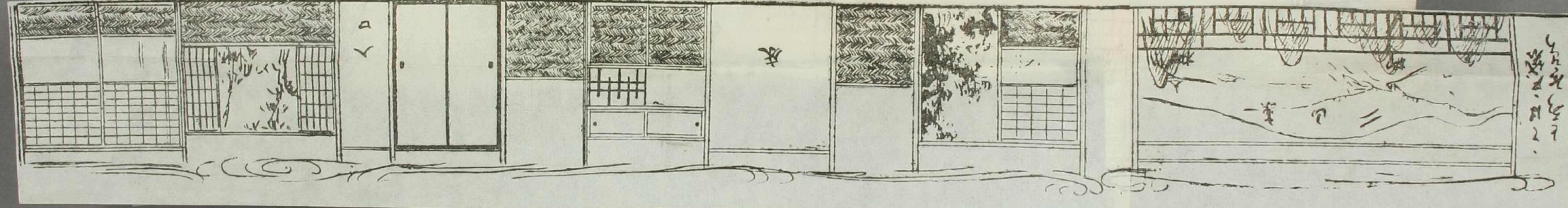
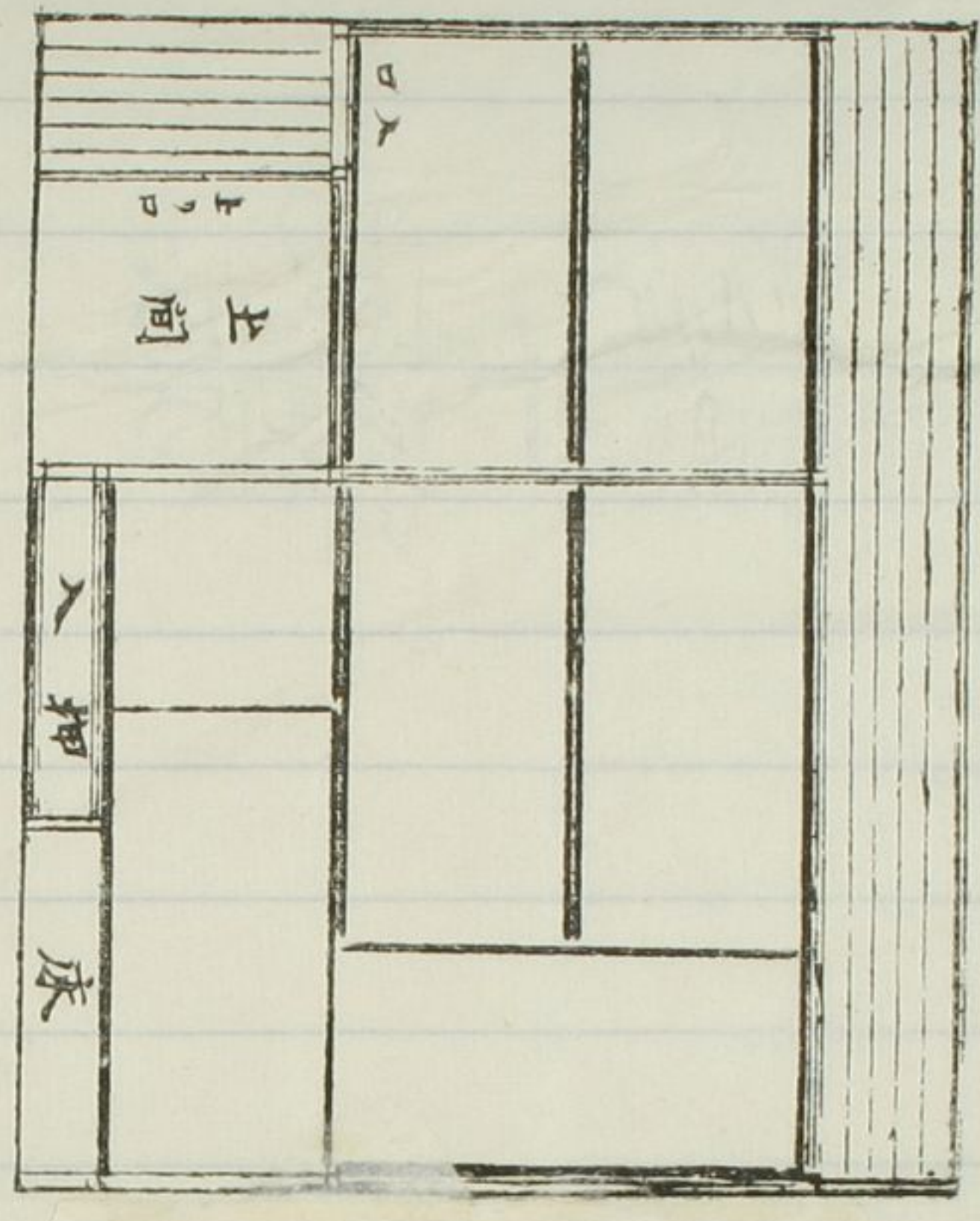
の徳川時代にちよ其他人ある人の流儀の例
 とし七先觸を記し其の先觸の様式を
 知るよの禰の、儒と書解と道う古文者反
 中、其標下とす、一紙を得た、其ハ
 大勅進権僧正の役人、其先觸を
 従武州枝橋右衛門善光寺正の先觸を
 包紙に其内記あり、此包の中を者堅
 ニツ物をつくりたる書付あり、首端に印
 を載す大勅進と刻し、其印あり、次人送
 四十五人あり、其内詳を記す、其終り

大勅進権僧正御用向抄通るる来物
 七日曉七時 東霞山書物

山本大助の
二の
一
山本大助



天井



山本大助の
二の
一

山崎書面の人馬無尾蹄と差出并川
々船渡才差支をし松肝煎火下松
尤御堂之賃状お拂より改むり以上

乙八月朔日 信州善光寺別当
大勧進権僧正後人

上田丹下印

從板橋宿 宿、河原中、
善光寺迄

此沢：休泊附 あり

某日の下々宿との旅店の人入捺印あり

より末に左の文あり

近る本文之紙に改む所あり差出
とて松入有、尤休泊并人馬が為
掛合役人未書出立と差出紙に
松入有、松入録、要用品一色松入
差出、百善見寺着次中平速を
坊にて差出、以上

中の紙包紙に綴りあり、附箋二ヶ本あり、
川端才の事由を録し、各宿驛才者仕者の事
也

ころも先簡の款式の大要を知り

昭和元年 五月廿廿日

○視實等像儀記一名天地共和儀軌(初編)
 一冊の流十年八月能く如く作田代石の著す
 所、坊間(判)此者三巻出(七中)一昔像儀の
 圖を名んば、當り又の協會に文化陳列を有地
 の折、借考けを陳列し、等ことあり、其の圖を(此
 蒸)原抄る(誰)の所、抄る(や)か(は)も(と)ん(と)
 正しく原若(存)居(也)を(ま)ま(は)つ(か)し(き)
 心地し(北)者を(踏)ひ(き)り(漢)み(も)ち(あ)り(は)は(地
 棟)の(知)る(心)に(苦)心(し)た(る)こと(を)も(同)各(体)に(あ)り(し)
 録(し)あ(る)中(に)又(物)心(者)の(こ)と(も)あ(り)、以(石)が(其
 心)を(終)る(文)中

世人多く唯此等の視象(一)道(二)を以て(三)其(四)の(五)心(六)を(七)察(八)する(九)

思ひ講(る)く(其)の(實)象(觀)る(は)ず(是)を(以)て
 この(理)を(明)か(す)ん(と)祈(り)て(後)念(を)と(忘
 る)に(至)る(途)に(之)れ(を)為(め)る(當)り(幽)栖(の
 地)を(卜)白(の)と(異)て(戸)を(閉)ち(故)く(室)を(暗
 く)し(畫)燈(を)掛(け)て(沈)思(熟)考(する)こと(に
 じ)二十(有)三(年)一旦(豁然)と(せん)こ(の)初
 實(實)象(の)理(を)覺(ゆる)す(この)時(予)西(京
 嵯)峨(に)あ(る)土(人)余(を)呼(び)書(行)燈(と)名(く
 或)る(夜)其(の)當(り)の(處)に(以)て(題)して(回(る
 七)ろ(こ)し(る)ま(る)と(せ)ぬ(め)し(あ)り(書)行(燈)是
 凡(何)の(名)為(り)し(知)ん(事)余(爰)に(於)て(予)の(嘉(ひ)是
 の)點(あ)を(知)る(身)其(權)に(云)ふ(可)なり

とあり、雲梯を心く、就て曰く

其概を心へ、扶関の筑後久留米の産田中

久重より元ト後天正十一年、その他は法工、肥

後述本の産松本去古三のりより三三三の白工

別才あり故に鳥獸の虫百尾者本三三三の白工

の書く寫真多し故に見るに其の真力三三三の白工

の世人に外流人形のみと知る流百枚を祀り三三三の白工

也。この其概の肉を肉運する山あり是れ

まを三中の制をさるるより、此く、美巧なる

るを記し生れりゆりの玉をたれ、治人形を止

まらざるを記し、又鏡板の圖書、車東

の産狩野辰信より也

○漫話の流初年しの揮傳ると言ふこととせざる内荒

干紙不用とあり、籍助の國あり、こゝに二三

をぬむ、才一提燈圓、の流の初年、初述、初用

或、初奏、位、或、官省の記章、とあり、し其様

或、三、夜、河、其、人、の、階、級、を、知、ら、し、め、る、こ、と、あ、り、の、流

十三年日東保生舎此の産生る大隈侯の友而

中、とあり、出、つ、い、ん、保、陰、會、社、の、始、め、と、す、る、こ、と、あ、り、

才、三、姉、人、の、圓、の、西、南、の、役、者、の、大、錦、侯、の、友、而

西郷隆盛の肚の中ハ漫話と揮入し、とあり、

西郷夫人の肚の内ハ標置とあり、也

昭和元、十二月廿五日記

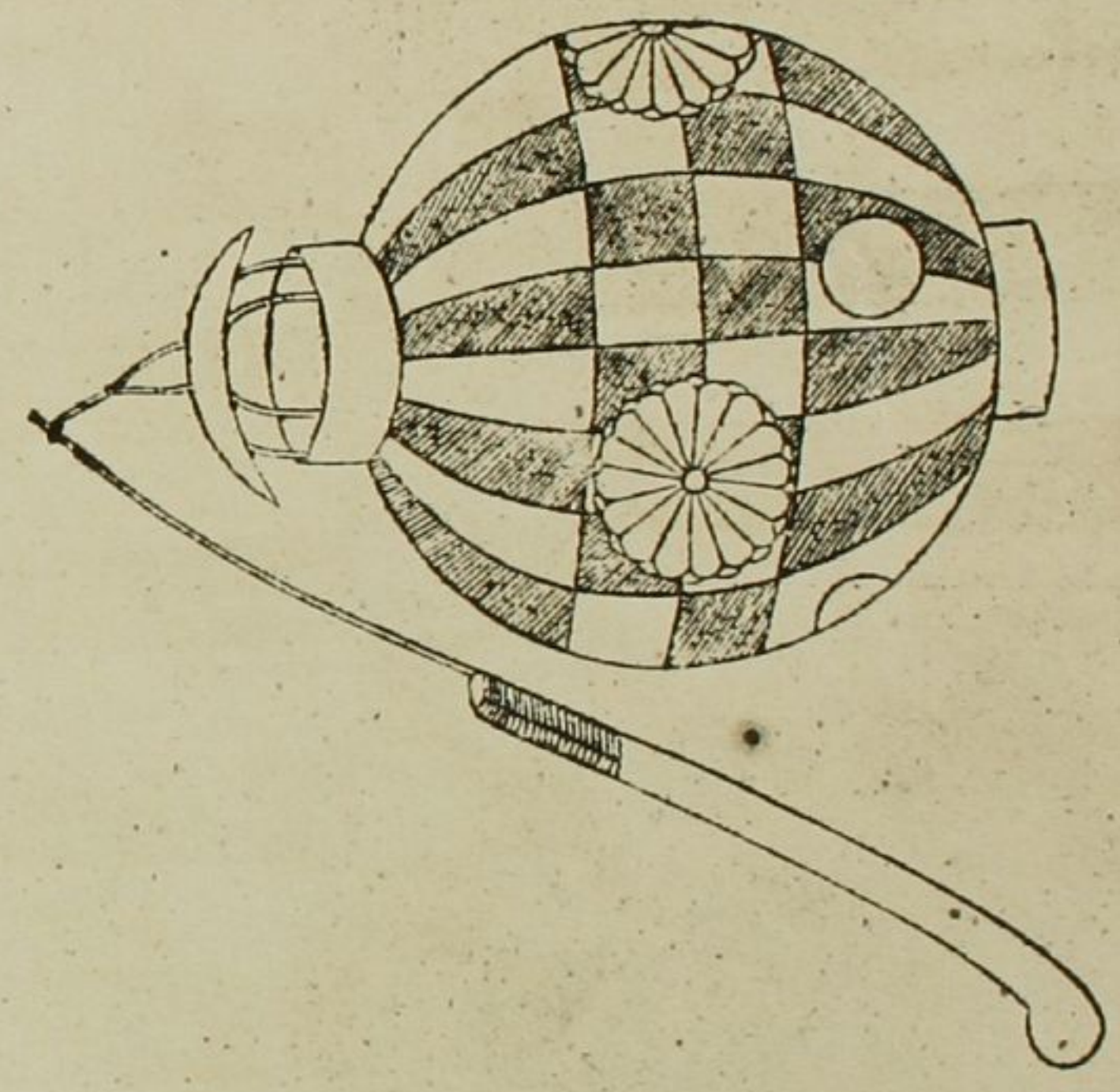
日東保生會社廣告

今日社會の力... 保生會社... 設立... 宗旨... 資本... 利益... 分配... 役員... 事務所... 東京市... 日東保生會社

明治十三年三月... 日東保生會社... 東京市... 日東保生會社

日振替

(赤印)





豚魚有舌

萩原 又 仙

一、千蔭大人の端唄

古來歌讀み乃至風雅の嗜みある人々により、淨瑠璃、小唄の佳作ある極めて多い、富本河東の行はれた時代は、江戸繁昌を謳歌された頃で、其の河東節には抱一上人の作で自筆のまゝを唄本としたのが少くない。其の他にも名家の文藻になつたもの拍案の妙ありと言つてよい、特に小唄メリヤスに於て、當座の興に筆を走らせたもの、早く其の作名を逸しはしても、名調は歌吹海の寄せては返す波の響きに、今尚ほ唄はれてゐる。彼の英一蝶が作に『眞乳沈んで梢に乗込む山谷堀云々』など、角田の清流に夕陽傾き、眞乳山の水面に落ちた影へ、猪牙似足の遊興舟を漕寄すれば、映る聖天の森へ乗かけるやうな風光、言得たりといはう。故友磐瀬淺々翁より千蔭大人作の、いな舟といふメリヤスを書いて贈られたのを、珍重して茲に掲げる。

いな舟　いな舟のいなにはあらず、あひそめて、いまはこがる、最上河、あうたその夜のうつり香を、わがそでながらだきしめて、ねてもねられぬ床のうち、すゞりひきよせするすみの、おとさへ人にもるゝやと、ふみのもじさへ秋霧の、空にさえゆくかりかねの、おほつかなしやとぼし火の、ひかりもうすきねやのうち、あかつきちかき草の葉ならで、そでにもかゝるつゆの玉。

此唄に添へがきがある。

ついでに云ふ、おほち千蔭の君、ある時稻城をとまひ給ひて、舟遊したまへるに、矢立の筆して、いな舟といふめぐりやすを作りたまへり、其舟に折ふし萩江藤次も乗あひて、節をつけ三味線あはせしとそ、その唄今の世にもてはやせりと、そのことは爰に云へり。

千 年

六

淺々翁これに注していふ、稻城は吉原扇屋といふ娼樓の妻で千蔭門人、歌も中々出来たり千年は千蔭の孫にあたる拙老の家より養子にゆきし人なり云々。

二、はさみ言葉

此節は掃地絶えて無いやうなのは、挿み言葉である、十年以前には花柳界などで『あかひかたかいかいカマカダカコカぬカ』『すニカニないニ』と云つたやうな當座勝手にカの字を挿みて相方にいふと、相方もニの字を挿みて答へる、彼等の仲には豫め咄しよい、通じよいものを使ふて相互の即解をなすものである、是れ鳥語雀話に過ぎねど、乃昔に遡りてみると、明和七年刊行の『辰巳の園』に載せてあるのに。

セケンとコのをコひキのかカねケをとコリキにキツた。

いきまかにしきここうク志厚人名さカんがカもコつてくくるクカからカそこれケまカでケといキウクてくクんケなカさかいキ。

此の様に複雑な言葉はカキケケの韻を挿んだ傾きがある考へるにカ行は言葉の掛り輕ければ挿みよいものと見ゆる、實は予も茶屋酒に酔ふた過去には、是れ等を口眞似したものだが、極めて下卑たことである。同書の中に這んな小唄がある。之れは又た挿み言葉の因て出来た感がされるものであるから載せて見やう、おいらを、狐が孕ませて、御亭になるとは、妾や、やです、やです、やです、やです、やです、眞實、やあではなけれども、人目恥かしけりや、妾や、やです、やです、やです、やです、やです、いはねエもんです。

此の小唄に孕みてか否か、或老の咄しに、嘉永年間に『やだチユ〜といはねエもんだチユ〜』といつた小唄が酷く流行つたといふ事である。(嗣出)

